514
162

後藤朝太郎著
おもろい支那の風俗

574-162

隨支那の風俗

大正
12.8.18
内交

支那一輪推車の合ひ乘り氣分

支那固有の轎子（チャオツ）

支那固有の馬車（マーツヨガタ）馬車にて馬は驢頗る趣きに富む

支那北部細民住居の一例（アンペラ家）

田舎の飯食店

「瀬戸物直しありませんか」

北支那農村の情味

上海に於ける支那樂の合奏

支那商賈の街衢と路面のペーヴメント

江蘇省揚州高州公廨前庭
モザイック上に大笠を携へたるは著者

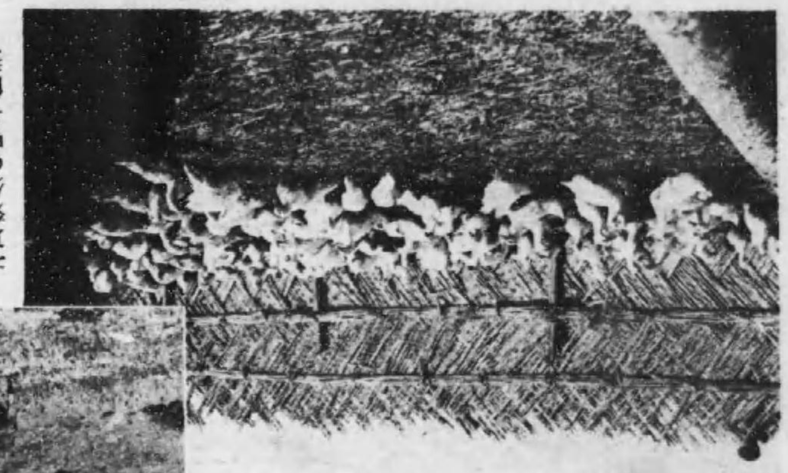
北京城外路傍の剃頭的（理髪屋）

上海附近の水郷

北京城内皇城根宮殿建築の一部中門

白頭は岡部三郎翁黒帽は著者

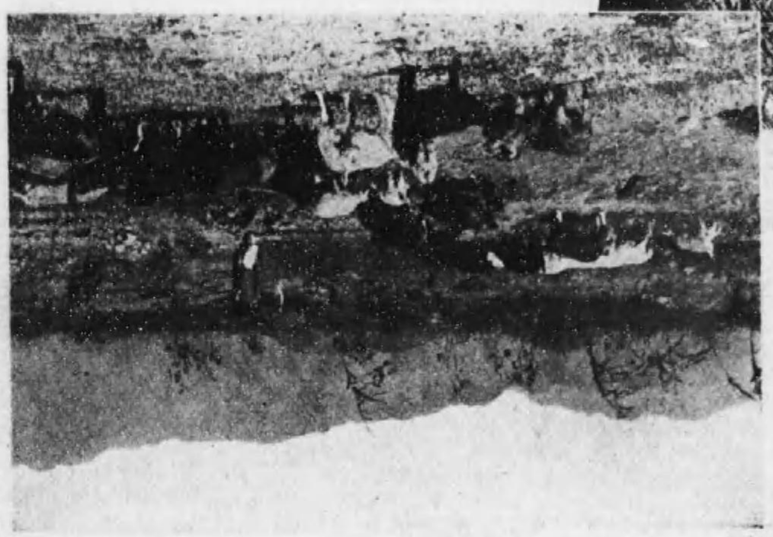
皇城根貴族邸内大客廳（應接室）
岡部翁舊宅の一部



北京城外の瀬戸物露店

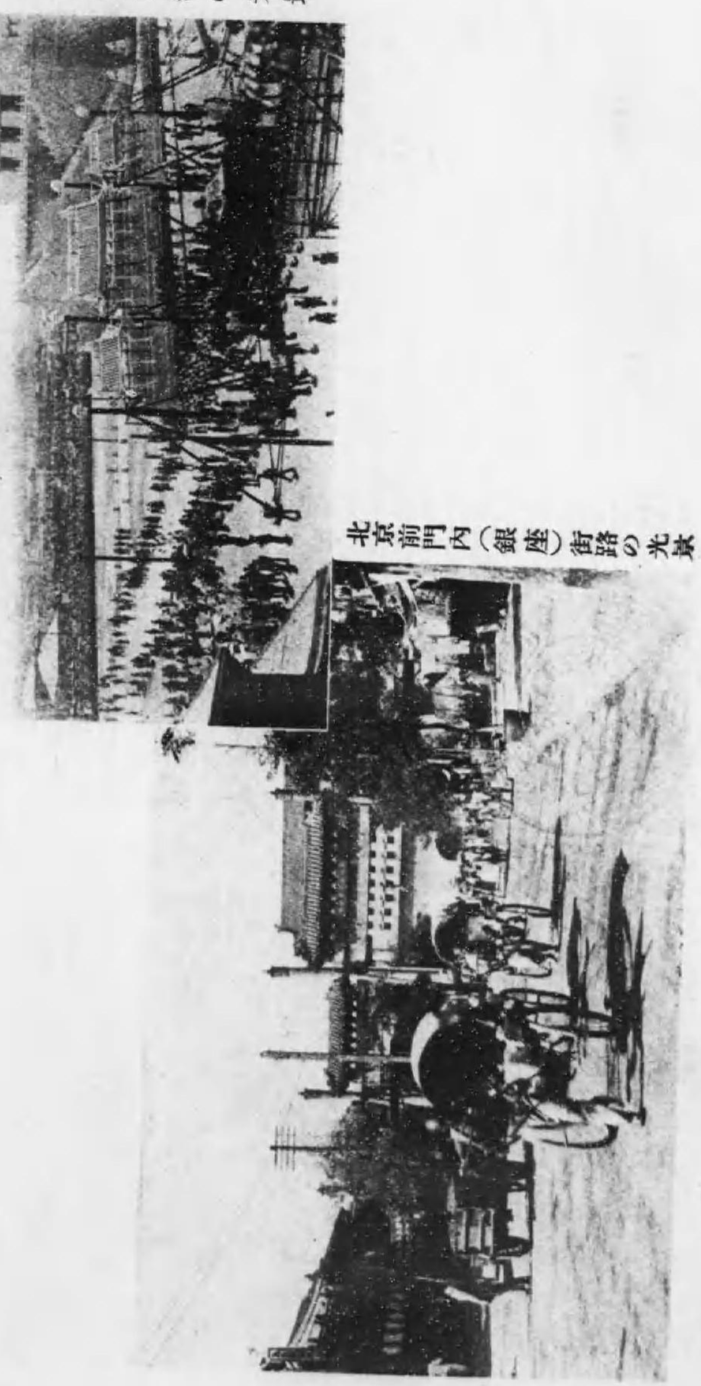
北京隆福寺（ルンフース）路傍の籠屋

北京郊外の鴨子（ヤーツ）飼養



北京北郊の牧場々郡羊

北京前門內鹵簿の光景



北京前門內（銀座）街路の光景

序

民國と日本とは固より共存共榮で行かなくてはならぬ。親しみのある諒解がなくてはならぬ。然るに兎角に山東問題だの、廿一個條だの旅大だの排貨だのと厭なことが年中行事のやうに起つて來る。之には色々の譯もあるが根本は感情の問題がその基礎をなしてゐる。日本に居る日本人は日本に態々來た民國人を輕んずる。又在支日人はその土地の主人公である民國人をやゝもすれば矢張り輕んずる傾がある。民國人は日本人を見るとそれに對していつも反感を持つて來る。

日本に取つて一番忝ろしい問題は廿一個條や旅順大連の問題ではない。此の民國人に對する侮蔑の念の取去られないと云ふ事。この問題である。民國人の民族としての要求は何かと云ふに日本人のこの根性が去らないうちは旅順大連が回收されてもそれは目的でない。旅順大連は一般民國人にはさほどの利害はない。山東問題見たやうなものでいくら返しても一般は何とも思はぬ。侮蔑觀念の廢棄されること、これが何よりも親しみのある諒解を得る第一捷徑である。日本と民國とは佛蘭西と獨逸の間柄のやうなものにしたくない、民國からも接近の方法を考へて貰ひたい。

おもしろい支那の風俗

後藤朝太郎しるす

現代の支那の風俗……一
一　南北各地に見る道教の風俗
二　道教廟前の風俗
三　道士の話
四　道教の歴史
五　道教南北の二派
六　慈善事業の打算的意味
七　不老長生が何よりの問題
八　國民性と地理の影響
支那の人情……六
一　山川風土の人情性に及ぼす影響
二　清濁併せ呑む支那商人の度胸

何年經つても遊山氣分で排日をやつて快哉を叫ぶやうでは困る。日本人の支那を輕んずる主因は支那の風俗人情趣味の理解がないことに在る。よく事情が判つて來ると自然に興味が湧き起る。自分はこの意味からして料理、風俗、趣味の妹姉篇を公にして多少なりともその間の緩和劑に資したい積もりである。

大正十二年七月五日

三　物の値段を聞く禮法

支那俗間の道教趣味……三六

一　自然崇拜の宗教

二　日常生活に現はれた道教趣味

三　呪咀禁厭の風

四　卑俗なる道教趣味

五　支那俗間の道教と日本

山巔の城隍廟

道教に現はれた城隍廟の尊信……四四

道教研究の宣傳……六一

一　支那思想の側面觀

二　丸井翁と道教の調査報告

三　道教研究の宣傳

支那の主權と民族心理……六七

一　支那政府の實力

二　北京中央公園の石頭狎樓

正月の北京……七一

一　元旦の旭光を渤海の水平線上に拜す

二　元旦早々白旗黃旗の行列に遇ふ

揚州物語……七五

一　久しく揚州を想ふ

二　長江夜泊

三　揚州公廨

四　揚州の支那料理

五　揚州の名園何家花園

六　揚州平山堂

七　揚州より鎭江へ船中胡弓の眼
八　鎭江の印象
九　鎭江金山寺の山賊芝居
支那の家庭の飲食物……九六
一　氷よりもラムネサイダーを用ひる
二　茶館の光景
三　支那には路傍に茶の接待がある
四　支那では酒が斤數で賣買される
五　支那の菓子類
六　支那食の調理法
七　支那料理の食べ方
支那の家庭生活に於ける情味……一〇八
一　家族制度よりも家庭の實際を

二　親子兄弟の間柄
三　婚禮と葬儀
四　家庭教育に於ける師匠
五　子の情
波上生活に親しめる支那の人々……一二七
一　波上生活の親しみ
二　波上生活は日本よりも支那が上位にある
三　波上靜かに洞庭を下る大筏の偉觀
四　筏上に鷄鳴を聞く
五　長江の氾濫を呑んでかゝる支那の民族性
六　大禹の治水は傳說のみ
七　外洋より錢塘江へ觀潮期に遡江する戎克船の壯觀
八　華僑の海洋的發展振り

支那旅行の印象……一五〇
一　日記
二　支那視察旅行を了へて
その一　朝鮮の印象
その二　滿州の印象
その三　支那の印象
その四　觀光と土產物の心理
その五　泥棒市
その六　再遊氣分
その七　宣傳の効果
その八　附記
支那民俗誌（永尾氏著）を讀みて……一八九
大谷光瑞師と上海を船出す……一九三

一　無憂園を中心に高等閑人部落多
二　上海から大連まで談論風發
三　梵語より中央亞細亞の古代風俗談まで
文字上から見た古代風俗の研究……二〇三
一　法制の狀態——猷の字
二　同——彌の字——盾に就いて
三　同——盾に字いて——豐の字
四　同——憲の字
五　同——敕の字
六　同——勅の字
七　同——御の字
八　同——敎の字
秘法として口傳されたる不老長生の秘法……二六一

自分の苦痛の經驗に因みて支那の文字風俗の思出……一六四

一　文字上より觀たる苦痛

二　愛兒の夭死と支那風俗の思出

支那の社會相と文字……一七〇

一　支那社會の狀態

二　支那文字の最初の狀態

三　支那文化と文字の繁簡

四　對聯紅紙を用ひる風俗

五　支那最近の新字

六　支那讀書人と目に一丁字なき苦力社會

七　文字過重の弊と支那兵の實情

八　日本の社會に於ける文字の實際問題

商業觀念の發達した支那人の取引振……一〇三

一　支那製品の販路擴張されん

二　對支貿易と日本魂のはきちがへ

日本に來てゐる支那留學生と勞働者……一〇六

支那を顧ない日本の婦人……一〇九

支那の風俗（おもしろい）

文學士
後藤朝太郎著

一　現代支那の風俗

一　南北各地に見る道教の風俗

支那の南北各地方を旅行して親しく其風俗民情を視たり又時にはお寺、殊に道教の寺觀を訪ねて坊さん抔と話しをして見たり、或る時には巖窟に這入つて道士を相手に色々の感想を聽いたりして見ると、支那の現在の人々の間にどういふ風に道教か信ぜられて居るか、又その風俗が支那の國民性とどんな關係を持つて居るかといふことが判つて頗る興味が多い。

支那の國民性は日本人にはとかく不可解の事が多い。それといふは元來國情を異にし歴史を異にし、又社會上の組織や思想の移り方などが日本人の經驗し來たれる所謂常道から甚だ遠ざかつて居るからである。行き方が全く違つた方向をとつて居る爲めである。東洋思想オリエンタル・マインドといふ點から言へば同じやうに取扱つて行つて差支ないのであるけれども、そこの細かい部分々々のことに這入つて見ると吾々の考へる行き方とは全然違つた行き方をして居る。それ

が爲めにそこに國民性の相違が現はれて來るのである。極めて卑近な例であるが支那北部に於いて不思議な風俗がある。例へば家で子供が亡くなつたとする。さうすると其亡くなつた子供の爲めに葬式を行はないで成るべく野原に持つて行つて棄てて置く。どうかするとこの死體の上に菰を掛けて置くことさへもしないのである。斯ういふ可愛相な事は日本人としてはやる氣になれないのであるが、支那ではそれを平氣でやる。それが今日滿州の一部の風俗を爲して居るのである。なぜかくの如きことをするかと理由を聞いて見ると小さい子供の死體の爲めに眞面目に葬式を出しては溜つたものでない。亡くなつた子供の爲めに本當に葬式を出すときは其子供の靈魂が復た家に戻つて來て遠者で殘つて居る後の子供をまたと誘つて行くに違ひない。だから懲らしめの爲めといふ譯でもあるまいが葬式をわざとしないのだと云つて居る。或は又町に火事が起る。さうすると風上に立つて大きな團扇で火事を煽ぐ。斯ういふ事は是れ亦日本人の不可解な點であるがしかし、それは風の神に幾分か阿ねつて、機嫌を取つて置く。風と一緒になつて團扇で多少煽いで置くといふ事に依つて風神の心が緩和され火事が更に大きくならずに濟むといふやうに考へてゐるのである。

斯樣な俗間の傳說等は之を總べて取混ぜて考へて見ると甚だ滑稽な、又意味の分らない事をやつて居ることが可なり多いのである。支那の正月などには家々で皆みな每年吉例として門の左右の扉の面に美しい五彩の門神を貼付けるのである。其他對聯又は門聯と云つて一對の紅聯を揭けるのであるが聯の文字は皆お目出度いやうな言葉のみを書く。それは大抵門神の圖柄を見てくらべてみると分りますが、成るべく財產を澤山拵へるに力になつて吳れるやうな目出度い意味の神樣を集めて來る。それで每戶財產の神體を置いてそれが手に如意を持つとか、或は馬蹄銀を持つとかいふやうなわけで財產に因んだ繪の描添へてある色々の門神が揭げられる。斯ういふ門神を描き現はして居る風習に依つて一般支那民衆の深く希望して居るものが如何なるものなるかと云ふことがまことに能く分るのである。獨り繪ばかりでなく言葉の方から見ても色々な財產本位の考へが本になつてゐることが分るのである。正月には必ず對聯と門神とは貼替へることに極まつて居るが舊正月に見るのが一番便利である。それは一つの町でその家々の貧富の程度にも依りますが、大體に於て紙にこの繪を描いて居る。無論五彩の印刷物を貼付けるものもあれば金持になると扉の板にぢかに立派な彫刻を施し之に五色の筆を使つて奇麗に色彩つて居るものもあるので

あります。其他支那の民衆の心持を察することの出來る機會と云ふものは獨りお正月だけでなく盆のお祭の時にもかなり澤山見出される。其他日本で云へば寺に當る廟と云ふがありますが例へば關帝廟であるとか或はまた火の神を祀れる火神廟であるとか、それから娘々廟(ニャンニャン)城隍廟、或は龍王廟・玉皇廟、藥王廟、周王廟といふやうなそれぞれの廟が澤山ある。

二　道教の廟前の風俗

かやうな廟は總べて民間の信仰の中心になつて居るが之に參詣して線香を上げるとか爆竹を上げるとかいふやうな色々賑はしい催しがある。それでこれ等の廟へ自分は參詣するといふよりも風俗視察の意味で參つて見てゐると種々なる事實を見つける。それによつて支那の人々の氣持が能く分るのである。例へば或る家に今將に息をひきとらうとする者があるといふ場合には此廟に參つて色々念佛を唱へ祈禱をするのである。供へ物は鵞の丸煮にしたものであるとか豚の料理であるとか色々な支那料理類而かもその溫かい物は供へる。そしてその禮拜者は起つたり坐つたりして三跪九叩をするのである。それから神筊(シンポウ)といつて竹で出來たものを二つ手に取つて投げる。陰と陽卽ち裏と表手に向いて出れば自分の願ひが叶はせてもらつたのであるといふ祈禱の仕方があるのであるが自分はそれに見とれて居ると中々色々面白いことを感ずる。禮拜者は口の中でモゴ〳〵默禱をしてゐるのであるが暫くしてその禮拜が濟むと其儘歸つて行く。そのとき持つて來た丈けの御馳走はそこに供へたまゝで行くかと云ふに決しておいてゆかない。皆な手籃に入れて持つて歸つてしまふ。あれでは神前に一寸しばらく見せびらかすやうなものである。けれども、それ丈でよいものだとしてゐるものらしい。

此の外神前で御闔を引くとか占ト用の黃紙を頂くとか色々な事をやりますが斯ういふ方面の俗間の習はせ又はその思想は儒教の方面の文廟卽ち孔廟抔には見たくも先づ見えないのである。又佛教の方面の寺に於ても左程多く見えない。佛教は葬式のことをして呉れる位が勢一杯のところで人間の現世の吉凶禍福といふやうな事は道教方面の寺にもつて行つて道教の神樣に縋り現世の幸福を祈るといふことをするのが唯一の方法と思うて居るものらしい。無論道教の寺と云つても廟ばかりでなく觀とか宮とか庵とか堂とか色々の異つた名稱があるが何れもその現代的に發達して居る丈けあつて道教の寺には餘程複雜した興味がある。北京の白雲觀抔はその方で最も有名なもので滿洲の千山の無量觀などもこれ亦極めて有名な道教の寺である。

三　道士の話

かやうな寺に參りますと道士なるものが居りますが、吾々が是れ迄道士に接して見て面白く興味を感じたのは江西省の廬山の頂上、天池寺の道士である。此の天池寺の傍らに仙人洞といふ巖石の洞がある。自分は先年小室翠雲、篠崎都香佐翁井土靈山翁等の同行者と、其中へ這入つて見た所が、道服を着て冠を戴き支那履を穿いた、如何にも仙骨然として痩せて脫俗した道士に會つた。石で拵えた圓卓を前に其上に硯や筆を置いて折柄避暑中の西洋婦人を相手に色々天地開闢の事などを饒舌つて居るのを傍で聽いて見たことがある。道士の姿は能く支那の山水の繪抔にもあるやうな何となく雅なもので、何となく品のよいものである。恐らく誰れにでも氣持の好いものであるが、佛敎のお寺へ行つて坊さんに會つたときの感じよりもたしかに面白味がある。それに一寸澁い枯れた所もあつて如何にも哲學的のものであります。無論酒は飲まないし、女も近づけないのである、斯ういふ道士の話から段々學問的の方へ持つて行きたいと思ふが、今日諸君が支那へ旅行を試みられて支那人の思想を道敎の方面から視察でもして見たいといふ御考へがあらるるならば成るべくその城隍廟とか關帝廟とか火神廟とか娘々廟（ニヤンニヤンミヤオ）とかのやうな道敎氣分のする所を

御訪ねになれば材料を多く得られるだらうと思ふ。多くはそこに迷信の凝り固まりで道敎的の儀式などが色々に行はれて居るのを見るのである。

山では泰山に行つて見るとこれは最も宗敎的に面白い。此所には道敎、佛敎、儒敎の三つが山を根城にして宣傳をやつて居る。有史以來泰山は三千年の永い間精神界を支配して居る此の儒佛道の三つのものがこの泰山の裡に於て互に錯綜して現はれ互にその我を現はして居ることが有りありと見えるのである。有名な金剛盤若經の經文が經石峪といふ谷間の一枚岩の上に九百五十字刻されてゐるのである。誠に素晴しい磨崖碑である。又儒敎方面の遺物としては泰山に孔子廟を始めとしてさういふ方面の建造物が大小かなり澤山ある。それから道敎の方では泰山の絕頂に玉皇廟といふのがあるが之は道敎の寺といふことが一目して分る。泰山を登りつめて見ると南天門の上に在る。誰にでも一番、能く分る。それから又一般に支那各地には少し小高い山を見ると大抵關帝廟の建物がある。日本で謂ふと何所の田舍へ行つても鎭守の森が祀られてゐるのと同じやうに山の上には宏壯な建物がある。之が關帝廟卽ち武廟と云ふのがあるが中にはこの武廟の中で音樂を奏して居るのが山の麓迄聞こえたりなどしてゐる。兎に角今日の民間に於ける道敎の力と

云ふものは非常なものである。一般は一にも二にも道教に御縋りするといふやうになつて居るのである。一寸考へると日本抔では道教といへば老子莊子の學問を其儘受繼いでやつて居るものであると云ふやうに考へられて居るやうである。しかしこれは所謂道家の方の說である。過去四千年の間に天然を崇拜するとか或は靈魂を崇拜するとか、神仙の術を信ずるとか長生不老の術を考へるとか云つたやうなことは是迄學者の調べて居る道家の說と云ふに過ぎぬ。

四　道教の歷史

今日支那で所謂道家と申しまするものは、大抵後漢以來六朝から隋唐を經て元明あたりの間に大成された所の極めて雜駁な所謂雜教とでも云ひたいやうなものである。俗間で最も共鳴性に富んで居る有力な教へである。斯ういふものが雜然として支那四億萬の民衆の間に强く根を張つて居るのであるから、如何に體裁の宜い基督教が來ようが、儒教が來ようが佛教が來ようが少しも構はぬ。之れと或る程度迄はまじり混和仕合ふと云ふことになるのであるけれども、道教其物を他のものが根本から追ひ退けるとか、覆へすとか云ふことは到底出來ないのである。むしろ支那民衆の根本精神が實ば道教から出發して居るではないかと思はるるくらるである。無論古い時分

から龜卜の占或は陰陽五行說から干支、曆算といふやうな方面はかなり廣く且つ强く自由に行はれて居るのである。之は道教の自由思想とでも言ひますか、自由に支那の民衆社會に擴がつて居るのである。斯う申しますと古から云つて居る老莊の思想をば安すつぽく低級なものに見るやうな感じがするかも知れぬが併し實際に於て戰國時代に在つても道教的思想は民間に十分擴がつて居つたのである。唯、周室に於て、周公文王の如き總べて國民の制度組織を儒教本位に考へてゐた。禮儀三千威儀三百云々と云つて總べて儒教で行政上のシステムを固めて行かうとしてゐた。王室の方でさういふことに極めて居たけれども下民の方に於てはさういふ窮屈な勝手な事によつて束縛されやうとはしない。上の方では無理にでも辻褄の合ふやうにしようとする。けれども下の方では儒教を脫却して勝手に好きな通りにやつて居る。その方が寧ろ支那民衆一般に取つて徹底的に感ぜられたのであるから民衆的に力を持つて居るところのものが道教であるとは當然の事であります。それで戰國時代から秦漢の時代になると云ふと道家の說の方が段々行はれるやうになつて、治國平天下の事に付て今迄勢力を持つて居つた儒教は最早や衰へて逆に道教の方が勢力を得るやうになつたのである。それから後漢あたりになると後世道教の先祖と言はれて居る所の

張天師といふのが出て來た。張天師が出て民衆を自分の相手に道教の開祖として立ち益々勢力を得て來た。その教は三國六朝隋唐と次第に時代を經るに從ひ榮えて來たのである。其以前秦の始皇の時、或は漢の武帝の時分に已に東の方蓬萊の島へ不老不死の藥を求めにやると言ふやうな神仙の術が考へられ或は反魂術——人間には魂が二つあつて一は天に歸し一は地に歸するといふ例の反魂說と云ふ事が段々漢あたりから考へられるやうになつたのである。一方では儒教ばかりで進んで行かうとするけれども、中々民衆の力が强大である爲めに之を如何ともすることが出來ない、最初の間は道教も理論の側を考へてやつたのでありませうけれども、何と言つても大勢の民衆の力が天變地異の如き偉大なるものに對すると恐怖心が起つて來る或は自分の身上の吉凶禍福を考へると云ふやうになつて來るこれが一番の大問題である爲めに、何か他力に依つて自分の禍を免れやうといふやうになつて來るのである。秦漢には今申したやうな藥を求めにやつたりすることが始まつたのでありまするが、之が時勢の變遷と共に段々低下して來た。ズット古い時の所謂道家の說に在つては淸淨虛無とか恬淡無慾といふやうに物慾を制して自分の心の修養をつむといふことを主として居つたのであらう。けれども、もうさういふ事では最早や時代が行かなくなつて

來たやうであります。儒教の方では實踐道德を主にして色々喧しく言うてゐるに反して、道教の方では極めて呑氣な纏まりの付かぬやうなことを空論とでも言ひますか大きなことを考へたりあきらめたりするやうな方面をやつて居る。そこで儒道二教は色彩が分れて參つたのであります。段々道教が民衆化して來るに從ひ唐の時分になるともはや非常に勢力を得て、儒教よりも寧ろ道教の方が信仰の中心として勢力を得て來たらしく思はるる材料が段々現はれて來た。

五　道教南北の二派

唐から宋にかけて、道教が南北二つに分れて北の方では出來る丈け自力主義で色々苦しい事をやつて修養して掛るといふのでありましたが、南方はさういふ事をせずに自分は働かないで呪禁をして僥倖にボタ餅を待ちまうけて居ると言つたやうな風の事が多く民間に發達するやうになつたのであります。それであるから呪禁のやうなことは南方が盛んであります、道教の組立には北方の所謂澁い方と南方の不仕だらの方との兩方がありますが一般に南方の道教氣分の方が廣く行はれて來たやうに感ぜられる。殊に無智蒙昧の連中の迷信に乘じて色々疾病を治療してやるとか其他くだらない御祈禱のやうなことが始まるとか、或は自分が惡事を働らいてもその惡事を爲し

た者を道教の神様が助けて呉れるものであるかの如くに神様に御願ひをすることさへ始まる。今度の賭博に勝たして貰ひたいといふて神様に御願ひをしたものがあるとすると、供物の多寡に依つて神様がその人に對して勝たせて呉れる。供物が少ないときは勝たせて呉れない、さういふ風に自分の心を以て神様を極く低級に自分と同等に見る。供物が多うければ助けて呉れるといふやうな懐柔策を考へるのである。この神様を手懐けようとする思想が後世には中々ひろがつて來た。斯うなると全く墮落だ。全く唯々自分の氣休めに慰安の爲めに道教を信して居るといふことにしかならぬのである。そこになると修養だの何んだのといふ問題よりは自分の都合の好い事のみを道教の神様に相談し祈禱するといふことになつてしまふのである。

六　慈善事業の打算的意味

最近吾々が支那現代の信仰方面を見たところを具體的に例を擧げて述べて見る、例へば或る不安の狀態にある金持についてその樣子を見たり聞いたりして見ると、そのものが自分で非常な財産を造つたとする。さうすると其人が何かに刺戟されると急に驚くべき程の大きな慈善事業をやり始める。さうして其のやつた動機に就て調べて見ると、是迄自分が百なら百丈の惡事をしたも

のと考へる。そうすると其の罪滅ぼしに百十か百二十丈けの慈善事業をする、それに對して神様が十とか二十とかの差額丈け自分に幸福を與へて呉れるものであると考へて來るのである吾人は神様小廣の前に掲げられた看板に「有需必應」といふ四字を見る。神様が人間なみにさういふ主義でやつて居らるるから其前に行つて人間が供物をして御願ひをすれば肯いて呉れると思つて居るのである。甚だ馬鹿々々しい事であるけれどもそれを眞面目に信じてゐるのである。是は支那の田舍到るところで吾々が能く見るところである。田舍の普通一般の人々、無智蒙昧な連中になると其愚や及ぶべからずといふ言葉がありますが、その通りの感じのすることが多い十年前に自分が臺灣へ行つた時でありましたが、臺南邊りの百姓（タバニ村）の者共が總督府に反對して所謂タバニ事件を起した事があつた、此事件は有名な土匪の騒ぎでありますが、其の時に彼等の考では自分等が今反旗を翻せば福建省から多くの支那人がやつて來て後援して呉れるとか獨逸から飛行機で福建省に來るものがあつて吾々に更に應援をするのであるとか色々のことを考へて居つた。それから臺南の町に西來庵といふ寺があるが、其所から出される、黄色い一尺二寸位の紙符がある、それを幾らかの金で頂かせて之れを胸中に入れて置くと日本人が如何に鐵砲や大砲を擊

つて攻めて來ても、彈丸は跳ね返つてしまふのだと云つて之を食ひものにして惡徒が賣付ける、それを賣るものも賣るものだが又それを信ずるものも信ずるものである。普通教育も何もあつた譯のものでない、洵に憫むべき狀態であつた。十年前の實狀はかやうであつた。さういふ輩が支那に行つて見ると今日も尙その通りの程度であつて、大體それが四億萬人中の過半を占めて居るのであるから、道教的色彩のある迷信の蔓延してゐることは當然と云はねばならぬ。

今かやうな程度の連中を通じて現在の生活問題であるとか或は社會問題であるとか云ふ方面のことに觸れて實驗的の事を繹ねて見るとそこに色々信仰方面に就いて面白い研究が出來るのである。支那の俗間ではかくの如き連中は皆な偶像を祭つて之を拜してゐるのである。が昨年東京の平和博覽會第二會場で臺灣デーの時に御覽であつたらうが場内に非常に丈の高い引伸ばしたやうな神樣と丈が低くくて幅の廣い神樣との二體があつた。どちらも顏の色は眞黑であつて。身に綺羅錦繡を纏つてゐた。その名は范將軍、謝將軍と云ふのである。この拵へた神樣の體内に人が一人づつ這入つて街路を練つて歩くのである。その體内に這入つてあるく人は藝人ではない。信仰の下に舞ひ躍るのである。博覽會で藝人扱ひにされるなら臺灣から出ては來ぬと言つてゐた位で

ある。信仰の爲めにやつてもらふのだからといふやうな意味に話をして漸くのこと連れて來たのだといふことでありますが、斯ういふ風に信仰のことにかけては誠に迷信的であるが非常に八釜しく考へて居るのである。それで時々その御神體を遷し奉つると云ふことがありますが、汽車で之を動かすなど云ふことは失禮だと言つて御立派な輿に乘せて練つて行く。臺灣の南方嘉義方面(北港の媽祖宮)に御出でになつた方は御存じでありませうがそこに媽祖といふ女の神があります、東京の博物館にもその大きなのが納まつてゐるのを見たことがありますが、顏の紅い神樣である。その顏の紅いと云ふことは良い神樣の意味を示したのであります、媽祖の神は商賣とか旅行とか航海とかの神樣として尊ばれて居る。殊にその地方では安產の神樣として最も御利益があらたかな神であると言はれて居ります。斯ういふ神樣を北の方臺中とか臺北とかへ御迎へする時には今は仕方なしに汽車に乘せて參りますが大勢の人々が之を護り立てて、御神體を大切に扱つて居る。そして多額な費用を吝まず使はなければ御迎へする譯にいかぬといふことになつて居る。博物館に遷座したときはどういふ手段で出來たのか知らぬけれども中々容易ならぬことであつただらうと思はれる。

道教の方面の迷信にはかくの如く凝固まつた考の者が多く、側から見てゐればつまらない何んでもない事のやうであるけれども大に敬意を拂つて居ないと云ふと、旅行家又は研究家は思はぬ大失敗を招くことがあることと思ふ。又彼地方には青草藥方といふ療法の古式がありますが無論無智蒙昧な百姓たちの間でやつて居る習慣である。草根木皮の方法とは違つた實に馬鹿げた方法であります、何でも生きてゐる青草を煎じた藥を飲ませるのである。其の草の根は普通の人間が取つて來るのではいけない。例へばある家に今將に死なうといふものがある、その時に其家の男が二人で小さい神輿を擔いで外に出かける田圃の畔道を歩いて——可なり急いで行く。わきから見ると氣が觸れて居るかと思はれる位熱心に呪文の樣なことを唱へ乍ら歩いて行く。私は何をするのかと思ひましたからヂットそれを見てゐたのである。ところが或る所まで行つたときに二人のものが兩方とも掛け聲を掛けてゐた、そのとき輿を田圃のわきへ非常な音をさせて投込んで了つた。さうすると御輿の柄の一方の端の所が泥の中へ這入つた。其所の這入つた柄の尖の所に當つた所の草はこれ卽ち御輿の中に在ます神樣の指圖に依つて其草が命の親であるから之を取れといふ命令であると考へるのである。それを根こそぎ取つてそして持つて歸つて煎じて飲ませるの

である。それから先きはその病人は死んだか生きたか知りませぬが斯ういふ風習があるのである。

最近日本では何首烏（カシウ）が大層精力の付く藥であるといふて大分廣告が出て居りますが、是は實際藥としての効能もあるのでせう。或は昨今支那には草結明といふのが南方揚子江方面に宣傳されて居ります。私も澤山取つて參つて居りますから御入用の方々には御分けを致しますが、是は眼に利く又頭腦を明晰にするそれから腎臟によく小便の通じが能くなる又胃腸に利くなどと言つて居ります。さう云ふやうに吾々が一寸田舍を旅行して見ても忽ちに御利益のあるものを色々得られます。又さういふ物に自分共が心から共鳴してゐると非常に厚遇されると云ふ譯である。これは一例であるが斯ういふやうな延年益壽のとに關係したことに付ての迷信の材料は誠に多いのであります。是は子供の時から家庭でさう云ふ風に仕付けられるのでありませうが、それが一般民衆の風俗になつて來てゐるのである。

七　不老長生が何よりの問題

道教の寺ではかくの如き民衆的の信仰を成るべく具體的に現はすことを目的として生命を延ば

して奥れる神様を門神抔にも現はす。卽ち壽星、壽老人に桃を配したりした繪がある。長生延年のシンボルには桃を畫くのであります、又鹿を側に配してゐることもある。是は金の出來るといふ意味である。又その背景に目出度い雲を加へるとか、或は蝙祿、（福祿）を加へる。財寶の澤山出來るといふ意味になるのであります。かやうなシンボルを澤山集めて中央に神様の本尊を現はすのである。長生無極の意味を示す時には不老長生のシンボルとしてその式に叶つて神様が描き現はされる、或は澤山財產を拵へたいと思ふ時には財產を招く所の神様卽ち財神の繪を描き出すのであります。子供の欲しい時には娘（ニヤンニヤン）娘（ニヤン）の神様の御札を貼ると云ふやうなことをする。或は病氣の場合には日本でも麻疹が流行ると「馬」といふ字を三つ書いてそれを逆さに貼付けることが行はれてゐるが、かやうな類の事が相當に利き目があるものと思はれて居るのであります。それを利き目が無いなどとは思はないのである。

一般に又支那人はアキラメル（天命）と云ふ思想が徹底してゐる。神に祈つて見てもその利き目が無かつたといふ場合には矢張自分の方の供物の量が少なかつた爲めに神様が自分の事を肯いて奥れなかつたのだと思ふものらしい。是は必ずしも道敎の思想といふ譯ではなく寧ろ國民性の

爲めであらうと思はれる。アキラメのいいといふ點に付ては迚も日本人は及ばない。運命がそれと決まつたら最早や泰然自若として動かない。不思議な位に落付き拂ふのである。日本人のやうに暴ばれて見たり、顏色が青くなつたり足腰が立たなくなるといふことは支那人の間には今迄殆ど聞きませぬ。[illegible]頭臺へ歩いて行くといふやうな時にも日本人は腰がぬけて立つて行けないといふことを聞きますが支那人は平氣で堂々と銃殺される所まで歩いて行つて、家族の者もこのそば迄行つて見て居るが少しも顏色を變へない、犬か猫かが殺されてゐるのを見てゐるより尙平氣である隨分鐵砲で頭抔を擊たれて腦漿が頰の邊に流れたり氣味わるき事があるけれども斯ういふ事には全く平氣で居られるといふのは一は免疫性になつて居るからであらうと思ふ。かやうな殺伐な所であるから支那町では朝起きて扉を開けて見ると門外の石段を枕にした死人を見出すことがある。かやうな事が若し日本であつたならば新聞に出たりして大騷になるけれども支那では平氣である、夏の頃水の氾濫する時には楊子江に土左衞門が流れて來てその上に烏が二三羽止まつて居る光景を能く見ることがあると傳聞してゐるがかやうな事は特に事々しく言ふ迄もない。一々言つて見ても際限がないわけであるがかやうな事は何とも思つて居ないらしいアキラメの宜いと

いふことに付ては支那の人々は洵に日本人の不思議に感ずる所である。何も彼も天命と思つてアキラメルといふことで凱を付ける。儒教でも天命のことを教へてゐるが儒教で所謂天と言ふのは、是は平たく云へは天をダシに使つてゐるやうなものである。自分が天下を取らうと思ふ野心があればその時の治者は天の意に背いてゐることを證明し之を力説する天意を享けて居ないがらいかぬ。天下の人望の無いものは卽ち天から愛憎をつかされたもので最早や治者として不都合であると言ふのである。かやうに自分の都合の好い方へ引付けて全く天をダシに使つて居るものであると見られる解釋が餘りに露骨すぎる嫌ひがあるかも知れぬがそれ位に思つて居るのである。道教の方でも一番最初の國民性の出發點から考へれば道教から儒教を區別して特に天に對して別の考を立てたのでなく、唯一種の恐怖心を持ち之を拜して居つたかも知れぬ。實際支那の國民性は氣質の上から又地理上の關係から天にしても地にしても是には到底抵抗が出來ないものだと考へてゐる。そこに一種の人生觀が起つて居るのではないかと思はれる。

北部支那に於いては北京あたりの如く蒙古風が起る春の空は一天搔き曇り紅塵萬丈の狀態を呈する。その盛なことは日本では想像の付かないほどで、晝でも全く暗くなつて了ふ。鞄を十分に

欠

如く知つて居りたい、又支那の人々にも日本の事情は知つて居つて貰ひたいと希望する次第である。

而して支那の事情に就て諒解するには、どうしても支那の地理上の背景を知らねばならぬ、日本人を支那の人や西洋の人が理解するには、日本の背景を理解しなければならぬ、馬の脊の様な狭い土地、川の早く流れて居る地勢に住んで居る日本人は、勢ひ性急である。又議論などはどうでも宜い、それよりも結論を急ぐと云ふのは當然である、是等地理的の日本の背景を理解して日本人を見て貰へば、日本人の人情風俗が判る。箱庭や四疊半茶の間の趣味も判る、之と同じで支那の人情風俗を理解するには、平沙萬里人煙を絶つと云ふ様な延び〳〵した野原であるとか、海かと思はれるやうな大湖があつて、其間に殆ど目を遮る一物も無いと云ふ様な、地理的の背景を知らなければ、日本の狭い所に居たものに、支那を想像する事は出來ない。かれらは、悠々迫らずとか、悠々自適とかの言葉で現はされる様な總べて行き詰りと云ふ事の無い性質も判つて來る。人情に及ぼす地理の影響と云ふものは誠に恐ろしい者である。

日本人が富士山の秀麗なる姿、高潔なる容に影響を受けて居るやうに、支那人は廣漠たる大自

欠

然によつて性情を化せられてゐる、支那に行つて小學校の生徒に色鉛筆を渡して水の色を書かせて見ると、茶色の鉛筆で一面に塗る、日本人ならば青く描くのが普通であるが、支那では水は茶色に見えてるのである、そう云ふ所に國をなしてゐる支那人であるから、大體に考へ方が大きい、單位の取り方が大きい、障壁を築くとなると、我國の青森から鹿兒島迄もある樣な長い萬里の長城を、二千餘年もかゝつて完成して居る、隋の時代に出來た運河でも、兎に角單位の取り方が大きい、さう云ふ所は日本人の想像の及ばない所である。

藤山雷太翁嘗て南京に行つて憑國璋に、支那の南方に鐵道を布いて運輸の便を盛んにしたらよからうと云ふと、彼は曰く『南支那は水運が發達してゐるから、湖水と湖水、川と湖水との間に運河を開けばよい、鐵道を敷くなどはもつての外である』と反對したと云ふ事である、此樣に南支那は、南船北馬の言葉の示す通り、水運の便の多い所であるから、土地の人民は水に對しては一向恐怖と云ふものがない、例へば長江の水は、上流の西藏邊の雪解けの時期になると、增水するのであるが、此時には河水は甚だしく氾濫して、忽ち二間三間四間と見渡す限り海と化してしまふのである、其時は普通の百姓家は大部分流されるが人間は平氣で屋根の上に乘つて流されて

ゐる、そして流されながら魚をとつて平氣で居ると云ふ風に氾濫を呑み込んでしまつて少しも慌てる事がない。

二　清濁併せ呑む支那商人の度胸

幅の十哩もある樣な水は、三間や四間の堤防を築いても仕方がない、減水期の來るのを待つより外は無い、さう云ふ大きい舞臺の國に住んで居る國民であるから大慾は無慾に似たりと云ふ風で、日本人がキビキビした事を喜び、萬事にコセ〳〵する樣子とは甚だ樣子が違ふ、大抵の事は免れない運命と諦めて居る樣だ。其場に臨んで沈着いてゐる事は、支那や臺灣邊りの刑罰の場合を見ても良く判る、罪人が殺されると云ふ場合に、頗る泰然自若たるものがある、また袁世凱は嚔をし鼻汁がついても口の廻りを拭かなかつたと云ふ。煙草を呑む時も傍から燐寸をスッてのむ許りにして、サアおのみなさいと云ふ迄はのまない、總て支那では大人の作法としてチョコマカしないと云ふのが禮儀になつて居る、萬事一向氣にしないで平氣で居られる、如何にもそれが野呂馬に見え、無神經の樣に見える。

夫れなら支那人は何時でも暢びりして、眠つて居る樣な事をして居るかと云ふに、必ずしもそ

うでもない、眠れる獅子の如く、急轉直下に活動する事がある、例へば彼等の山を上る所を見て居ると、上る時はノロ〳〵して居るが、下る時には飛鳥の如く全くヒヤヒヤする程速く下る事がある。卽ち常には平和の國民であるが、サアとなれば如何なる殘忍な事でもなし得ると云ふ國民である、概して溫厚篤實、暢氣で悠々迫らない國民であるけれ共、社會的生存競爭は、古くから相當に行はれてゐるから、處世術は至つて巧である。馬鹿の樣で野呂馬の樣に見えても此點には拔目が無いから注意しなければならぬと思ふ。

支那の人情に就ては南北或は各地方に於て多少づゝ違つて居る、併し大體に於て支那の人情は共通するものを見出だす事が出來る、一度信じた人は決して疑はない、物を渡すと、必ず受取を持つてくると云ふ樣に、キユー〳〵、キビ〳〵やらぬと、日本人の性質には合はないが、支那人は取引の時などでも、さう受取などをやかましく云はない、そこらに散らかつてゐる古新聞の端にでも書かせておくとか、又は紙幣に書いて渡すと云ふやうに、騰揚な所が日本の人情と違ふ點であらうと思ふ、一例をとると主人公が店員を置いた場合に二三人の店員が、內所で主人の金を使ひ込んだとすると、日本人ならば、兎角主人公に告げて潔癖振るのである、否覺醒せしめる爲

めに忠言するのであるが、此の場合主人公は豫期したとは丸で反對に出る、人の輩下に居るものは、儲けて大きな商人となるのは結構だと云ふのである、だから後になつて忠言したものゝ方が其處に居たたまらぬと云ふ樣な事になるのが珍らしくないと云ふ。

さう云ふ樣な事を見ると、淸濁併せ呑むと云ふ事が、相當の人には共通に存在して居る、大まかな所が一般にある樣に思ふ、細工品でも日本人の作るものは瀟洒で上品であるが、支那人の作るものは荒削りで、少し位いびつであつても平氣である、總て製作品は纖細美麗と云ふよりも、重みのあり、沈重と云ふ風な趣がある、抽斗など右の方を入れると左の方が出る位精巧な者を日本人は喜ぶが、支那人はそんな細かい所には氣を配らない、併し彼等は體面には非常に喧しい、それ故、此點には吾々絕はえず考慮して行かなければならない、又大體支那の家庭は、日本の家庭とは其の組織が違つてゐるから之を考へなければならぬ支那では家族でも皆部屋を異にしてゐて、日本の樣に一宇で團欒する樣にはなつて居ない、部屋と部屋とが細かく厚く仕切られて居る兄弟の間でも、遺產の相續などがやかましく、骨肉の間に慨して冷やかな點が澤山ある。

三　物の値段を聞く禮法

又一般に文字の上丈を立派に飾らうとする風がある、例へば田舍に行くと到る所に孝子節婦の碑石がある、併し夫を見ると皆官吏の細君や娘さんの碑で普通の商賣をして居るものや百姓などは頌德されてゐない、是は役人を主んずるから來たのであらうが、かう云ふ事から推し及ぼして見ると支那の歷史には都合の良い事許り書き殘されて居るであらうと思はれる、度々支那に行つて向ふの人の事を見ると、書物に書いてあるのは、良い加減の事で信じられないと云ふ氣になる。

惟ふに、斯樣の事は別に政府が正しいものを護つてくれると云ふ譯ではなし、人民は安心して生命財產を確保する事が出來ないから、自分が自分の事を良く宣傳し自分の事を兄弟よりも何よりも先にすると云ふ事を餘儀なくせられたであらう、斯う云ふ譯で支那の子供は、日本の子供よりも餘程ませてをる、例へば支那では、金を出して妻を買ふ風習があるが、小さい時から毎月コツコツ貯つた金を貯めて居るから『金を貯めてどうするか』と聞くと『家內を買ふ目的だ』と平氣で云つてゐる。

支那を旅行して見て、一番日本と違つて感ずる事は不遠慮に物の値段を聞く事である、之は寧ろ挨拶のつもりで居るらしい、『君の洋服はいくらしました』『あなたの帽子はいくらですか』など

と良く聞く、だから支那人も勿論こんな事を聞かれるのを少しもいやがらない、私は山海關で驛內の支那人に其給料を聞いてみたら『月給は六十圓で家內は五人あるが生活には不足しない』と平氣で答へて居た、又支那人が永く日本に滯在する場合に、借家を世話してくれないかと言ふがこれにはうつかり世話してはいけない、ほんの端緒丈を話してやつて、後は本人に任せるが良い何故かとなれば彼等の間では、百二十圓の家賃ならば、之を百五十圓位に言つて、三十圓位は中間で儲けるのが慣例になつてゐるから、我々が百五十圓だと言へば矢張りいくらか儲けて居るものだと思つて、少しマケて呉れなどと言つて來る、日本人の樣に手數などを眼中に置かずに、眞心から全く親切心から世話するものには、馬鹿々々しくて腹の立つ樣な事が多いでのある。

一體支那人は自己生存に對しては却々拔目がない、私が嘗て長江筋の或る金持に其希望を聞くと、早く上海の租界に行つて自分の財產を金にして外國の銀行に入れ、此地で餘生を送るのが一生の希望だと言つて居た、斯う云ふ風だから自分の事は自分でやる政府は當になるものではないと云つて銘々自分本位に考へて居る、だから自己生存の道に就ては支那人の方が日本人よりもまい、日本人が支那を批評する場合には政府が弱いと云ふ爲に種々の批評を下すのであるが、社

會の方面を見れば餘程學ぶべき點が澤山あるであらうと思ふ。今後益々そう云ふ方面の支那研究を起して貰ひたい、そして日本人が支那の事を學ぶ爲めに西洋人の著者に就て研究するのも無論參考の爲めには必要であるが自ら進んで直接に研究する事としなければ實際の所は判らない。

最後に日本の人々の支那に於ける事業に就て附け加へて置くが今日では、正金、三菱、三井、住友其他大きな支店もあり、紡績會社なども上海邊に發展して居るが、勞銀の安い、智育の發達しない、原料の多い、又需要者の多い彼地で、仕事をする事は甚だ有望であるから益々彼地に渡つて事業を興して貰ひたい、これからは華族などの遊金を寢かしておく人々も、どうせ遊ばせて置く金ならば支那で寢かすと云ふ事になつたならば、大邊に支那を開發する事になり、又日支親善の爲めにも貢獻する事が出來ると思ふ。

三　支那俗間の道教趣味

一　自然崇拜の思想

先づ道教の根本思想である所の天然自然に合する事を以て人生の主眼として居る方面のことから申します。今日の道教で、天然自然の傾向に歸りたいといふ思想の一番卑近に見えてゐるのは關帝廟に對する思想であります。是はいふまでもなく、關羽を祀つた廟であります。孔子廟を文廟と云ふに對して武廟と申してゐます。此武廟は平地にある事もありますが、多くは高い所に設けられてあります。高い山の頂上の所に石垣を築いて其上にその廟が建てられてゐるのが普通であります。それで此關帝廟は先づ道教の方の建物では城隍廟など〻共に代表的のものと言つても宜からうと思ひます。關帝廟は支那内地に參ると日本に於ける八幡宮か天神樣の社と同じやうに到る處に澤山あります。道教の方では天然の山なれば山の崇高を尙ぶ思想に結付けられてゐるのである。道教の方で一番尙ばれてゐる山は言ふ迄もなく五岳で、泰山、嵩山、衡山、恒山、華山であります。孰れも皆道教の神樣が祀つてあります。五岳の中で自分の登つたのは泰山であります。此の山は麓から絶頂迄、その登り路を歩いて見ると其の間に支那思想の方から言つて、三つの思想卽ち儒、佛、道の三教が此山に於ても、前に申した通り古來互に競爭をして居たかと思はれる位著るしく夫々特色を現はして居る。金剛盤若經の九百餘個の文字の遺されて居る經石峪、

これは、無論佛教の盛んであつた六朝時代の思想信仰の偉大であつたことを示してゐる遺跡であります。それから儒教の遺跡の殘つてゐるものでは泰山の頂上、南天門を這入つて間もない所に孔子廟が建つて居ります。それからモツト上の方へ登つて參ると一番テツペンの所に玉皇頂とか碧霞元君廟とか云ふ廟の美事なのがあります。これなどは他の儒教なり佛教なりに對して負けず劣らず成可く立派な建物を建てゝ道教の信仰の厚きを示さうと云ふ考から出來た者かと思はれます。その廟と云ふが五彩をベタ〳〵と塗つた金色燦爛たるもので如何にも道教的の氣分を現はした建築で、柱楹檐端すべて非常に綺麗なものであります。その光景は天氣の好い日などは大空のコバルト色と相映じてそのコントラストは非常に宜い感じがするものであります。而も其建物は雪に五色の彩に富んだばかりでなく其の檐端の四周には風鈴を下げるとか、種々の裝飾を施すとかして儒佛以上に此の道教趣味は著しく現はれて居るのであります。泰山に於いてはさう云ふ風でありますが他の四岳も恐らく道教思想の明に見えてゐるであらうと思はれるのであります。泰山は青島から鐵道で、濟南府、泰安府を經て一日の行程で行かれる。山東省へ渡らるゝならば譯ないことですから必らずお登りになる事を希望致します。泰山の高さは海拔五千尺であるから高

山と云ふ程ではないが山相が偉大で風景が奇拔である。峰は麓より頂まで十間も二十間もある大の花崗石を積上げて作り成したやうな山でありまして路は山全體で四萬八千有餘の石段があります。其段は諸所切れてゐて麓より頂まで續いてゐるのでない。所によつては可成り急峻な所もあるが左迄でもない、夫れを登つて南天門内の石窟内に自分共は一晩泊つた。その老窟には道士然たるものが居ります。泰山の籠舁は普通の支那轎夫で回々教徒が必らずその職に從事して居るのであります。兎に角泰山は儒佛道の如き宗教的方面から觀るときは中々面白い研究の對象となるのであります。

次に北京方面に來て道教の方の建物を見ると北京に有名な白雲觀と云ふがあります。こはその名稱から見ても直ぐ道教の建物だと云ふことが想像される。霞であるとか、雲であるとか、玉であるとか總べて道教方面の建物にはかやうな天然本位の意味を有する文字を使つた名前が付いて居ります。尙ほ亦支那俗間の信用を集めて居る廟に城隍廟と云ふがある。是は鎭守の社のやうな廟であります。支那土民の信仰迷信を集めてゐる大事な廟であるが、町や村の婦人共が屢々この廟へ來てお祈願をしてゐる光景を見たことがあります。こは南北共に大事な廟となつてゐるので

あります。年中行事などの此廟を中心に催されるものが色々ありまして之には時として非常な行列の出ることがあります。その行列は全く道教風の色彩の鮮かな行列であります。迚も日本では想像の出來ないもので、實に其行列の光景は大規模であります。先年日本で休戰祝賀の假裝行列のあつたとき横濱支那人町に出たものは稍その俤を髣髴せしめてゐた。十町も十五町も長く續く行列でありますがその間の役者の衣裳苦心と云ふものはタイしたものである。さうして其時はどんな貧乏な家でも大きな豚の丸煮を二疋も三疋も用意をして之を軒下に出して供へるやうなことをする。夫れは喰べる爲の御馳走でなく、豫め腹を割きて腸を出し、頭の方から尻の方まで總べて毛を取り去つたのを丸煮にして、三角の枠に之を跨らせそして所戸店先き又は軒下近く持ち出し半は飾りにする、行列が店の前を通る時の御馳走の意味になつてゐるのであらうと思はれます。其の他豚丈でなく色々の御馳走が澤山出されてある。恰度日本の田舍で氏神祭禮の日に神輿の通過するとき路傍の家並その軒下に酒などを出して供へてゐると同じことであります。其の行列の一番盛んであつたのは南方であります。

福建省では童乩（タンキイ）と言ふ一種奇怪な藝當を演ずるものが車の上に乘つて行列に加はるのでありま

す。其の行列の中には車が澤山續いて來る。先づ初めには紙で拵へた大きな顏容をした人形で茶褐色の着物を來た高さ五間位もあるやうな大の神樣の乘つた車が來る。其次には顏の長さ一尺五寸もある松葉色の着物を來た神樣が乘つて來る。其次あたりには此の童乩が來るのであります。童乩は專門家でなくてはならぬので、刄物を所持してゐる。その自分の持つた刄物で頻りに眉間を叩いて居る。そうすると額や頭から血が出て來る。物凄い程である。——日本芝居に見るやうな梅干の汁ではなく本當の血が出る——是はどんなに切つて血を出しても決して弱らない。何處迄血を出しても痛さに堪へ切ると云ふ一つの勇氣と熟練とを示したものであるが、慘忍極まる方法である。これも專門の職業となつてゐるので、年中行事の時に雇はれる人があるのである。一晩十五弗位である、さう云ふ殘忍性を帶びた藝當が道教風の行列に加はつて居ると云ふことは注目すべきことであります。童乩は南方の行列の中心になつて居るのであるから之がヌキになると大變行列が淋しくなります。さう云ふ譯で行列には缺くべからざるものとなつてゐるらしく思はれるのであります。臺灣にも今尙盆の行列に之を見ることが出來ますが、童乩は車上で不動の姿で喜怒色に現はさず、極く靜かにぢつとして居る事が眼目になつて居るらしい。

次に俗間の天然自然に立歸ると云ふ思想信仰の見えてゐる例に就いて申します。話は佛教方面のことに觸れるが北京の城内に雍和宮と云ふがあります。是は一名喇嘛廟とも云ひ、所謂喇嘛のお寺であります。喇嘛の信仰に就いては多少道教の色彩が這入つて居るのではないかと思はれます。喇嘛は俗間の思想と互に相似た點があり、支那人の卑俗な思想と共鳴する所がある故、支那の國民性に氣に入られてゐます。殊に滿洲朝廷（雍正帝）が大變喇嘛を保護してくれてその雍和宮を興へて呉れた程であつたので他の一般佛教よりも一番能く榮えて居ります　民國となつた今日では最早や昔日の活氣も何もありませぬ。此の雍和宮へ這つて見ると其守本尊と云ふのは和合佛なる歡喜天、俗に所謂聖天樣と申しますものを本尊として祀つて居ります。是はどう云ふ本尊かと言ふことは全く風俗を害するもので、日本では大なる問題となるべきものです。即ち十二體の佛が互に抱合つて居る像である。一寸見たばかりではそれと分らぬが下の方から眺めあげて見ると眞實の所が現はしてあるのであります。其處を特に見たいものには賽錢を取る。其入口の所へ行くと幕が少し開けてあつて奥の本尊が見たいならば見せると言つた調子で居ります。斯う云ふ例は他の宗教にもあることかどうか知りませぬが雍和宮の本尊はかくの如き陰陽の本尊であるの

であります。是は佛教の方の話でありますけれども支那人の道教的趣味に叶つた宗教であるが爲めこれ程迄に俗間によく榮えて居るのであると思ひます。兎に角この思想は平たく天然自然の本能とも言ひますか、自然の儘の男女の狀態に歸つた機微の點を極めて露骨に現はしてゐると云ふ理由で今日の支那、俗間に最も根柢を深く有してゐるのであるといふ風に見て宜からうと思ひます。

二　日常生活に現はれた道教趣味

食物や住宅の方面のことで俗間日常生活の一般を申上げて參考にしたいと思ひます。飲食物の中で酒の事を先づお話致さうと思ひます。酒は支那では大層種類が多く、紹興酒、黄酒、藥酒、奶酒など色々あります。糯米で造るもの高粱で造るもの糯粟で造るもの牛乳で造るものなどによつて種類が違つて來る。女兒が生れると酒をかもし婚期まで保存しておいて持たせてやると云ふ程に古くなつたのを好むやうである。古酒は之を老酒と云ひ賞味してゐます。又玫瑰花と云ふ香花を入れた酒を使ふこともあります。或る好事家の人或は極く道教趣味に富んだ連中になりますと之に鞭と言つて鹿の陽物を乾固した物を削り、夫れを粉にして酒の上に加へて飲むと云ふ事が

非常な御馳走になつて居る。是は膠の棒のやうに乾固めたものでありまして私の見たのは六寸位ありました之を酒に混じて飲めば精力がつくのであると云つてゐます。道教の方ではさう云ふ風に飲食物を以て精力を付けると云ふ事に力を入れて居る事は最も力説しておく可きことであるのであります。

次に住宅のことに就て先づ門の扉のことを申せば每戸、門には門神と云つて極めて派手やかな一對の神様の繪又は彫刻を現はすのであります。富有な家ならば立派な扉の板に美しく之を彫刻するけれども普通の家では繪をたゞ貼るばかりであります。門神を貼らない場合には所謂對聯の文字を書く、先に申した門聯がそれであります。聯の文句は色々緣起の宜い言葉を書くので、例へば『根深枝茂』『生財有道』とか云ふ文句を商店であると書く、商賣の相違によつて文句も違ひますが讀書人の家であると『門無俗客』『讀古人書』と云ふやうな洒落れた雅句を書いて居る。文句は立派であるが家の內では別に古人の書を讀むと云ふ氣分は少しもない。又其の日の暮しにさへ困つてゐる位の家でも『出門見喜』と云ふやうな事を書いて自分で慰めて居るのである。實際を知つてゐて其文句を見ると云ふと寧ろ滑稽極まる次第であります。支那人はそれを當然と考へ

又それで滿足をして居る。表面上に立派な事を書いて行人に見せてさへ置けば內では博奕をしてゐるようが非道のことをして居ようが平氣であるのである。つまり『積善家有餘慶』と云つたやうな金看板を掲げておけば家のうちはどうでもよろしいと云つた調子でゐるのである。

三　呪咀禁厭の風

さう云ふ風で支那俗間には家の中に道教の香ひが非常に濃厚に行渡つて居るのでありますが、其中特に支那人の注意をしてゐるのは惡魔除の事である。例へば支那では盂蘭盆の前後には家室の入口の横木に黃色い紙を貼付けてゐる。其の紙に草書體にて何とも言へない惡魔除の文字が二三字書いてあります。各房室の壁に貼つてあることもあります、揚子江方面では大分見あたりましたから一二枚貰つて來ようと思ひましたが、時が丁度盂蘭盆の時分でまだ貼つたばかりの折でありましたからメクル事も出來なかつた次第であります。大抵その文字は魔除け文字でありまして書法まで略一定してゐるのです。是は萬法歸宗と申す書物に載つてゐます。その書物は臺灣あたりにもある。臺灣本島では發賣を禁じて居るらしいが支那の方では得られます。尙魔除文字に就いて今一つ注意すべき事は、家の建築の場合に大工なり左官なりが其の家の主人と感情上の行違

ひなどのあつた場合に大工の方から其家の柱の中又は門の横木の間などに紙を挾み込み、そして其の紙中に『此の家の主人は早く死ねよかし』と云ふやうな意味の呪の言葉を書き込みます。さうすると其主人もさるものそれを探知して負けずに『そんな事は何の効力もない』と云ふやうな事を書いて夫れを無效にする丈の符紙を貼るのであります。是は大工左官の方から前金でも貸して呉れと要請しても主人がそれに應じなかつたと云ふやうな場合などに起ることらしい。夫れに就いて色々滑稽な話が傳へられてあります。大抵そのやうな時には呪詛の符紙に『鬼』と云ふ字を書入れますが其書き入方もチャンと極つて居ります。さう云ふ方面には大工も主人も神經質になつて居るので、惡魔除の事と呪の符紙を入れる事とは道教の方で最も喧ましい事件になつて居るやうであります。其の他家のもの、町内の人などが普通の死方でなく變な死に方をした場合、例へば首を吊つて死んだと云ふやうな場合、その時には是れ亦非常な騒ぎをする、道教と佛教とが混和した考へであるが、さう云ふ死方をすると其の人の魂は無常鬼と云ふものになる。さうしてこれが遺族に祟りをする。さうされては大變困る。子孫に災が來ることをひどく氣にする、そこで極力此無常鬼が家のうちに這入らぬやうにするのである。先年自分は安徽省の石埭の山地の

宿で、其夜實に九十二、三度と云ふ暑さ、迚も寢られない。徹夜する積りで日誌其の他の紀行の書類を整理して居ると夜中に爆竹の音がひどく宿の壁に響く。非常に騒がしくて窓から砲彈でも打ち込まれるかと思つた。それに銅羅笛なども加はつて大變な騒ぎ。自分は何事かと唯驚くばかり外へ出て見やうかと思つたがウカウカ外國人の身で夜半に外へ出て傷でも受けようものなら大變だと思つたから外へは出ないで、ぢつと室内に居りました。騒ぎはひとしきりで止んだが、又三時半か四時頃になると再び同じやうな銅羅爆竹の大騒ぎ、今度はその爆竹と銅羅が遠方から來て宿の前を過ぎ又次第に遠ざかつて行くやうに聞こえる。一時は我が宿が壞はされて了ふのぢやないかと思ふ程の大騒ぎであつた。夜が明けて宿の老班に向ひ夜半の事を聞いて見たら、『あれは此の頃近所の籠屋の亭主が奥の部屋で首を吊つて死んだ。其無常鬼が祟りを爲すといけないから其魔除をする爲めに爆竹銅羅を用ひたのである。あれでその籠屋へ鬼が祟りをしないやうになるのだ。又二度目に騒いだのは此の宿の前を葬式が通つたからその通過した道路はその穢れを淨め惡魔の災を避ける爲めにしたのだ』と云ふ説明であつた。あとでその籠屋の老爺が首を吊つたと云ふ場所へ行つて見ると其處は陰鬱な處で如何にも暗示を得ると首でも吊りたくなるやうな場所

に見えてゐた。支那人はさう云ふ悪魔除けの事には極力努めるのである。支那俗間はすべて此の式の餘程道教がかつた迷信で日常行爲を左右されつゝあることがよほど多いのであります。

四　卑俗なる道教趣味

次に道士のお話を少し致しますが、道士と云ふのは今日さう澤山は見當りませぬ。寺や廟に行きますと稀に居ります。青島の妙心寺あたりにゐる老人の道士などは甚だ仙骨を帶びたものである。その道士は耳が大聾で脫俗してゐる。

平常道服を着てゐて、さうして爪を長くして居ります。爪のことは必ずしも道士でなくても仕事をしないと云ふ事のシンボルとして爪を長く二寸も三寸も延ばして居る連中があるのであります。其の道士は平常何をして居るか知りませぬが、自分の會つて物を云つて見たその老道士は神籤を寺院内で參詣人に賣つてゐた。吉凶の事を占つて多少金を得るやうなことをしてゐるやうでありますが一定の財產があるのかどうか能く分りませぬ。又李梅庵清道人と云ふ大柄な道士然たる人が上海に居りました。弟子をたくさん養成して居りました。書を能くしてゐたので知られてゐたが兩三年前上海で亡くなられました。

道士ばかりでなく道教的生活をしてゐるものは藥のことに明るい、藥は色々に用ひてゐます。今仁藥の事につき少し申しておきます。道教の方で道教趣味の上に一番効力のある藥は長命の藥である。長生きをしたいと云ふ場合に用ひる藥である。そのうち最も有名なのを『龜鹿二仙膠』と云ふ。之を日に二匁か三匁位用ひる。あまり澤山用ひると精力が付き過ぎる虞れがある。是は鹿の角を百斤龜の甲を二十斤水は何の位入れるか知らぬが兎に角夫れだけ入れてよく〳〵何日間も煮る、そして汁を取るのであります。また人參その他草根木皮でもつて長命を保つやうな藥となつてゐるものが本草學の方に數多見えてゐる。それは何れも支那風の名前になつてゐるのでありますけれども、大體其の文字を見ると材料の何たるかと云ふ事は髣髴するのであります。此の長生藥の方面の事は支那人の間には非常によく發達して居るのであります。

それから支那の内地には日本の仁丹が大層行はれて居る。安徽の山間二百里位這入つても仁丹の廣告は日本の内地と餘り變りのない位によく見る。紫鐵板に白くコヂック體で拔いた看板が到る處に目に付く。亞米利加のスタンダード會社の廣告『美孚』と大阪の『清快丸』の廣告もありますが『仁丹』の廣告は第一等で非常なものである。大いに日本の商人の努力が見えてゐて愉快

に感じます。支那ではさう云ふ風に仁丹が歡迎されて居りますが。是は仁丹の製造元に知られて居る話かどうか知りませぬが、支那人は仁丹を上の口からと下の口からと用ひると云ふことである。道教的趣味から來たものであるか兎に角仁藥として又房事用として盛に使用されてゐるさうであります。詳しい事は諸君の御想像に委せます。先づ大體支那現在の俗間に於ける道教思想の風俗上の事は以上申上げた事で御推察を願ひたいと思ひます。

最後に支那の俗間思想として道教趣味の最も強く現はれて居るのは自分の考では畫舫の中の遊びであらうと思ひます。此畫舫では南方に在りて一番有名なのは南京の秦淮と云ふ河の畫舫であります。其處には畫舫が何千艘ゐるか分らぬ位澤山居ります。それへ遊びに行く連中は夜を徹して遊ぶのでありまして、是は濟南府の大明湖以上の光景であります。此畫舫の遊びと云ふものは最も遺憾なく道教趣味が現はれて居ると思ひます。風流なるものになると文人が夫れに乘つて美人を伴ひ詩でも作つてゐると云ふ風に取れるが、事實はさうでなく、大抵七十歳位の藥罐頭の老爺の鼓腹をしたる金持翁などが若い妓倡を二三人連れ込んで趣味深く遊び、畫舫の行く所にまかせて行くと云ふ調子である。濟南などでは蘆の生えて居る中を胡弓を奏しながら御馳走と美妓と

でゆつたりとした現代的の道教的氣分になつて如何にも天下泰平と云つた態度で優長に遊んで居る所が見られるのである。尙畫舫の光景殊に夜半の光景に付て詳しく申上げたいこともあるが此の位に致して置きませう、支那に遊ぶ人々は畫舫に就て一應注意を拂はれるならば道教方面の事が最も手取り速く領かれると思ひます。

五　支那俗間の道教と日本

尙ほ本題に因みて色々申したい事もありますが今日の支那全體を通じて支那俗間の最も信仰の力の强いのは道教をおいて他にないと云つても宜からうと思ひます。國家の表面のことには儒教をかつぐ。しかし事實其の俗間の力となり土民全體の精神を支配せるは道教の方にあるのである。儒教はホンの形式上押立てるに過ぎないのであります。支那から來る知名な支那人の話を聞いても分ります、論語の如きは唯表面上人と交際する時にのみ用に立つものである。あれにそんなに重きを置いて呉れては困ると云ふ風に實際支那人は云つてゐる。事實俗間のすべては道教でもつて支配されて居るのであります。日常生活の事、財產の事、子孫の事、長命の事、すべてのことが道教に根をおいてゐる。詰り社會を收攬する所の力の根本に觸れてゐるものは道教である。

國家に警察權が確立し、それが強ければ其れ丈で安心の出來る生活が出來るわけであるが警察は事實あつてもなきが如く泥棒をしたらしたものゝとくと云ふ風である。自分で財產を澤山拵へたものは之を人に見せないでしまひ込んでおくことに苦心する。支那人でありながら上海の居留地などへ出て來て外國の保護の下に生命財產を安固にし、そして餘生を送りたいと云ふ事を彼等の理想にして居ると云ふやうな次第であるから國家には信賴せず、どうしても道敎の力をかりる。道敎の趣味と云ふものによつて安心を得ようとする。されば支那俗間の全體を總括する場合には其共通的の根抵に觸れて居る道敎思想でもつて總括するのが最も策の得たるものと思ふのであります。

尙ほ此の思想が日本へ這入つて來てからどうなつて居るか或は竈の神を祀るとか、道祖神をまつるとか色々道敎趣味として見える事が大分あるのであるが、斯う云ふ事については日本固有の習慣で道敎に似たものがないとも限らず、又支那文明が這入る前に日本だけでやつて居た事が自然道敎と軌を一にして居たと云ふものがあるかも知れない。又支那の道敎思想と申しましても最初に申しました通り吉凶ならば吉凶を占ふ事は殷時代にもあることである。卽ち龜の甲を燒いて

吉凶を占ふと云ふ事を既に古くからやつてゐる。詰り獸類の骨だとか龜の甲など斯う云ふものを燒いて吉凶をトすることはしてゐた。單に吉凶のことを氣にしてゐたと云ふ事は道敎を俟たなくても幾らもある事であります。日本へも後に支那の道敎思想が這入つて居るには違ひありませぬが尙南洋ならば南洋の方の文明の這入つて來たものとそれと聯絡があるかないか。もしあるとすれば南洋の方から來て居る思想のうちにも道敎的のものが幾分ありませう、南洋なり生蕃なりの神社の千木の造方を始め、衣食住共に日本と南方とは互に古代に於いて似た點がある。生蕃などの部落へ行つて見ると結婚などの場合に、例へば其家の娘が貰ひたいと思へば夜の內に其家の前へ薪木を積んで置く、さうするとそれを其家で取入れて呉れる。それによりて此方の意思を承諾して呉れたことが判る、謂はゞこれは結納である。是は日本の平安朝で『にしきぎぬ』などにある故事と一致するのであります。又言葉の上單語の上から言つても生蕃や南洋などゝ日本のそれとの間には思想の共通した所のあることが判る。日本在來の思想でたとひその元始形式が道敎に似て居るからと云つて必らずしもそれを支那へ持つて行かなくても宜い。そのことは別として支那本來の思想の中にも大分道敎的の氣分のものがある儒敎本位の形式で束縛されてゐる部分もある

が、支那人が古から今日に渡り本當に人情の實際問題に觸れ機微に觸れた問題になるとこの道教的情緒で以つて處置して行く傾向がある。現に今日の四億の支那俗間が眞に徹底的に日常行爲の原動力となし根本的の力となしてゐるものは道教的の情緒であると云ふことを視なくてはならぬのである。

四　道教に現はれた城隍廟の尊信

一　山嶺の城隍廟

支那又は臺灣に於ける現在の宗教の中で道教が實際上最も勢力を占めて居ることは言ふまでもない、露骨に言へば、今日の漢民族の信仰の方面は道教の色彩を以て掩ふことが出來る位に濃厚に現はれて居る。其中でも長壽、財產、子孫の三點に於ては最も、多數の人々の信仰を集中せしめて居るのである。此事に付ては自分は度々既に其實況を上に紹介したが、今こゝには更に立入つた方面のことで、漢民族の信仰の中心となり、漢民族の殆ど全體から畏敬されて居る所の宗教

上の中心、或は又最も多くの人々から內心頗る恐れられて居る所の宗教上の中心に就いて述べたい。それは表題に掲げた所の城隍廟のことである。

城隍廟は孔子廟の文廟に對し之を武廟と稱し支那の南北各地方到る處にある。社會各方面の人々の信仰を集め、又之に參詣する者が非常に多い、支那の都會又は田舍に於て自分は此城隍廟へ度々參詣して見た。又臺灣に於ても各他の城隍廟へ機會のある每に參詣して見た。實際此城隍廟は今日老若男女を問はず、各地民衆の殆ど集會所の如く、又慰安所の如く或は緣日の中心の如き觀を呈して居つて如何に心安氣に此城廟隍を中心に各階級の人々各種の職業の者の參詣所であることがわかる。都會地を離れた田舍の山間僻地に行つて見ても猶ほ依然として城廟隍は村民の間に信仰を集めて居る。片田舍に於ける城隍廟の位置といふものは多くは山川の形勝の地を占めて、謂はゞ非常に眺めの好い地勢にある。或は高山の山嶺などに魏然たる廟が如何にも神々しい位置に建てられて居るのである、山東の青島から汽車に乘つて濟南に至る一帶の田舍を旅行して行く間に於ても、城隍廟の祠堂は汽車の窓から幾つも指すことが出來る位である。申すまでもなく道教の神樣ととい ふものは特に天然自然の景勝の位置が選ばれてゐる。其地理上の關係で自ら

之に一種の信仰心が起るやうな風に仕向けられてあるものと見えるし、又道教其物の精神が天地長久なる自然の一種言ふべからざる偉大なる力を信仰させるといふ所に發して居るといふ點もあるのである。

城隍廟の現狀が大體上に述べたやうなものであるとすると然らば何故に此城隍廟が現在あらゆる住民の信仰を集むるに至つたかと云ふ事を考へて見る必要がある。此の事に付ては人々に依つて種々な觀察を下すであらうが、自分は次の如く考へて居る、城隍廟と住民との間の關係は、恰も日本で言つて見れば天神樣の社殿とその地方の人々との關係の如き程度に見らるゝのであるが、併しながら日本民族の間では、天神樣に對する一般の考の中には別段神社の神樣がその氏子そのものに向つて司法上の權能を有して居る、などとは夢にも考へてゐない、或は又我々に向つて刑罰を與ふるといふやうなわけの冷やかな恐ろしい觀念は少しもない。ところが支那民族が城隍廟に對する考は一面に於てこは彼等民族の幸福の神であつて鎭守の神である、土地の神であるといふやうな意味で、その地方の安寧幸福を冀ふ上に立てられてゐる神である、併しながら他の一面に於ては土民の考では此城隍廟の神樣はその町の人或は村の人の方で惡をなし罪を犯すものがあ

る場合には手嚴しい罰を下すものであると信じてゐるのである、事實支那社會の現狀といふものは、四書五經に述べてゐるやうな色彩は認められぬ。中には有德の君子もゐることはゐるだらうが、住民の多くは皆社會的に或は宗教的に已れの心に於て夫れ〳〵一種の罪を犯して居るといふことの自覺を有つて居る者もあるであらうし、或は自覺なくして罪を犯して居る者もよほど多いのである、さういふ恐怖心から他力信仰が強くなり祈りによつて城隍廟に迎合し神譴天罰を免れたいと云ふ考を起してゐる。出來れば其神樣に御縋りをして其罪を少くしたいといふことを願つて居るのである。

所が虫の宜いことには、自分が惡事を働いて居りながら其惡事を許して貰ふ。神さまに願へば必ず加擔してくれるものと思うてゐる。のみならず其神樣に向つて一種の賄賂的の考を起し神樣を人間同樣に視てどうにかして神樣に取り入り神樣に氣に入られたいと考へてゐる。神樣を宛然現實に於ける人間と同じやうに考へて、相當な物を神前に持つて行つて供へたならば自分の罪は必ず宥して呉れるのだと信じてゐる。此司法の神樣の前で頻りに自分に都合の好いことばかりを願ひに行くのである、城隍廟の方では住民に一種の恐怖心のあるが故に、其廟の門前に普通神樣

の御使者を建てる、多くはそは一對の像であつて、日本で言へば仁王様の彫刻の如き偉大なる人物が建てられる。其彫刻は普通一つを千里眼と云ひ、他の一つを順風耳と云つて居る、その意味は一人は非常に眼が能く利き、一人は非常に耳か能く利くといふ、其二つの觀念を形の上に現はして居るものと察せられる。是は若し町民又は村民が惡事を働いた場合は、一方は千里眼の眼を以て透察せられ或は又如何に城隍廟から距離のある遠方で以て惡事を働いても、耳の非常によくきく順風耳が居つて、自分の惡事を城隍廟に告げて行くといふ意味なのである。此二人の仁王的の彫刻が門前に立てられて居るのである、また廟の内部には左右に種々なる武器が裝飾されて居る多くは支那古代の武器に系統のあるもので、周時代に用ひられて居つたものに起因を有して居るらしい、是は古典にある武器の形をしたものが段々形を變じたものであつて、聞く所に據れば、城隍廟の祭の時には其行列の中に此武器の行列を加へることになつて居るといふことである。

上海の城内に湖心亭といふのがあつて、其側に例の城隍廟がある、此城隍廟は後ろに湖水を控へて居つて前に最も賑なる所の街を控へて居る、夏などは此城隍廟を中心に集まる所の城内の人

とは非常なもので、飲食店が出る、屋臺店が出る、小鳥の店が出る、骨董店が出る、勸工場が出來て居るといふやうな譯で、其雜踏さ加減は東京の淺草や緣日よりも甚だしい、此廟の内部には又無數の佛像が羅列されてあるし、又其廟の神様の前には種々なる加持祈禱御籤等迷信の上に必要なる具が取揃へてあるし、其外提灯であるとか或は線香のやうなもの等、普通道教で見る所のものは余程みつしりと用意されてあるのである。一度此城隍廟に參詣した者は如何に支那民族の信仰を猛烈に集めて居るかといふ事が之を以て見ても分るのである。臺灣の都會なり田舍なりを歩いて見ても、矢張り此城隍廟に對する信仰の厚いといふことは極めて明瞭に分る、尤も臺灣には城隍廟以上に媽祖宮の信仰といふものが亦非常に盛である。殆ど支那の城隍廟と對立して居る形である。若し臺灣に於て道教の方面を陰陽二つに分けて考へる場合には、媽祖の方は陽を現はし、城隍廟の方は陰を現はす、詰り媽祖は積極的に幸福のことを祈る所である。が、城隍廟の方は犯した罪を罰せられないやうに神様に願ふといふ、謂はゞ消極的の方の信仰の中心になつて居るものと見ることが出來る。尚ほ支那全體に付て考へて見ても、北部の方は兎角陽の方面の信仰が多くて、詰り積極的に長壽、財産、子孫といふやうなことを祈る外に、難行苦行修養を積むと云

ふものが多い。南の方に行くとさういふ現實的な又甚だ肉慾的のことを神樣に祈ると同時に、此陰の方面の消極的のことに付て斯樣な城隍廟などを信仰し、それに依つて神罰を受けないやうな方法を講ずるといふ虫の宜い考を懷いて居る者が多いかのやうに考へられる。

斯樣な譯であるから支那なり臺灣なりの道教方面の研究をやつて行かうといふ時には、城隍廟を通じて現在の漢民族の思想を見るといふことが最も明に鏡に映して見るやうな氣がする、固より是は餘り教育のないものの方面に付ての心的狀態を見たのである。新しい教育を受けたものは寧ろこの城隍廟に出入することを餘り好まない、寧ろ恥かしがるやうな者もないではない。東京などに留學に來て居る者の中には鄉里に歸つて正月に對聯を掲ぐるなどゝいふ舊習は之を、日本人に見られるのが恥かしいといふやうなことを言ふ者がある位であつて、文明の風に當つた者は迷信に近い廟の祈禱などいふことは餘り好まないやうに見える、けれども一面かち言ふと斯ういふ民族的の考といふものは宗教方面に於て最も能く率直に現はるゝものである。殊にそれを城隍廟を通じて見るといふことが如何にも適切であつて、又どの地方に行つても是が卑近に見られる現狀であるから、玆に道教を研究する上に於ては城隍廟の調査研究が最も適切な手掛となつてゐる

る事と並びに道教全體に於ける城隍廟の地位といふものを說明して此の方面に興味を有せらるゝ讀者の御批評を仰ぎたいと思ふのである。

五　道教研究の宣傳

一　支那思想の側面觀

支那四億萬の國民の思想は、中華民國になつて以來、殊に最近國際聯盟の成立つ前後に於て著しく變化が現はれた。是は支那民族破格の出來事として特別に考へて宜しからうと思ふ。支那には舊來の思想として、道教、佛教、儒教の此三教が國民全體の精神を支配して居つたものと見ることが出來る。申すまでもなく爲政者は其中で儒教に最も重きを置き、政治の上に之を加味して制度文物其他の事を順序立てゝ居つた。併しながら書物の上ばかりでなく、實地の支那を視察した上で熟々自分の感じたことを忌憚なく申せば古來支那思想といふものは儒教或は佛教よりも道教、殊に新しい意味で謂ふ所の所謂道教といふものが實際上の勢力を占めて居たといふことを信

ずる。英雄が天下を取つた場合、或は爲政者が政治を極く派手に行ふといふ場合には、人心を新にするが爲めに儒教をかざして萬民に臨むといふことは、是は殆ど定例の如くなつて居る。けれども、事實國民の思想の根柢に這入つて考へて見る時にはむしろ道教の方が事實上の勢力を得て居るのでないかと思ふ。尤も時と場合に依つては表面に儒教をかざし、或は儀式の場合に儒教又は佛教などの典例を持出すこともある、けれども家庭に於て、或は個人的に於て、又は社會上の事々物々を見る場合に於て、儒教、佛教の色彩よりも道教の色彩の方が最も顯著に現はれる、或は儒教並に佛教の上に更に現代主義の趣味を加へた所の一種の新しい道教といふものが現はれて居る。其意味に於て現在の支那四億有餘萬の國民の思想を研究する場合に於ては、道教に根柢を置いた見方を採るといふことが、極めて適切な方法でないかと思ふ、

寺院其外國民の信仰心を聚めて居る所の建築物を歴訪して見ても分ることであるが、嘗ては儒教なり佛教なりに傾いて居つた思想が中心の力となつて之を建設し、修繕して居つたであらうけれども、事實爲政者が變つて來るとか、或は世の中が段々變轉することになると、最早もとの儒教、佛教といふものゝ色彩が次第に薄くなつて、終ひにはさういふ方面の信仰といふものが殆ど

零になつて居るのではないかと思はれる位になつて居る、實際立派な寺であつても、其寺を守つて居る人々は最早明かに道教思想に囚はれて仕舞つて居つて、儒教といふものは唯形式の上に之を現はして居るに過ぎない、古來漢族の思想を支配して居つた泰山の如きも、固よりその麓の方には佛教の寺もあり、又佛教に關係の深き金剛般若經の如き經文を刻んだ所の立派な磨崖の碑もある位である。又上の方には儒教に因んだ所の建築物も段々あることはあるけれども、日觀峰とか月觀峰とかいふ如き山の嶺、又は碧霞元君の宮殿の如き、其外道教趣味が中心の力となつて建てられた所の建造物が頗る多くして、優に佛教や儒教の建造物を壓して居る觀がある、單り泰山のみならず、支那の民間の信仰を聚めて居る所の自然物の中には道教思想の顯著のものが實に多い。斯ういふ方面を見て居つて、偶に儒教の廟を歴訪して見るといふと、今日實に哀れな姿になつて居るものが多い。又山東方面を歩いたとき濟南府の郊外に閔子騫の墓を訪ねたことがあるが、其墓の前に在る所の廟の如きは木像こそあれ、其像の周りといふものは剱殼が一杯積上げてあつたり、豆殼が押込んであつたりなどして、まるで百姓屋の物置同然の姿になつて居るし、又其廟を守つて居る番人も唯小遣錢を得むことをのみ考へて居つて、何等古の閔子騫其人の人格を胸に

考へて居る譯でもなければ、何等儒教の精神を以て行動をして居るといふ風にも毛頭考へられなかつた。是は單り閔子騫の墓守のみならず、最も信仰の深かれかしと思ふ儒教の本場の曲阜の文廟であつても既に同一であつたのである。

かやうに支那思想の側面觀を述べ來たるといふと、儒教は地に落ちて道教其物が顯著に現在の支那國民の思想を支配して居ることの例證が幾らでも擧がるのである。

二　丸井翁と道教の調査報告

先年、臺灣總督府の社寺課長をして居らるる丸井翁が、宗教調査報告といふものゝ第一卷を出された。此報告は主として道教を調査したものであつて、佛教其他に關する調査は後日發表されることになつて居る、此報告を通覽して見るに、從來日本文で發表された道教の研究書としては此書物の右に出るものはあるまい、東洋の宗教研究に對して此調査報告が出たといふことは非常な強味でもあるし、又之を手掛りに益々微に入り細に入つた所の研究の出むことを我々は希望して居るのである。

惟ふに臺灣に於ける三百萬の本島人は泉州、漳州出身の福建人と、今一つ廣東より來た所の廣

東人種、此兩族が本島人として蔓つて居る、此兩族の宗教思想は謂ふまでもなく支那大陸の三大思想を以て律することが出來るけれども、其中で最も顯著に現はれて居るものは矢張り道教である、固より一つの宗教となるまでに至らない迷信の如きものも餘程弘まつては居るけれども、迷信の起る端緒を調べて見ると、多くは道教的の色彩を帶びて居る、最も本島人の信仰を集めて居る所の媽祖廟の如き、又城隍廟の如き、其外土地公祠の如き、何れも皆道教の建造物として臺灣到る所に其數を增しつゝあるのである、佛教又は儒教の方面の建造物も相當にあるけれども併し島民の信仰を集め又日常生活に最も密接の關係あるものとしては、どうしても道教方面のものを措いては他に頼るものはないのである、政治上に於て總督府の設備其他施政の方針に適ふ所のものは其支配を受けては居るけれども、島民の胸の中に這入つて、本當に島民を同化し、又善い方に導き、其溫かい氣持を以て互に接するといふのには、是非共此道教の關門を經なければ本當の握手は出來ないものと言つて差支はあるまい。

丸井翁が其調査報告の開卷第一に此道教研究の必要であるといふことを力說して、殊に爲政者が此道教方面を大に開拓しなければ本當の政治は執れないと言つて居らるゝのは全く同感の至で

ある、折角此臺灣に道教と云へる事實が存在する以上は、我々內地に居る知識階級の人々も、どうにかして此方面に今少しく研究を進めて行きたいものである。

三　道教研究の宣傳

從來內地の學者間に於ては、在來の儒教研究が宛然漢學者の研究の殆ど大部分であり、今少しく露骨に言へば、殆ど其全部を占めて居るといふやうな傾向があつた爲めに、道藏は固より道教方面の研究といふものが疎かにされて居る、申すまでもなく儒教の方は一種の謂はば形式方面を主として論じたものである、今日の支那人から言へば、徹底的の信仰は寧ろ道教の方に在るといふことは支那人も認めて居るし、我々外部から見た者も切實に其點を感ずるのである、それ故儒教の研究を爲す者が一方に在ると同時に、どうにかして道教の研究の方を吾人は宣傳して、さうして支那民族全體の現代の心理狀態が那邊に在るかといふことを突留めて見たいのである、それには道教方面の研究が今少しく盛にならなければ、支那民族の本當の信仰心なり、趣味なり又生活上の彼等の慾望、色々それ等の方面のことは道教の關門かち這入ることが最も適切なる方法であると信ずるが故に、玆に道教研究の宣傳を唱へたいのである。

六　支那の主權と民族心理

一　支那政府の實力

ワシントン會議の槍舞臺で一支那全權が先頃貴官はその眞に支那を代表せる全權なりといへるかと詰問せられて氣の毒な窮地に陷つてゐたことのあつたことは今なほ吾人の記憶に新たなことである。今實際北京に親しく來てゐてそして北京政府否中華民國大總統府なるものゝ實權を面前に見て見るとその國旗の五彩の意味する滿、蒙、新疆、チベット、支那本部の五域に對し何等その實權の及んでゐないことは勿論又本部の十八省は愚か長江以北丈にでも及んでゐるとは思はれない。露骨に打ち割つてその眞相を述ぶれば直隸の一省丈でも完全に行つてゐればまだしもだがそれさへ怪しい。消息通の說を綜合して見るとそは僅かに北京の城內とあとは周圍僅かばかりの地域に過ぎぬ。國庫歲入の稅收入からいつても北京城內のそれと關稅と鹽稅の三者丈が辛うじて考へられる。それも關稅は列國よりの制肘があり鹽稅は外國の手で鹽務稽核所をおいて纏めても

ちうてゐる狀態である。名は四億萬人をいれた共和民國の政府だが實は此の如き氣の毒な悲況にある歐洲のモナコ王國に較べては早計だが民國の大總統といひ民國の總理といふその實北京城壁內のそれにすぎぬと極言する方が眞相に近いのである。

二　北京中央公園の石頭牌樓

支那政府の實力はかやうに達觀すればたゞの一掴みにも足りないしかもその當路者は從來餘計でもない外國借款を結ぶたびごとにその時の當路の大官は遊園地に壯麗な別莊を建てたり外國銀行と密約が出來たり租界から特別保護の受けられるやうになつたりする。またそれを樂みに外債がはやく纏まるのでもあらう。多少はいづこもおなじ秋の夕暮れだとは近來大分了解されてゐるやうだが支那にはそれが餘りに非道いと取沙汰されてゐる。その癖體面論は例の面子で却々に八釜しい。然しその半面は實に目から鼻に耳から口に拔けるとでもいひたい程である。一例を最近の事實に徵して見よう。歐洲戰爭の當時支那がドイツと國交を斷絕するや北京城內東單牌樓の北方にあつた有名なドイツの白色石頭の牌樓の破壞がはじまつた。もとこはドイツ人が往年支那政府にせまつて支那の費用もて屈辱的に建造せしめられし惡記念の石造樓門であつたのである。それ

故支那國民としてまた北京兒としてその時機にかゝる屈辱的の記念物破壞の動議のあつたことは誠に美擧として千載の靑史にレコードさるべきものであつた、然るをいづくんぞ知らん。民國の公園殊に最も北京都人士の蝟集淸遊に適する宮城內は中央公園の正面に之を運んでいつてそのまゝ再建したゞ申し譯的にこれに紫色の甍を列べて屋宇に冠してゐるだけの相違が見出されるまでゞある。血を以て血を拭うた所で淸められる譯はない。支那は勞銀が廉い國だとはいへ餘りに兒戲の業ではないかと考へられるが、蓋しそは日本流の考へ方であつて支那民心の眞相からはまだ〳〵非常な距離があるのである。つまり民國人はそのこれをもとの大路から取壞したといふことによつて國民としての面子は立派に解決し了へたものだと無理にでも考へるのである。事實それ丈なら實際また立派な談柄となる。然るに、更にこの廢物を利用して公衆の利便な所殊に天下の中央公園の入り口に新たに石造牌樓を出現した。これが事實再建であつてもその事は全然別個の問題とし且これが建造を許可したことによつてその時の當路者は物質的に吉祥の來臨があつた譯である。勿論またその建造者側の連中はこれが竣工によつて少からぬ吉祥來福を見た譯である。多少のことは兎も角も國辱を除かんとして却て民國の品位を損ずることの如何ばかり大なるかに

目が眩んでわからないのである。民國人の心理はかくの如き活き方をなすものと考へなくてはならない。また時には日本の富豪の聯想される節もあるが支那で一世の富貴を極はめた豪放の士が或ひは鄉黨に貧者を憐れみ恤救を事とし或ひは道觀祠堂の再建に莫大の喜捨を敢てするなど隨分敬服崇拜せしむる如き行爲をなすものがある。もとよりこれには衷心積善の至情よりなせるものもないではないがおほくはこれは道教思想に心を痛められ自己の罪亡ぼしのために氣がかりでならぬゆゑしてゐるとかまたはこれ丈の善根に對し打算的の神の感應を求めんがためにしてゐるとかに相違ないのである。道教の教へで有求必應とは昔く支那俗間に廣がれる思想の流れである、されば表面の行爲を見た丈では眞相を拉し來たることは困難なのである。

近時支那で慢性的となつて來た例の排日的示威運動の如きも吾人はその表面の白旗黄旗の景況を見るよりもその幾千の行列々員の心理が小賣品の燒打破壞乃至は青年者流よりの迫害强要等のことを恐るゝがためである。その念の方が强く何の排日熱もなきにたゞ加はれるものも少なくない狀態である。事實今日日貨杜絶の一ヶ月にも及ばんか毎日の日用品にて忽ち自分にこまることは目に見えてゐるのである。さらばとて吾人はこれをあなどり輕んずることは戒むべきことなる

も事實はその邊の所にあるのである。また支那民人の心理は概して出よう次第で高く大きくこちらから出ると問題にならぬこともある。尤もこは國の背景の力にもよるが西人の大々的に行へるモヒの密輸入の如き大魚は兎角網にかゝらぬ秘訣があるこれに反してやり方の小規模なものは却て常に問題にされてゐるから目立つて仕樣がない。また不思議なことに民國人はその愛藏品などを人から譽められるのを險呑に思ふ。婉曲に拜み倒されて持つて行かれると思ふからであるその邊の常識心理の發達してゐることは日本人は到底その足許にも寄付けないのである。

（注意）　右は著者の北京滯在中の手記である

七　正月の北京

一　元旦の旭光を渤海の水平線上に拜す

年末年始にかけての支那漫遊。餘程の物好きか、急用のあるものか支那かぶれの研究者か但しは借錢逃げの旅行者か、人は何と見ようが支那文化が祖先の地の文化の如く思はれ毎年の渡支が

本國にでも歸る氣持のする自分には事情の許す限り大陸に毎年出掛けることにしてゐる。實は支那へ十數回。昨年も三回、秋十月迄揚子江廬山洞庭湖湘瀟八景の遊歴、支那へ幾度行つて見ても無限の趣味がある。東京から中國、九州に行くのと別段變つた氣持ちはしない。駱駝のモーニングの不斷着に和服一揃唯旅裝は之れ丈である。北京の前門入りは元旦であつた當日太沽塘沽間結氷散流、それより天津に至る間は結氷固く鎖して二艘の米國スタンダード石油美孚帆船の如き身動きもならぬ狀態になつて居たのが目擊された。元旦の旭光は珍らしくも商船河南丸に居た爲め屠蘇氣分で之を渤海の水平線上に拜した。その時甲板の溫度は二十八度を示してゐたが其後二週を經た昨今の北京の寒氣は十七八度に降り、スティムの通つて居ない室内では平野水が氷詰してゐて少々の火では容易に解けない。又卓上のウニが氷結してゐて雪に色を着けたやうでシヤリシヤリ音がする位である。

二　元旦早々白旗黄旗の行列に遇ふ

北支那の冬はさうは云つても左迄恐れる程のことはない。夜間は十度位に下るがそれでも露店は嵩文門内東單牌樓大街の兩側にも列び飲食物を鬻ぎ眞鍮の皿二枚を打ち鳴らしてチンカンチンカンと客を呼んでゐる。又天津では正月元日の朝御苦勞なことに民國青年共驛前の大通り十餘町を排日運動の行列を作りねつて歩き反對二十一箇條とか反對山東直接交渉など〻日奴呼ばはりをした白旗黄旗の大小思ひ思ひに飜へし三尺餘の大喇叭を音頭に各部署の隊長排日の歌を合唱じつゝ往來の電車、自動車、洋車馬車を妨げてゐる。旗一本毎に幾らかの日當、割增、酒錢の付いてゐる例の大道支那劇としか自分は思はなかつたが當日北京行發車時間の迫つて居る自分にとつては少からず氣がもめたのであつた。先年北京でこの種の行列を横切り袋叩きにされた川田院長の故事を聞いてゐるので自分は仕方なく順々に果てしなく繰出される旗の文字を讀んだりしてその我慢がよい修養になると思つた。遂に見張りの巡警に同情されて辛くも發車間際に之を横切り驛に着くことが出來た。いかに寒くてもそのやうなことは問題でない。排日のことは氣にしてゐては際限がない。邦人の處に紅紙の名刺を持つて新暦に倣ひ年賀に來る者も亦決して少くない。要は各々自分の利得のある方に來ると概評してよろしい。行列の事もつまりは山東問題が民國の體面を汚されてゐると云ふ面子論より來てゐるのである。中には此の面子論を翳して爲めにする所あらんと考へてゐる者もあると見て差支ないのである。

民國人の心理狀態は邦人から性急に餘り種々のことを持ちかけては可けない。米支關係は以前程でなくなり米人の心事も大分判つて來たし英人側でも張作霖氏の爲に英公使が臂鐵砲を食はされたとか、英公使が年賀に來なかつたとか種々デリケートな問題がある際日支關係は兎に角好く取沙汰されてゐる。國民の方でも眞に相談をかけたがつてゐる。オリエンタル・マインド（東洋的精神）に於て確かに双方通じて居る所がある。それを邦人側で破壞しないやうにしたいものである。民國人に對して最も大切な秘訣は此の面子の尊重である日支提携の儒教問題の如きも日本から出苽けて行つて釋奠を擧げてやらうなど云つたら果して民國人は快感を起すであらうか。この澆の機微は極めて愼重の上にも愼重を要することゝ思ふ。

近來金紹城陳衡恪顏世清等の畫家が日支聯合の繪畫會開催の擧を三四月の候東都に行はれんとし又民國視察研究團が生れ出でんとし文化的に双方の諒解を得るの日近づかんとするの感じがする。又自分の專門の殷代龜甲獸骨（河南出土）斷片百五六十その他金石資料は北京天津山東方面にて獲られ又文人墨客の趣味を親ふに足るべき各時代の文房具殊に硯臺や筆、墨の類には史的材料として見るべきものも少からず獲た。又同じ趣味の友、正金の武内金平氏は漢六朝乃至唐あたり

迄の古鏡をいくつも得られた。又北支那諸地方の文化を紹介するに足るべき衣食住の狀態を示せる寫眞三百枚、宮殿山水を寫せる寫眞類その他支那の正月を飾るべき五彩の門神對聯百餘程をも入手した何れこれらは歸朝の上何等かの催しによつて東洋研究者の爲に東都で公にしたいものと私かに思つて居る。

（北京にて）

八　揚州物語

一　久しく揚州を想ふ

揚州と言へば南方は江蘇省、美人の本場で蘇州のそれと一二を爭つてゐる所である。南北支那を漫遊する者はひとりとして揚州に一遊を試みようと思はない者はない。由來揚州の地は外人のこゝに住める者甚だ少なく、又從來殆んど西洋文明の之を侵した形跡はなく、全く純粹なる支那在來の古風な文化生活其の儘の狀態を今尙傳へて居る洵に懷かしい、優美な感じのする古都である。謂はゞ支那十八省のパラダイスとでも推稱せらるべき所であつて、支那に遊んだ者は此の揚

州に行かなければ支那に遊んだとは言はれないといふ位に吾々仲間にも喧傳されて居る所である『腰纏十萬貫』『騎鶴上揚州』と言へる風流の語が染出しにして、手拭に筆蹟鮮かに書かれてある、此手拭は揚州唯一の邦人、高洲太助翁の許に一遊を試みた風流人でなくては此一筋の手拭は獲られないことになつてゐるのであるが、とにかくこの都は風流古雅の都に見立てられてゐるのである。岩崎三井は腰に十萬貫を纏うて居る、けれども未だ曾つて鶴に騎つて揚州に上つたことはあるまい。吾人は腰に十萬貫こそは纏つてゐない。けれども船に乘つて揚州に遊んだのである、此點に於て吾人も亦高洲翁から一筋の染出しの手拭を貰ふの光榮を得たのである。實は自分は昨年始めて揚州の都を見ることが出來たのである。久しい間之に廻つて見たいと憶ひを掛けて居つたのである。今より六七年前丁度去る三月廿六日食道狹窄症で亡くなられた我が鄉里の先輩加藤恒忠翁と兼ねてから北京から揚州へ廻ることにしたらと考へてゐた。自分はその時都合が惡く揚州に上ることは出來なかつたが加藤翁は一人で揚州へ行かれた、其時高洲老人のところで加藤翁は色々の物語りに耽つてゐられたその話の中に、自分のことを如何にもそゝつかし屋のかはり者のやうに紹介してあつたので未見の高洲翁に取つては後藤と云ふ男はよほどの頓珍漢な男、頗る付

きの珍談屋と云ふ風に見られて居たらしい、併しながら自分の揚州を訪ねて見たいといふ、熱心は年來頗る切であつたのであるから此度は如何にしても一遊を試みたいといふ希望を懷き上海から數度直接間接に其趣きを先方へ傳へて置いたのである。

二　長江夜泊

八月上海から日清汽船の船で長江を溯り、漢口武昌の方面に行つた、其の時豫め揚州へは歸りの船で鎭江迄下り、それから乘り替へて揚州に渡る計畫を立て其の事は既に高洲翁へ通じて置いたのみならず、自分でも間違はない日と時間迄チヤンと知らして用意周到にやつた積りであつた。自分の其の時上海から乘つて行つた船は大眞丸と云ふ日清汽船の古船であつた。船長の崎濱惠三君は頗る用意のよい親切なキヤプテンであつて自分も安心して船長の事務に差支ない限りデッキに又船長室に種々な談話を交換し、殊の外愉快であつた其時の乘合ひ客には同文書院の監督文學士の齋藤重保君や中華民國の農牧實業公司總理の何扶桑君一名ホーメル君 Mr.Homer 抔も居てかなり船中の賑かさを持續して長江を上へ上へと遡つて行つたのである。所が南京の少し上流の所、芦原の汀で十數隻の湖南より出たらしい大の筏の群に出會はした。それ等の筏の群の下り振りの

いかにも悠長な趣のあるところを長閑に眺めながら我が船は尙ほ上へ上へと遡つて行つたのであつた。然るに滅多にないことであるが珍らしくも夕方になつて船の舵に故障が出來して齒車に破損を生じたのである。そこで運轉がピタリ止まつて了つた。船長始め汽罐の方の係の者は徹夜で、修覆に努力して居つたのが氣の毒な位であつた。しかし吾々は思ひ掛けなくもこゝにに長江夜泊を經驗することが出來た。柄にない詩的な愉快な長江星月夜の氣分を味ふことが出來たのである。機械を修覆する方では氣が氣でなく一生懸命である。十八時間目にどうやら目出度く機械が動き始めたと思つたら、翌日復たやつた。蕪湖安慶を過ぎて九江の上流の所まで進んだとき前夜と同じ所が又破損した。今度は長時間經つても一向に恢復が六ケしい、そこで再度の停船までをしたのを見てとつて長江を下つて行つた他の汽船は、我が大貞丸が坐礁して居るのだらうといふ噂さを傳へて下つたものと見える。上海を一日遲れて出帆して漢口へ向つた所の瑞陽丸が夜半二時過に我が船に追つ付いて來た、丁度同じ會社の船である。そこで此瑞陽丸に曳いてもらつて漢口迄上ることになつた。所が漢口に上陸しても中一日置いて出發する考でゐたのであるが、それ迄に十分破損の箇所も修繕されて長江を下ることは出來る積りでゐた、處が破損した其の揖棒齒車を

漢陽の鐵工場へ修繕にやつて居たのが其鐵工場の機械が又破損して了つたために、其機械を修復した後でなければこちらの船の揖も齒車も修復が出來ない。それで出帆はいつの事やら全く分らぬことになつたといふ甚だ悲觀すべき報告があつたので自分は腰を据えて、其儘船中に寢てしまつた、すると夜半に機械が修復されて戻つて來たものらしく、朝になつて動き始めた。夜の九時に出る船が翌朝八時半に漸く漢口の岸壁を離れた。斯樣に色々手違ひを生じた爲めに豫定より下りが大分遲れた、そこで蕪湖迄下つた所が例の揚州の高洲翁から書面が來て居つた。毎日毎日鎭江まで出迎へを出して居るのに一向貴方の姿が見えない。何時も待ちほけて出迎への者が失望してゐる。一體どうして居るのかといふお小言らしい書面であつたので自分は非常に恐縮した。併し自分は正確に時間を守る積りであつたけれども右の次第で何とも致方がない、しかし船の故障のことなんか夢にも知らない高洲老人の腹の中は無理のないことゝ思つた、鎭江に船が着くと泰來館から出迎の者が來てゐて實は先刻の船だと思つて出かけてゐたら、あれは瑞陽で貴殿には見えなかつた、やつと此船で捉まりましたといふ。早速金山寺の下碼頭から渡船に乘つて楊子江を北岸に渡り隋の煬帝の掘へた運河を曳船で引張られて上り揚州へ着くことが出來た。

斯樣な譯で長江夜泊は思ひも依らぬ夜泊であつた。其爲めに揚州へ上る日數は段々と遲れて了つた。久しく思つてゐた揚州がかやうに障りの多いのは何の因果であらうか。

三　揚州公廨

揚州の碼頭に上つて高洲大人からの轎に迎へられて支那式の狹苦しい街、油つ濃い街、臭い街を轎の竿の音に調子を取りつゝ進む。又道往く子供から東洋人〳〵（日本人の意）と目をつけられつゝ高洲翁の邸迄昇がれて行つた、公廨の門前に着くと紅紙に『紫氣東來』筆太々と書かれて居る、さうして正面の客廳の前に高洲老人及び太々連の出迎を辱うした。是に於て年來熱望してゐた揚州に本當に到着することが出來たのである。

揚州公廨は揚州に於ける日本人の唯一の住ひであつて、此公廨の主人公は卽ち高洲太助翁である。既に十年前よりこの地に居を定め、鹽務稽核所の役人をして居られて、傍ら風流の道を研究して居らるゝ文人肌の老爺である。よく日本の人は支那に住居を定める場合に、成るべく日本人の頻繁に去來する所、又日本人相互に便宜のある所を擇ぶと云ふが人情であるに拘はらず高洲先生には成べく左樣な所は避けて、支那純粹の生活を志にし、城內、城外の支那人を向ふに廻して、

自ら支那氣分に漬ひ、さうして支那の人々の心理作用を縱橫に研究しようと云ふゆかしき態度。普通の人ならば退屈し、厭きの來る支那民衆の中に伍して、而かも光風霽月を送つて居らるゝ其態度は洵に敬服の至である。

若し日本の內地或は上海、北京の如き場所に於て支那を考へるときには、兎角に支那の問題が甚だ神經質的に考へらるゝ傾向があるが、此揚州の如きのび〳〵とした、趣の有る所は永く住まつて居れば居るほど純粹の支那氣分になれるものである。

此揚州公廨は單り日本人の住ひと云ふ點で珍らしいと云ふばかりでなく、揚州隨一の外國人の住ひとなつて居るのである、それ故に一たび揚州公廨より轎に乘つて城內の巡遊に出掛けると云ふやうな場合或は、又杖を携へて巷里を見物すると云ふやうなことをする場合には、十人二十人と界隈の大供小供がぞろ〳〵と附纏ひ、買物をしようとすれば、我々が何を買ふかを注意し、財布から金を出す所、又我々が一言一句を話す所、總てを好奇心を以て眺めて居ると云ふ光景で、宛然日本の三十年程前の西洋人に對する路上の光景と同じやうに思はれた。

此揚州公廨にあつては其室並に家具、其他衣食住の狀況は、純粹の支那式である。殊に其裏手

の庭には草結明と云へる漢方の藥草を栽培して居る、この藥草は揚子江沿岸に於ける我々同胞の間に其の利き目を知らない者はない位に、御利益のある腎臓の藥であるが、殊に目の惡い人、或は頭の惡いと云ふやうな人々は、此草結明の煎じ藥を、御茶の代りに飲めば利くと云ふことを聞いて需むるものが多い。爲めに揚子江方面から近來日本内地に向け小包で送らるゝものが少くない。其草結明の本場は此揚州の高洲公廨で栽培せられて居るものである。我々は數年前より高洲大人の藥草栽培と云ふことは有名なものと聞いて居つたが、今回面のあたりに之を見るの光榮を得た譯である。

四　揚州の支那料理

尙ほ揚州公廨に於ては、衣食住の總てのやり方が、支那の田舍共通の方法であるから、支那の田舍の事情を知つてゐるものゝ爲めには特に取上げて云ふべき事柄はないが、併し吾人の頗る興味を以て感じたことは、其食を旨く食べると云ふ目的のために、鷄の肉を丁度カオヤーツ（鴨子）の飼ひ方に於て、北京邊りで獨特の方法を講じて居ると同じやうに、揚州では鷄の去勢法を試みる其方法を見たのである、無論豚にしても、其他食料に用ひらるゝ有名な材料は多く去勢するの

であるが、鷄の去勢法に至つては頗る面白い。殊にそれ〴〵家庭に於て是が行はれるのであつて、面のあたり其去勢の方法をやつて見せて呉れるのであるから支那式に興味がある。實は初めに高洲大人の家族の人々からやつて見せて呉れたのであるが、其時には鷄がバタ〳〵してうまく行かなかつた。あとで專門家の支那老爺が來てやつて見せてくれる。其方法は極めて鮮かに行つた。鷄の翼を二枚うまく背中喰違ひに交叉させて動かぬやうにきめつける。さうして翼の下の二枚目の肋骨に沿うて平行に刀を入れる。稍〻深き所にある粘膜を輕く小腸の外膜に達しない程度に於て巧みにブツツと切解す、さうすると小さい鷄にあつては大凡米粒か又は大豆粒位の白きものが二個見出される。之を去勢用に造られたピンセット様のもので、うまく他の臓腑に傷を附けないやうに注意して挾み且つ引つ掛けて取り出すのである。其時方法さへ輕妙にやれば鷄は良い氣持ではあるまいけれども、何等我事でない如く、平氣な態度でジツトしてをとなしくして居る。少しもバタ〳〵しない。さうして其切り口の所からは一滴の血も出さずに出來るのである。それで其傷痕は其儘にして膏藥も何もつけてやるのではない。さうして前に喰違ひに交叉させてあつた翼を平常の位置に復してやつて、そのまゝ庭に放てば、素知らぬ顏をして其近邊の餌を漁つたり

他の鶏と共に入混つて遊んで居る。支那人の專門家の話に據ると、斯うして置いて四五日もすれば切り口は癒合しますと言つて居つた。斯様にして十羽、二十羽、三十羽、殆ど毎日のやうに此去勢法を行つて居る。さうすると其爲めに其鶏の肉は非常に脂濃くなつて食料肉としてその味ひを増すことは、是は幾百年、幾千年の經驗に依つて十分證明されて居るのである。其去勢した實物を溜めて、それに他の材料を幾分か混ぜて調理する、さうして之を丼に盛つて出すのである。こは昔から若返り法に用ひらるゝものゝうちで頗る旨く又貴い料理として考へられてゐるのであるが、斯様な方法で以て實物を料理に使ひ、又それに依つて肉を非常に旨く食べさせると云ふ、その料理法上に特點のある所を我々は實地に經驗することが出來たのである。

五　揚州の名園何家花園

尙ほ揚州は昔から富貴榮華の極みを出現する所であつて、身の周り、住ひの道具類、其外美的生活を行ふ汎有る方面のことの整つて居た所で、今以て其名殘りはなか〳〵多い。高洲公廨に備付けてある寢臺の如き、其規模の頑丈にして大仕掛であると、其彫刻の沈重にして優美なること、其周圍に垂れて居る緞綢の鮮かなること、又其四本柱の外に更に控への枠があつて、それには机

の造り付けがあるし、それに又種々な彫刻があり、目で眺めても、手で觸つて見ても、試みに横になつて寢ころんで見ても、實に氣持ちがよい。隋の煬帝も斯様な寢臺に身をよこたへたかと思はしむる位に、華やかな又美事なものが設備されてあつた。是は獨り高洲大人が贅澤をして居ると云ふ譯でなくして、揚州には斯様なものが普通にあるのである。揚州城内で有名な遊び場所となつて居つて、又同時によい人の紹介さへあれば、内を隈なく見せて呉れる所の『何家花園(ホウチャホウユワン)』の建築家具の如き正に古への揚州の榮華を聯想せしむるに十分餘りあるものである。其『何家花園』の寢臺の如き、或は卓机の如き、又鏡の如き、腰掛けの如き、其美麗の極を盡して、其質に於て量に於て驚くべきものがある。其他揚州城内には、今日の落ぶれた狀態からすると、大分寶物に出て居るやうではあるが、兎に角家の内部の裝飾又は調度の類に於て、斯の如き工藝美術品的のものがドッサリ設備されて居ると云ふことは、我々揚州に遊ぶものゝ最も愉快とする點である。

六　揚州平山堂

尙ほ揚州は美人の名所と云はるゝ丈けに、水邊に楊の自然の並木が非常に多く、又其楊の綠の隧道の下は、悉く水路になつて居て、これに許多の畫舫が浮んで居る其畫舫の去來して居る水の

流れは、揚州の城内を七重八重に流れた上に、それが城壁の水門を潜つて外に出る。出ると見上げる程の高い城壁の下を漫々たる水が又湛へて居て、其水に映ずる楊の影、又一方に其水鄕の面から直角に突立つ所の城壁の輪廓、其城壁の一端に三日月の薄く現れて居る所、其水鄕をば船頭をして櫓の音靜に漕がせつゝ、畫舫を平山堂の方へと流るゝが如く、停まるが如く、靜に進み行けば、時々右に左に、老爺の金持らしき連中が若き美人を舟に乘せ舷々相摩して、而も胡弓の音、笙の音囂すしく打騷げる所を目前の景色と共に味ひつゝ、更に先へ〳〵と進み行くときは、有名なる五亭橋の所に達する、こゝで舟を停めて、橋上にしばしやすむ。橋はその平面圖を考へると中心に一つ眞四角なものがあつて、其四隅に更に一つ〳〵眞四角の橋が架つて居る、其各〻に亭が建てられて居つて、孰れも四阿で、其軒は鋭く天に向つて反つて居る。其光景は何とも言へぬ雅なものであつて、左方に見える白塔と共に、夕暮の空に極めて鮮かに打眺めらゝのである。

更に五亭橋より奥へ漕いで進むと、平山堂並に觀音堂等の寺がある。孰れも廣大なる寺であつて、天氣の好い時は其見晴しが殊に麗はしく、遙に揚子江を隔てゝ、鎭江の市街まで認めらるゝのである、我々は折あしくも夕立に遇つて、此揚州平山堂の雨景を經驗したのであるが、その爲

め亦何とも言はれぬやさし味を感じた、夕暮の鐘の音を聽きつゝ平山堂を出て、元の水路を漕がせつゝ、城壁を指して歸つて來た。其時兩岸のアーチの中は無數の螢で、其の一つ〳〵が水面に映じて動いてゐる。三日月の空ながらアーチの中は螢の星月夜と云ふ感じがした位に綺麗であつた。

揚州には尙ほ日本人と親し味の深い李盛鐸翁の舊邸がある。これには以前高洲大人が其一部分を借りて居つたと云ふ關係から特に親しみがあるので、自分も訪ねて行つた。是は前の何家花園程でないが、併し堂々たる邸宅であつて、其邸園も驚くべき豪奢を極めたものである。自分は其李盛鐸の邸内に於ける柳の一種の曲柳　これは枝が眞直に伸びないで、螺旋形樣にヒョロ〳〵と曲りながら伸びて行く、一種獨特の楊であつて、其枝を東都の我が庭に數本持歸つたが、今其芽が青〻と出て居る。何れ春は其枝の伸びるのをまちて支那趣味の友達に分ちたい積りで居る。

尙ほ揚州公廨に關聯して一言附加へて置きたいのは、高洲大人は山口縣は日本海側の一孤島肥島（一名斐島）を自身で所有され、これに支那の移住民を許多渡航させて、さうして豚の飼養それから鷄の繁殖、其他支那で普通作られる野菜類の栽培など、支那の農家の仕事をそつくり其盡

此島に移し、開墾の傍ら支那生活の延長地帶を作つて居ると云ふことである。若しも中國方面から此島に數日の靜養を試みやうと云ふ人には、申す迄もなく主人は心から之を歡迎されて居るのである。揚州の方は高洲大人の話に據るとかなり遊歷者がある。一年三百六十五日の中、略ゞ三日に一人平均の割合で來客があるとのことである。そして來る者〳〵皆此揚州の自然の美に憧がれ、鎭江揚州の往復と云ふものは何れも皆仙境に遊んだやうな感じがして居る。是に於て吾人も亦、高洲大人の云はるゝが如く、『腰纏十萬貫』『騎鶴上揚州』と云へる語の意味を泌々と感じさせられたのである。

七　揚州より鎭江への船中胡弓の賑ひ

序に揚州に遊ぶ人の爲めに、道順のことを簡單に申して置く。上海から船或は汽車で西北鎭江まで行くと其處から揚州行の小蒸汽が出る、鎭江には支那人の船問屋もあれば、又日清汽船會社の代理店もある。又近頃日本人の泰來旅館といふのが一軒出來て、始めて行く旅人のためにも大層便利になつた。自分はその泰來館から近いところの鎭江の碼頭から船出して、揚子江を横斷した。金山寺の塔が次第に後ろに低く姿を隱すやうになつて來た時は、既に我船は彼岸に達した頃

である。彼岸に達してから更に隋の煬帝の造つた運河を進むのである。さうして其船が自ら進む場合と、曳船に依つて引張らせる場合とがあるが、要するに夏の水の多い時は、鎭江から揚州の碼頭に着く迄が約五時間計りかゝる。吾人は揚州の城內其物も非常に興味を惹いたが、此鎭江から揚州に渡る船の上の趣味が、又頗る興味をそゝるのである、其船は一、二、三等の區別のあることは云ふ迄もないが、其樓上に許多の乘合客があつて、普通百人二百人と席をみつしり占めて居る。其中に突然一方の隅から胡弓の音が聞える。又反對の方の隅から落語家の話し聲が聞える。胡弓は訴ふるが如く、泣くが如く、餘音嫋々と船の進むに從つて油が乘つて來る。一曲彈じ終ると其一隅の席を立つ、其時に乘合客から金を集める。さうして今度は中央の方へ進んで來て、そこへ割込む。さうして又異つた曲を彈ずる。乘合客は林檎の皮を剝きながら、或は菓子を摘まみながら、茶を飲み乍ら其伶人の彈ずる胡弓を樂しみつゝ聽いて居る。寄席にでも行つたやうで、洵に平民氣分が十分に漂つて居る。所で伶人は樓上で仕事がすむと今度は下の方の部屋に這入つて來る。下の房室は官艙とか何とかで二人とか四人とか、極く少人數しか居ないが併し部屋は大層綺麗に裝り付けてあつて、酩々の腰掛や机もある周圍に聯とか、良い繪畫などが掛つて居る。其

部屋に胡弓を一竿携へた伶人が這入つて來る。さうして又異つた音曲をやつて聽かせて呉れる洵に有難い仕合せであるが、唯餘りに距離が近過ぎるために、折角の味ひが餘り騒々しくして興が醒めるやうな氣がする。

さう云ふやうな催しを味はひつゝ、船は既に運河を大分進んで來た。岸の彼方此方は白塔古塔が見え始め、或は楊の杜の蔭に、或は家蔭にお寺の屋根の一部分が見える。軈て船は揚州の碼頭に着く。其邊り亞米利加人の煙草の廣告、雫鳥或は紅屋と云ふやうな廣告が紅又は綠で、其色も鮮かに、十間、二十間、大きいのは三十間と長い壁を利用して盛に宣傳をやつて居る所迄が見られる。斯樣にして外人の苦心した色彩も認められる。それから此碼頭から城内の狹苦しき町を轎に乘つて約三十分間も右顧左聘しつゝすすむ。例の揚州公廨にまで行く路傍の光景は全く田舍の味がする。

八　鎭江の印象

揚州の街の樣子は大要此の如き狀態である。吾人は何處迄も此揚州が上海の近くに在るに拘はらず、蘇州杭州などとは違つて純粹の古い都の面影を其儘遺して居ることに於て、尠なからず此

街が氣に入つたのである。これは揚子江を一つ隔てゝ居ることのために、汽車からの便利が可なり惡い。又鎭江からの船の便利も餘り好くはない。兎に角純然たる支那式の船に乘らなければならぬ。勝手の分らない者には非常に苦勞が多いのであるから、つい〳〵餘り人々が此揚州を訪ねないのであるが、併し苟も支那街の眞相を見やうとする者は、單に上海の城内とか蘇州とか、鎭江とか云ふ所丈けに止めないで、此揚州の特色を實際に就て見られむことを切望したいのである。殊に一般旅客は兎も角として南畫を研究し、或は支那の風俗文物を調べると云ふやうな、篤志の專門家に向つては、どうしても此揚州を紹介したいのである。同時に揚州公廨の高洲大人の事をも紹介して置きたいのである。

九　鎭江金山寺の山賊芝居

上海の吳淞から六百哩の上流にある漢口迄のその間で、塔の美事なものを數へると、金山寺の塔と、安慶の塔、蕪湖の廢塔ぐらゐである。其中でもわけて輪廓が鮮かで、人口に膾炙して居るのは鎭江の金山寺の塔である。これは上海から南京に向つて進むと汽車が鎭江驛に着いた時には直ちにその右方に當つて眺め上げらるゝものであつて金山寺の丘陵の上に高く聳えて居る。其金

山寺の塔は鎭江の町の北の端にあるのである。之に對して南の端の同じ丘陵の上にある甘露寺の廟と並に其江心にある焦山の寺の、此三者は互に相鼎立せる形で鎭江の名勝を形作つて居るのである。中でも金山寺の塔は最も繪畫的であつて、又歷史的に有名である丈けそれ丈け吾人は懷かし味を感ずる。南方支那で時々芝居をする時に、金山寺と云へる芝居の外題で非常に面白い劇が演ぜられてゐる。其芝居の筋を云つて見ると詰り金山寺は非常な大寺であつて、僧侶の數も何千と居る。今日ではそれ程は居ないけれども、古その勢力の盛であつた時の金山寺と云つたらそれは大したものである。それ丈けに其寺を狙つて居た所の山賊泥棒が亦大勢あつた。けれどもそれに對して又更に上手の偉い和尙さんが其寺を預つて居た。それでその山賊と和尙との問答を主題にした芝居であるが、頗る面白く出來て居る。其山賊には許多の從者が現はれる。其從者の中で目立つてゐる者は白蛇の如き蟲けらが盛裝して出て來る。或は口の尖つた大きな魚、或は目の圓い魚、種々の姿をした肴が續々と出て來る。或は白蛤などが大きな貝の姿をして山賊に扈從して現はれて來る。さうして山賊が其金山寺の寺廟に對して種々な難題を掛けて之を乘取つて仕舞はふとするのである。其處に和尙が現はれて來る。我こそはと云つた調子で以て山賊をやり込める

終ひに其和尙の德の高いこと、人格の偉いことのために、山賊が遂に和尙のために取つちめられて、閉口するといふ仕組であるが、其時の白蛇の現はれ方、蛤や魚の出る場面と云ふものは實に綺麗な色彩を用ひて、さうして如何にも山賊と調和した姿に出來てゐる所、洵に其邊は到底水族館などで見る小規模のものとは違つて、頗る大きく又何から何まで支那式に面白く仕組まれて居るのである。此芝居の筋は詰り金山寺の和尙さんが非常な偉い人でなくてはやれないと云ふことを物語つて居るのである。兎に角金山寺は此中部支那に於て頗る鳴つて居る寺である。この金山寺の塔下に二三の碼頭がある。何れも在來のジャンク波止場であつて、支那船が許多着けてある此處は揚子江の上流、洞庭湖方面より流して來る所の大きな筏などが、上海方面に其材木を輸送する爲めに、大抵此鎭江碼頭で筏を解くのである。されば金山寺塔下の入江には非常な量の貯木所があつて此處から更に上海の吳淞方面に之が運ばれるにはジャンク船に積み直して行くのである。その樣子を見ると二船に巧にその木材をば左船と右船に長く廣く翼のやうに突き出し殆どその水面に接するばかりに其翼を張つて居るのである。さうして其上に巧みに左右の重さを同じやうに平均させて、適度の水流と風力とに依つて之を輸送して居る狀態を見るのである。兎に角此

鎭江の碼頭附近に於けるジャンク船の盛大なることは、長江筋でも珍らしく眺めらるゝのである。これ等のジャンク船の船頭などの仲間話しを小耳に狹んで見ると、中々奇拔な面白い話がある其中の一節を今爰に紹介して見よう。おれの婿は百五十弗で買つたのであつたが、此頃それを二百五十弗で引受ける。賣つて吳れないかと云はれるので、よい話だから思ひ切つて賣つちまつた」と云ふ話をして居つた。此話はたゞ突然にこれ丈けのことを言ふと、讀者には變に取られるかも知れないが、一體支那では學校の先生とか、或は中位の役人とかの細君であると、六百弗から七百弗位出して買ふのが通り相場になつて居る。船頭として百五十弗の家内と云ふ程のはよほど奮發した話である。其顏や、器量はどうであつたか知らぬが、之を又二百五十弗で買手の付いたと云ふことは、船頭としてはそれが如何に惜しくても手放さゞるを得ぬ譯である。此鎭江の船頭の生活狀態に付て日淸汽船代理店の高須氏の話に依ると、大抵一ヶ月の給料は昨今四弗（一弗が日本の一圓十七錢）日給の連中が二十三文、一文と一弗との關係は百文で一弗になるのでなくして、百八十文で始めて一弗になる。それで船頭は多く西貢米を食べて居るのであるが、一升が九文だと云つて居る。それでも近來物價が騰貴して來た爲めに、賃錢の値上をして吳れと云ふ要求があ

る。昨年九月からは同盟罷工の結果、資本主の方で二割上げてやることに極つたとのことである是は支那の招商局側の方の話だと云ふことで、我々に話して吳れて居つた。其程度の連中であるから之を今の船頭が以前に百五十弗で買つた家内を二百五十弗で他に賣ると云ふとと思ひ比べて頗る興味のあることゝ思ふのである。前にも云つた通り金山寺は今でも大變な勢力のある盛んな寺で、我々が金山寺に參詣した時も、何百の僧侶が堂内から繰出されてゐた。その間、自分共は其堂内の禮拜が出來なくて、扉のそとに暫く立つて待たされた。さうして幾百の僧侶が堂から出て仕舞つたあとで、堂内の一面に圓き座布團の列べられてある處に直ぐ這入つて見た。所が、その座布團は直徑二尺ばかりですべて藁で作られてゐるのが無數に列べられて居つた。僧侶は此の座布團の上に跪いて一同御經を上げて居つたのである。

これ程の盛大な金山寺のある鎭江の町の船着き場でその民船のゐる所に行つて見ると斯々だ。船頭の自分の最愛の妻の賣買の話が持ちあがつてゐて百五十弗で買つた婿が此の頃二百五十弗で買手がついたから手放したなどと偉い儲け話が出てゐると云ふこの光景は、爰が支那の支那たる所以であつて、斯う來なくてはならぬのである。一面に如何に金山寺と云ふ感化力の强い力があ

ろにしても、そのやうなことに關係なくして子供の賣買とか家内の賣買とか又賭博、其の他汎有る支那式の風俗の裏面をさらけ出して居る、是が支那の田舍の實景を語る所の材料であつて、吾人はその支那旅行に際して常に田舍に興味を持つと云ふことは、斯の如き捨て難き材料があり日本の智識階級の人々には特に知つて居て貰ひたい材料が無數にあるのである。是等を一々目のあたり見ると云ふことから限りない興味を唆られるのである。

九　支那家庭の飲食物

支那の風俗のことを述べるときには之に關聯して飲食物のことを話さなくてはならぬ。御菓子(點心)のことや果物のことも必要であるが飲料品のことを先づ述べたい。それからあとで食料品のことや食事するときの樣子など支那の家庭で見たこと經驗したことなどを述べることゝする。

支那には飲料品としては日本にあるやうなものは大抵ある。茶もあれば酒も色々ある。此の頃はラムネ、サイダーもある。夏は氷の季節であるが支那の人々は冷却したものはたべたがらない

習慣がある爲め、氷やアイスクリームは繁昌しない。租界地は別であるが支那城内などでは氷は喜ばれない。

一　氷よりもラムネ・サイダーを用ひる

ハイカラの連中は都會地の租界などでアイスクリームの匙を採つてゐるのを見るが一般に氷類は好まない。それよりもラムネ、サイダーの類が大分行はれてゐる。これは酒の飲めない連中は宴會に酒の代用としてやることは日本の習慣と同樣である。ラムネ、サイダーは之をチイシユイと云ふ。氣水と書くのである。この壜の蓋を取ると直ちに氣が沸騰して、口外に湧き出でようとする。その狀態は全く氣水と云ふ言葉が最もよく云ひ現はしてゐる。酒の乾盃などするとき酒の飲めない人々は此のチィシュイを以て乾盃することがある位によくラムネ類は利用されてゐる。但しこれは都會だけの話である。田舍に行けば勿論かゝる便利なものは行き亘つてゐないのである。その代りに田舍では夏の清凉劑に西瓜を用ひる。紅い西瓜もあれば黃色い西瓜もある。味は變らない。黃色の方が支那らしく面白い。いかにも甘くて水が多い。此の方が支那では安全である。又衞生的である。又地方によつて西瓜のないところはマクワ瓜を用ひる。朝鮮でも田舍に這

入るとマクワを用ひるが支那も同様である。しかし何と云つても支那の一般を通じて渇を醫するものはと云へばお茶の右に出るものはない。支那の人々はあらゆる階級を通じてお茶を好む。何かと云へばすぐお茶を出す。夏の季節は殊にお茶を飲まなくては夏は凌げないのである。

二　茶館の光景

夏は支那を旅行すると一日に田舍ではお茶の二升三升を飲む。又飲まずにゐられない。汗にして出すのであるから何升飲んでも障らない。支那茶は普通粗末な綠茶を用ひてゐる。之を製造するとき豚の油で煎じるのであるからして少しく油が浮く。茶碗に葉茶を入れておいて之に熱湯を注ぐのであるがそのとき少しく油が浮いて見える。普通蓋のある茶碗を用ひるのであるが、その葉茶に熱湯が注がれると少時之をおいておく。するとよく色が出る。そして人に出すときは眞鍮などの茶托の上に載せて出す。飲むときは熱湯の爲め茶碗があつくて手に持たれない位であるから茶托と共に左手でとり右手で蓋を少しくズラせ蓋の間から啜るやうにして飲む。隨分あついからよく注意しなくては唇をやくことがある。客などに出す茶には芳ばしく香のする乾花を入れることがある。メクキホワ卽ち玫瑰花であるとか木蘭花とか梔（クチナシ）の花などを入れる。臺

灣では之を包種茶と云ふが多く外國輸出に向けられてゐる。支那ではこの香氣を最もよく賞美するのである。尙支那には漢口方面に作るところの煉瓦式の塼茶又は餅の如く作られた團茶なるものがあり又福建方面で作られたところの烏龍茶（ウーロンチヤ）がある。只今臺灣でこれは盛に作られてゐるので日本には最もよく知られてゐる。

支那では茶を賞美することは日本以上である。眞に茶を好むのである。日本のは茶道が開けて形式的に流れ茶の賞美そのことは二の次となり他の餘計のことがその精神、主題となるやうな形になつた。しかし支那では民族的に茶をのむことを好むそれ故支那各地方を通じて『茶館』なるものが到るところに發達し之が最も平民的に民衆的に榮えるやうになつた。實によろしいことである。茶館は一種の營業で廣い大きな風すきのよい會館にあまたの方形の卓を列べ腰掛を各卓の四方に列べてあるのが普通の茶館の設備である。上海あたりの立派なものになると四方の壁に見事な大きな鏡面が作り付けにして嵌め込んである。午前中から千客萬來で、卓上には客が來たつて坐を占めさへすればそこに茶碗が列べられ之に葉茶を摘みて入れ之に土瓶を持つて來て熱湯を注入する。その湯がさめたと思ふ頃になると遠慮なしにその冷たい茶を客の眼の前でお構ひなく

土瓶の中に注入してその混ぜ合はした湯を再び茶碗に注入して呉れるのである。然し氣の利いた茶館であると茶こぼしが卓脚の下にあつてそれにあけて了つて改めて熱湯を注入することもある。

三　支那には路傍に茶の接待がある

支那は北部はとりわけ空氣が乾燥してゐるしそれに水も惡い。それと本來お茶の好きな關係から支那の人々は非常によくお茶を飲むのである。それ故社會的にそれが現はれて田舍の小徑にでも又都會の街頭にでも壺とか桶とかを裝置して之に熱い茶が一パイ容れられてゐる。誰れにでも勝手に路行く人に施してあるので至極便利である。時としては又据風呂式になつて湯沸かしの裝置をしたものを車で運んで湯を大道へ賣りあるいてゐるものがある。北京でも上海でも、湯を賣りに來る開水賣りを見るがこれは日本では見ない風俗である。誠に重寶である。一々茶を喫する度毎に湯をわかす面倒がなくてよろしい。かやうに大道に茶が出してあるとか湯が入用のときは隨時買ひ求めらるゝと云ふことは日本の現代の如き簡易生活を尊ぶ家庭には一寸面白く感ぜらるゝであらう。

四　支那では酒が斤數で賣買される

支那の賣買は容積で計算されるものは信用が出來ぬ。カケメで行くのが普通である。酒もその一である。一升いくらと云ふことに慣れてゐる日本人には一寸わかりにくい。小甕に入れられた支那酒も五斤入とか二十斤入とか云つてゐる。しかし飲食店などで食事をする時は一般に錫で製せられた器具に入れて燗をして持つて來るものを見るのであるから矢張り大體分量がきめられてあるものらしい。支那本部の方のはその容器も大きいが滿洲奉天撫順のあたりになるとよほど小さい錫製の物で燗をしてもつて來るやうである。

支那の酒には色々ある。一番ひろく知られてゐるのはシヤオシンチウ即ち紹興酒でモチゴメを原料としてかもしたものである。アルコホル分が少なくない社會の中流以上の人々に用ひられてゐる。その次はモチアハ（糯粟）で作つた黃色の酒でラオチウ即ち老酒と云ふビールの格である。支那ではモチアハのことを黃米（ホワンミ）と云ひ之を褐色に焦がして釀すから自然その色が黃色になる。家に娘の子が生れると同時に之をかもしてその嫁入りの時まで保存しておく。あたかも日本で桐の木を植えておいて嫁入りの箪笥に作ると云ふのと同じことである。それ故隨分年數長くお

いておく。十四五年もおく。普通でも七八年位たつてゐるのを用ひる。それ故老酒と云ふ。新酒の間は酸バィが年數がたつと苦味が加はる、紹興酒が浙江省の紹興縣で出來るのを本場とするが老酒の方は山東省の青州が名產地と云はれてゐる。それ故美酒のことを青州とも云ふ。この外に高粱で作るカォリヤンチヴ（高粱酒）と云ふがある。別名を燒酒と云つてゐる。大麥や蕎麥や小豆などで作つた麴で醱酵させるのであるから一種特別の臭がするのが特色である。普通に山萩や柳の細枝で茶壺の形に編んだ籠に入れて運搬するのである。籠の內面には豚の血に石灰を混じて百回も二百回も塗り上げてあるから頗る手丈夫なものである。物に當つても壞れることがない。支那酒は大體以上の如きものであるが支那の人々はこれらの酒に對してその嗜好が甚だ強い又中々よく飲む。概して酒量は大である。しかし酒の爲めにへベレケになつて千鳥足の醉態を演じたり醉ひにごまかして不體裁を大道にさらけ出すと云ふやうなことは殆んどないのである。

六　支那の菓子類

支那の茶と酒の話は大體了へた。飲料品の方がこれで濟んだ譯である。次に食べ物の話に移らう。

支那では食事は普通一日に二回である。午前十時頃と午後の五時頃とである家庭によつてはその二度の間に間食を出すのである。間食は點心と稱して饅頭（マンドウ）であるとか、麵であるとか、その他一般に乾果と稱するものを出すのである。マントウはその豚肉の細かくきざんだものに葱などの交へたものを入れたのがあり又砂糖餡の入つたものがあり又肉も糖も何も入れてない、全く一種のパンの如きものもある。支那で田舍を旅行するとき二錢計り買ふと一人で食べきれない位たくさんある。鹽分があまり入れられてゐないから日本のパンをむしりながら食べるに比べると餘程たべにくい。麵は蕎麥や素麵や餛飩や何でもそのやうなものの總稱で、汁のだしには生姜や葱の刻んだものを鍋に入れ油で炒り少量の鹽を入れて味をつけたものであるが簡單で頗る味のよいものである。乾果は點心の主體と考へられてゐるが、落花生や胡桃や蓮實や又は西瓜冬瓜の種子でそれを鹽で炒つたもの或は砂糖漬けとしたものなどがそれである。支那の食事に聯關して出される菓子類で尙此の外自分共に親しみのあるのは龍眼肉、荔枝（南方）それから栗子卽ち燒栗子日本で云ふ甘栗などである。

六　支那食の調理法の種類

支那の食事はその茶とか酒とか菓子のことを述べた丈では本當の味はまだ判らない。一般に支那の食事は誰れ人も云ふ通り濃厚だと相場がきまつてゐる。しかしその副食物はその調理法の關係からと料理の材料からとで濃厚に味はれる。ところが支那の米飯は都合のよろしい事に所謂支那米でサラサラしてゐて支那料理のあとには全く有りがたい。そのたきかたは米を煮たぎれる湯の中に入れそのよく煮たてられたる時を待つて直ちにすくひあげるのである。從つて粘り氣が少なくて淡白な味がする。かやうなアッサリした飯である。或は又この飯でないときはシーファンと云つて稀飯と書く所謂お粥を用ひる。これ亦濃厚な菜のあとの喉を洗ひ流すやうな氣持ちがしてよろしい。何れにしても料理の方が主であつて飯や粥はあとの附錄見たやうなものである。

支那食の調理には下等なものになると生まの葱に味噌をつけたもの又野菜を豆の油で炒つたもの位で之を高粱飯たうもろこし飯、又はたうもろこしの粉の團子に作つて食べてゐるのである。これで大きな茶腕に八杯も十杯も平げてそれで一食四五錢ぐらゐであがるのである。所謂「馬食」の程度といくらも相去るところはないのである。

支那調理法は中流以上のところになると料理の種類も色々あるが大抵左の通りである。

一、（炸チヤイ）——油で揚げてテンプラ式に作つたものを云ふ。
二、炒（シヤ）——油で煎つたものを云ふ。
三、蒸（チエン）——蒸しものに作りたるものを云ふ。
四、煮（チユー）——先づ水煮きにしてあとで醬油で味を付けたもの。
五、燉（タン）——又煮（アオ）——肉類を十分たゞれる位まで沸煮して之に野菜などを加へたるものを云ふ。
六、燴（ホイ）——一旦煮たるものにかるく葛をかけたるものを云ふ。
七、溜（リウ）——一旦油で煎つたりして葛をその上にかけるもの。

而してこのうち蒸したるものと水だきにして醬油を加へて味を出したもの及び肉をたゞらせて之に野菜を加へたものなど十分に汁氣を多くして之をタン（湯）と稱して客にすゝめる。これらの調理を通じて考へると支那では普通料理は熱くなくてはいかぬことになつてゐる。そして之に十分の火力を用ひた料理は之を『熟菜』と云ふのである。之に反して火を用ひない方の料理、鹽や醬油で味を付けてゐるもの之を『鹹菜』とか『冷菜』とか云つてゐるのである。

支那人は火を通さないものは食べないと云ふが此の冷菜と云ふのは火で煮たものでない。併しそれは鹽漬けにしたものとか醤油漬けにしたものであるから決して生まのまゝを食べると云ふ譯のものではないのである。

七　支那料理の食べ方

支那料理は珍らしくて、おいしくてそしてお値段も存外にお安い。種類も多く材料もよろしい。それ故この料理に向ふと慣れない人々は、その料理の事に通じない爲め始めに出される料理を待つてゐましたと云つた調子に無暗みに手を出す。或は顎を突き出して熱心に勉強する。最初から卓上に出してある料理殊に冷菜は本當の料理の運ばれるやうになつてから時々アイノテに食べるもので最初から忙しく箸を出すものでないのである。肝腎な本當の甘い料理の出る前に、大分片付けて了ふものがある。これはいけない。支那料理のたべかたは始めは少しく箸をつける。一品宛出る毎に主人より請はるゝまゝに請々「チンチン」と云はれたら僅かばかりとるのが本式である。そして可なり料理の數が出るとそのうちに、甘いものが出る。甘いと云つても別段砂糖を入れてゐる譯ではないが、蜂蜜などで甘たるく出來てゐるのである。例へばパーパオファン八寶飯

と云つたやうなもの。これは糯米を土臺にしてうまく且つ藝術的に出來たものであるがこれは八名でも十名でもその圓卓を取圍んでゐる主客が四方八方から匙に力を入れて掘き取るのである。そして之を杏仁湯などの中に入れて食べる。その杏仁湯そのものがまた甚だ甘く出來てゐる。この八寶飯は一例であるが此のやうな甘いものが卓上に運ばれて來るときはその料理に一段の區切りがつくときである。この邊の見當がつくやうになるには相當に經驗を積まなければならぬが、この甘いもの丶出て來る迄に腹が出來ればよろしいのである。慣れないものは最初に餘りに頻々と箸が出るものだから肝腎のうまいものが出る時には箸を出す勇氣も出なくなつて了ふのである。その他ホンシャオウィ（紅燒魚）或はホンシャオリイ（紅燒鯉）などと云ふ大きな肴の料理が出る紅生姜や酎や色々八味の調理で出來てゐる結構なものでその大皿は主賓の方にその鯉の頭が向けられておかれるのである。その譯は鯉の頭の方が肉の味の一番よろしいと云ふとで主賓に敬意を表したことになつてゐるのである。此のホンシャオリイ(紅燒鯉)の出される頃は大抵の人々はそれ迄に滿腹になつて了ふ。愈大事な瀬戸際と云ふところで折角の料理に最早や手も足も出なくなると云ふことになる。この鯉の料理は香ばしくて食べやすい。如何にもよいものである。

が少し上等の方の料理でないと出されないのである。料理でさへあれば之がいつでも出されると云ふものではないのである。

八寶飯とか紅燒鯉とかの出る頃までに滿腹になればよいのである。その頃に大抵酒の方も陶然と醉がまはる。ホロ醉ひ加減で丁度よい氣持ちになる。誠によいものである。讀者諸君は最非一度こんな文章ばかりでなく目のお正月口のお正月をしてもらひたい。何なら一緒にお供して北京なり上海なりの本當の料理を差上げることに致したい。東京のでよかつたら譯はないが併し東京の支那料理は本事になつてゐない。料理の氣分に於て滿足が出來ない設備が物足りない。室の入口に聯が掲げてゐない。料理を運ぶ人たちが支那ボーイでない。とにかく物足りない。本當の料理氣分のするのは支那の本場に行つて、そしてその料理に就いて實地の御話をしたいのである。

十　支那の家庭生活に於ける情味

一　家族制度よりも家庭の實際を

支那はその歴史的に祖先の祀りをするものを絶えさないやうにすることの爲めに家族制度の條理整然たるものがあり三代以來時勢の推移によつて幾分の變遷を經てゐるがその成文律の上には八釜しいものが認められる。然し條文の形式上に完備せることを誇ると同時にその條文を一種の空文扱ひしてその實際上に於いて最も要領を得た方法を取ることは支那のやうに巧みなものはない。之は論語を楯に實踐道德の美を翳してゐながらその裏をのみ實行して要領を得てゐると同じわけである。

支那の役人のする事は計數の上には立派に見せてゐてもその實際の調査と來たらどの位迄信用がおけるか判らぬ。一家族の戸主及眷族の調べなどもいゝ加減のもので十分の取調が行はれてゐない。一家族のことが判つてゐない位であるから一都市の本當の人口も判らぬ。出產死亡の屆なども怪しいものである。幼兒の取り浚はれて行くもの、拾らつて來るものなどその意外に多きは支那の實情を見てゐるものゝ齊しく知つてゐる點である。日本では飢饉不作のときにのみ子供の賣買が行はれるやうに想像されてゐるが支那の都鄙何れの地に於いても之は不斷あたり前の現象

として見られるのである。界隈近處のものも敢てそれを問題にしない位に、已に免疫性になつてゐるのである。知らない子供が又一人向ひのうちに殖えてゐるなど極めてかるく噂してゐるのを上海の租界で聞いたこともある。上海や天津の如き最も開けたところでそれである。北支那諸地方には相應に多く見られるやうである。

又家族内に於いて最も重要な遺産相續のことなども新しく規定された法律どほりには事實決して行はれてゐない。長男に繼承させると云ふのは殆んど空文であつて從來通り原則として多くの子供に分かたれることになつてゐる。而かもこの間に爭が起り訴訟事件の過半はこの遺産問題のことでもちきりである、時には又未亡人なる母が財産を擁してゐて丁年に達せる子に對して未だ財産相續の力なしと宣し母子の間に財産讓與の事につき裁判沙汰の多きは吾人の尤も異とするところである。が支那ではこれは最も普通の事でしかも個人々々に最も重大な問題となつてゐるのである。要するに支那ではまだ戸籍法の一つも行はれてゐると云ふ譯でないのであるから一家族の法律的の調べも出來ずにゐる、これでは徵兵令なども布けるわけの者でないから宜しいようなものであるが事實甚だ漠としたものである。これはつまり國家の觀念に向つて進まんとする氣分

が少しもないのに歸因するのである。

二　親子兄弟の間柄

父子兄弟姉妹と云つたやうな骨肉の關係を規定した德目は美しい支那の倫理道德はこの點に大いに周到なる注意が拂はれてゐる。しかし古き歷史に遡つて見ても明白である通り家族内にあまりに個人主義が濃厚になり過ぎて第一にそれ〴〵房室を別にする住宅の建築が從つて間しきりの多いやうに構成せられてゐる。親は親、兄は兄、自分は自分と劃然區別がついてゐる。これは自分を衞る爲めにはよいやうであるが、しかし此の思想は恐ろしいもので遂に家族の中が他人の集合と云つたやうな觀を呈して來る中には第三夫人とか第八夫人とか又二十人三十人と同じ父親に對して多くの母親（側室）を考へなければならぬやうになつてゐるものがある。一つの家庭の中が水臭くなり始めるのも色々事情の伏在してゐる爲めである。人は云ふ、夫人がいかに多くともその間に不和の起らないのが不思議であると。固より第一夫人は經濟を第二夫人は交際を第三夫人は家の子郎黨を第四夫人は教育をとそれ〴〵分擔がきめられてあるとは云へ、その間又大なる御家騷動が起り時には庖丁を手にして大路を裸足のまゝ驅け走つてゐる光景や時には又泥のつい

た大の等を翳して關帝廟の横路でたけり叫んでゐる狀況を目擊したことさへある。決して家庭が安定してゐるものとは思へない。

儒教の上には五倫の道を說き家庭は之をモットウとして進み聖賢の國だけあつて支那は人情に厚く家庭の情味は云々と云ふやうに考へるものがあるならば、之は文章書物の上を信じ過ぎた誤見である。實狀が實狀だけにその體面を持する點から云つてもよほど書物の上には美しいことを書き列ねておかなくてはならぬわけである。しかし今の支那の實際から見ると四書五經にあまり立派な文字のある爲めに之れを看板にし、その看板にかくれて道に反したことを盛に行つてゐるやうにも見られる。

三　婚禮と葬儀

中流社會は支那には殆んど存在しないと云つてもよい位であるが、その下等社會に於いては(尤も下の下の社會は別に又その下にあるとして)その銘々家內を娶るには自分で稼ぎかせいで、そのかねで買ふのであるから無論自分の勝手なものを買ふことが出來るが中流より以上のものになると全然その息子の知らない否知らないと云ふよりは息子に少しも圖らず親の方で極秘できめて

了ふのである。無理にでも押しつけるのである。それ故時々婚禮の當日人違ひで双方でビックリする話がある。それからおまけに町家などでは花嫁を一室に入れて而かも衆人に曝らしてサンザン惡口憎言をさせ、その試驗に平氣で合格したものでなくては家內にせぬと云つたやうな非道い修養を强ひられるやうなところもある。これは北支那に見る風習である。ともかくかなり情味のないやりかたがたとひ風習であるとは云へ隨分認められるのである。

又葬式のときのことにしても誰れ人も知れる如く葬式の行列のとき又は家で棺を護るとき日時を定めて泣き婆々の棺にすがりて泣き叫ぶ習慣の如きそのたとひ嘘泣きにせよ皆が皆言葉に節をつけて合奏の如き姿で調子よく泣いてゐる。相當に涙をたゝへて泣いてゐるのであるからマンザラでもないが吾人から之を見ると怪しく感ぜられる。これは恰かも花環や生花を手向けるのと同じやうに形式になつたものであらう。たゞそれが花輪であると人間であるとの區別がある丈で實は同じやうなものと見られる。

四　家庭教育に於ける師匠

どうせ教育は形式的のものと子弟の方で相場をきめてゐるのが一般であるが、子弟自身子供心

に己にその要領を得てゐる。從つてその家庭がよければよい程家庭教師などを雇人視する。父兄の方でもその考でゐることは云はずもがな。子供でもその氣になつて了ひ、すべて無理我がまゝ云ひなり放題になるものと思ひ込んでゐる。從つて侮つてゐることも甚だしい。教師自身もやゝもすると卑屈になる。その時は益侮られるのである。支那では家庭教師は百害ありて一益なしであると云ふも至言であらうと思ふ。教師自身が人格者で且つその態度のよろしきと又その風貌の宜敷きと且つ又その教師そのものに父兄よりの尊信の念の厚いことこの邊が十分に備はつてゐなくては甚だむづかしいのである。殊にもし教師の待遇などの內容が子弟に知れるときは子弟自分たちの一ヶ月の小遣錢と比べ多くないことなどもありがちのことである。萬事物質的本位の家庭に教育を目的として入り込むことは甚だ面白くないことであるがいかに師匠に對してその情味のなさすぎることが知られるのである。こは家庭そのものゝ話とはやゝ異なれるも大事なることに就て一言付け加へておく次第である。

五　子の情

何れの國、何れの社會にありてもそのよくない方面のことを云へば數限りなく例證せられるも

のであるが支那には形式や面子（メンヅ）のことをやかましく云ふ丈それ丈內容として缺點が多いやうに思はれる。しかし支那ではその國柄としてその缺點の如く見えてゐる事柄が必しも缺點でなく自然の方法、自然の現象であるのである、見やうによつては長所と云ふべきであるかも知れぬ。國柄が國柄だけに銘々家庭に於いても自己の生存の大本をはたせなくてはならぬ。親や兄弟のことなどよりも先づ自分で立つと云ふ考が著しく發達してゐるのである。或る程度までは共存共榮享樂の精神で進行することもよく見られるけれどもその根本を見るときは尤も極點なる個人主義である。而かもそれが射利的で又僥倖を當てにするやうなところがある。親からも之を奬勵してゐるところがある。例へば道路などでよく見る例としては、親が毎朝子供に食事をさせる爲めに路次などに食事時にやる。抽籤で子供はたくさん御馳走にありつくこともあるが籤がわるければカラクジで食事にありつけないこともある。一錢か二錢で足るほど食つて來いと母は子供に射利的賭博のやうなことを敎へてゐるのである。又家庭內で見られることゝしてはマーチヤウ（麻雀）と稱する賭博である。錢を賭けて圓卓の周圍にあつまり一家團欒大いに此のマーチヤウに餘念がない。これでどうして子供の心が親に對して又兄弟に對してよい情味を起すやうにならう

か。吾人は支那の家庭がかくの如き情態から一日も早く改善されんことを望むや切であるが然し今日のところ四千年の歴史のある此の家庭の習慣は容易に取り去ることはむづかしい否絶望と云つた方がよろしくないかと思はれる。甚だ見くびつた見かたであるが支那家庭の改善は自分共はあまりに支那の社會支那の家庭、支那の個人々々の心の底を知り過ぎてゐるためかどうしても有望には思はれない。それ故國家としては亡んでゐるし家庭にしてもよほど手のつけやうがなくなつてゐるのではないか。唯しかし個人として偉い。世界に支那の人々ほど個人として人間學を卒業せるものはない。個人として外交、交際、辭令、理財、生存欲、實に慢秀なるものである。個人、自已に對する注意の周到なること目先きのよくきくこと利害に、敏感にしてその通り自已の爲めに立ち廻ることなどに就いては世界一であらうと斷ぜられる。その代りに家庭とか國家とか云ふこの方面は顧みてゐる暇がないと云ふことになる。これは歴史の罪、社會の罪又國家の罪であつたと思ふ。思つてこゝに至ると支那の人々位同情せねばならぬ民人はあるまい。吾人はどこ迄も同情すべきを知ると同時に、又その反面にこゝに指摘したやうな半面の特色を承知してゐるべきものと云ふことを痛切に感ずるのである。

十一　波上生活に親しめる支那の人々

一　波上生活の親しみ

支那民族は冬の季節は固より夏季でもいつも身體を水中に入れることを好まない。支那の人々は水泳場などを特設するやうな氣分にはなれないものらしい。山東青島には立派な水泳場がある。併しこれはもと獨逸人の創めたものである。有名な江西省廬山の牯嶺にも水泳場がいくらもある。然し悉くそれは西洋人の造つたものである。冷水に對して親しみを持つと云ふことは支那の人々には望まれない。唯之を眺め賞する丈ならば西湖の水洞庭の水、秦淮の水を始めとし、北京玉泉山の所謂『天下第一泉』や廬山慈航寺の『天下第五泉』や西湖『觀魚』の泉などその清澄透徹、誠に水晶の如き觀を呈せる水にしてその文學的材料となつてゐるものは實に多い。けれどもその冷水に身を浸し冷水を浴し、又冷水にて洗欲するなどいふ事は殆んどない。これは特に冷水好きな日本民族から見ると全く不思議な位である。されば盛夏の候日本人なら冷たい水に浸した

手拭で顔を拭ふ時に支那の人々は熱く蒸した手拭を用ひると云ふ位である。要するに支那では冷水は眞平であるとされてゐる。

昔し湖南で屈原が汨羅の水に投じた故事や今日でも長江、黄河の岸邊乃至は直隷白河あたりの水汀に兒童の群が裸體のまゝで水遊びをしたり汚水を潜つたりなどしてゐる狀態を見るときは上述の事實に反した現象を知るのである。又農家の牧童などの泥水中に泳ぎはしやげる光景を見ることは屢ある。かやうな例外はある、が大體に於いて冷い水に親しみを有してゐないのは一般の風習である。これは全く日本と反對の現象である。

然るに支那民族は水上の生活と云ふことになると平氣なもので、極端な親しみを有してゐる。水上を陸上と同じ位に考へてゐる。水上だから特に恐ろしい、こわいと云ふやうな氣持ちはしないらしい。水上と云ふうちにも支那では、

一　湖上――洞庭湖、鄱陽湖、太湖　二　江上、――揚子江、淮水、白河

三　洋上――印度洋、太平洋　四　近海、――沿岸方面

など色々の方面があるが何れの方面にもその水上の生活に十分にはまり込んでやつてゐる。それ

ぞれその水上に在つて波間波間に搖られて萬頃の渺然たるを眺めることそのことが人生なるが如く、その波上を以つて銘々の天地としてゐる觀がある。波の上だからと云つて周章狼狽の體もない、陸上も波上も支那の社會狀態では何れが安全か判らぬ。陸上は馬賊土匪が來襲して生活を絶えず脅すのであるから實際は陸上の方が危險率は多い譯である。さらばと云つて湖上、江上、海上、是れ亦海賊式のものがゐて節季のやうな書き入れ時になると猛威を逞しうする。天災的に暴風雨の慘を見るのも海賊の犧牲となるのも同じやうなものである。警察權のあれどもなきが如き支那では陸でも海でも同じことである。萬事運命であるとあきらめざるを得ない支那では、屋上も水上も同じ工合に考へられてゐるのは無理のないことで且つ同情すべきものである。このやうな譯であるから支那では水上の生活を特に陸上から離して別に恐ろしい、こわい生活だとは考へない事情が了解されることゝ思ふ。

波上のチャイニーズが平氣で水上に一大發展をなし波上で萬難を排してさも陸上にゐると同じやうな氣持でゐられると云ふことはかれらがそこに歴史的に又地理的に爭はれない修養と經驗を積んだ結果であらうと思はれる。

二　波上生活は日本よりも支那が上位にある

本來を云ふと日本の方が海國ではあり海國氣風が盛んでなくてはならぬ筈である。又波上生活とか海外發展とかゞ盛んにならなくてはならぬ譯である。日本人の冷水を好み冷水に身を浸すやうなことが趣味に合ふと云ふことは日本國民性から來てゐることでその潔癖性が自然と之を好むやうな工合に導いて來たものと思はれる。それと波上生活の親しみとは別である。海國とか海國男子とか色々に云ふが昔から日本には海の文學がなく海の親しみを歌へる歌もなく著述もなく國民性のうちにその親しみも何もない。山田長政の暹羅行や、八幡船の話、支倉の羅馬行の談など歴史上に見えてゐるが民族的の共鳴ある談柄とはなつてゐない。海の文學なく海の親しみのない日本海國の過去は今日から見ると誠に口惜しい歴史である。徳川の禁制のことは後のことであるけれどもそれ以前古き昔より之が國民的の力となり誇りとなつてゐるやうな事實は傳はつてゐない。阿部仲麿や空海の入唐の談はあつても航海中の談柄として國民的の興味を唆つてゐるやうなものは一つも傳はつてゐない。要するに過去の日本には波上生活の親しみはなかつた、特に文學的にそれのなかつたことは最も歴史上に遺憾とする所であると云ひたいのである。

波上生活に親しみのなかつた日本民族の文學には折角の海の光景を描寫すべき好個の場合例へば後醍醐天皇の隱岐の島へ遷らるゝときの海の現はしかたにしても日本獨特の描寫を工夫せずいつも乍らの支那文學の寫しである。模倣である。理想を支那に求めて何事も支那を手本としてゐた時代の優等國の影響であるから致しかたがないが實は情けない話である。瀟湘八景式の湖南洞庭湖畔の景色のうつしかたをそのまゝ書き現はして伯耆の海岸からあのあたりの海上の光景を描寫してゐる。湖水のうつしでは海洋の大きな凄まじい氣持ちは寫し得ないのであるけれどもさう云ふ眞似ごとをしてお茶を濁してゐたのである。この一事を以てしても如何に日本の智識階級が支那の文化に憧憬してゐたかゞわかると同時に波上のジャパニーズの影の薄かつたことや、海洋文學がいかに海國の日本の過去に微々たるものであつたかを知ることが出來るのである。

三　波上靜かに洞庭を下る大筏の偉觀

水上の親しみを數へるうちでも支那民族の大筏の上の生活は最も珍らしく又最も支那の民族を了解する上にふさはしいことであらう。

陸上も水上も同じやうに感じられてゐる支那の人々のあたまには陸上に大きな建造物を建てゝ

るるのと同じやうに水上に絶大のものを彼れ等の智識相應に作つて之を運用してゐると云ふことはさもあるべきことである。支那民族が總べて城壁でも樓門でも宮殿でも何でも大仕掛けに設計し又大きく形の上に造り上げることは既に世人の認めてゐるところである。然るに南方支那の人々はその地理上の關係から絶えず船を以て交通運輸の一大機關となし江上に湖上にその船を自由自在に用ひこなしてゐるのである。洞庭の湖上には蒸汽船も軍艦も戎克船も大筏も總て浮かんでゐる。夏の水の多い時分には軍艦も英國又は日本の軍艦が天下の形勢次第では乘り込んで行く。岳州や長沙あたりには屢々その艦上の探照燈を照らしてゐるのを見ることがある。しかし支那本來の水上の生活を親ふ爲めには湖南の名物なる筏の話が最も適切な材料となるであらう。

湖南では洞庭湖を中心として阮江であるとか湘水であるとか瀟水であるとか色々の大きな水流が集注する。冬の間はこれら四周からの江流も水量が少なくして洞庭湖の中心は夏の如く多量の水を包有しない。初夏から盛夏、初秋にかけてはその水量の増加と共に洞庭が冬とは打つて變つて一大海面の如く漫々たる水を湛へるのである。この滿水期には固より周圍の河川にも水が多量に出る。そうして湖南の奥の方は森林が多く木材の伐採が盛である。無論見えてゐる山から伐り

出して來るのではない。貴州ざかひとか廣西、廣東さかひの如き奥の方から澤山伐り出すのである。そして河川の増水期になると水運の便を利用して流して來るのである。普通の筏に木材を組み合して流れに乘じて降つて來るのである。そしてそれが一度洞庭湖上に出るとこゝにて多くの筏を更に幾つも合はして非常に大きなものに改造するのである。この規模は大體六七十間もある城壁である。そしてその構造は巧みを極めたものである。先づその水面以下と水面以上とに幾層にも木材を列べ積み上げて十分の土臺を作る。その長さは彼れこれ一町もあるかと思はれる。そして後尾にかなり大きな舵を附け筏上では數人がゝりで之が竹製の大綱を轆轤仕掛けでグルグル卷いて行くやうに循環して歩いてゐる筏の上には城郭のやうな偉大なる木造家屋の一村落が出來て中央が主要な通路になつてゐる。木材は筏上に積み上げられたもの全部を假りに使ふのでお手のものであるからいくらでも使ひ放題である。二階建の樓郭作りのものと云ふのは餘り見ないが併し相當に高燥な切妻のうちである。長屋のスタイルに出來てゐるものもあれば獨立家屋になつてゐるものもある。全く筏上生活を營める一小社會が形成されてゐるのである。湖南の奥から一千哩ぐらゐも長江の下流に降つて行くのである。湖南から湖北、江西から安徽、安徽から江蘇へ

と次第に流れについて下る。なるべく下る時には長江の流れの中心に近いところを下つて行く方が速力がはやい。けれどもよく岸につけて五日も十日も碇泊してゐることがある。買ひ物とか取引とか種々用向交渉があるらしい。それで結局江蘇省の鎮江(チンキャン)あたりまで下つて來てこゝで大取引をするのである。それで下るのには大凡六ヶ月くらゐかゝるさうである。そしてこの大筏は時の相場にもよるであらうが大體數萬といふ價のするものであるさうだ。

四　筏上に鷄鳴を聞く

かやうな譯で長江筏は時と金との兩方面から云つても非常なものである。一種の立派な財團を水面に托して下つてゐるわけである。取引をして了へば歸りには商招局の汽船であるとか日清公司の汽船であるとかそれぞれ文明的の火輪船で上水するのである。襄陽丸、大福丸、大眞丸と云つた調子の瀛船に乘る。英國側にもバタフィールド・ジャーデン會社の瀛船がゐる。時々これらの汽船に乘つて上水しつゝある筏の取引の人々がデッキの上から大聲で下水しつゝある筏上の人々と應呼しつゝある狀態を見ることがある。大筏はかやうな一大財團であるからこれ丈の商品を擁して下水するにはその筏上社會の人々に色々の役目の人のゐることが必要である。その爲めに實

際に於いて村長樣の團長も居れば資本主の親方もゐる。又大律士(辯護士)のやうな人もゐる。掌櫃的(番頭)もゐれば事務員、書記などもたくさんゐる。運轉士格の舵とりもゐれば技師も居る。啻にこれらの表面の役者だちを揃へてゐるばかりでなく、六ヶ月も水上生活を續けて行くのであるから、生活上の必需品は勿論、家族などもそのまゝ乘り込ませてゐる。幾家族のものが別々に生活を營み得るやうに出來てゐるのであるから心配はないのである。時々洗濯物の乾したのが筏上洞庭や長江の風に翻つてゐるのを見る事がある。又家畜家禽を飼養し鳴聲を聞いたことも度々ある。豚や犬も飼つてゐるわけである。とにかく筏に一つの立派な町のやうなものが出來てゐるのであるから日用品なども一通りそなへつけられてゐる。又時として冠婚喪祭などの祝儀不祝儀があつたりして頗る人間味のする興味ある社會を實現してゐる。子供の生れた祝ひか何か知らぬが、夜間紅や碧の圓形の提灯をあまた軒に吊して各房の太鼓や胡弓で目出度く合奏してゐることを見たこともある。殊にその筏が波上に靜かに映じてゐる紅碧の提灯の水面に輝けるところは實に何とも云へぬ美觀である。

筏上の人々は何れも皆平和村の人々である。筏上生活を自己の人生となし水上を以つて自己の

天地となせる翁共筏木の上に踞して蘆荻の原のかなたを眺め、空行く雲を打眺めて餘念なく實に大悟徹底した樣子がアリアリと見られる。南支那の地平線上の渺たる光景と、太平野の光景と、洞庭、長江の絶大なる眺めと、そしてこの筏の規模のトテツもなく大きいこと、これらが總べて調和して筏人生活の意味をばよくハーモナイズしてゐるやうに思はれる。これらの筏上生活の光景を繰り出して來る大筏も素長江本流では宜昌方面から來るものもあるが大部分は湖南洞庭方面である。洞庭湖上で組み合はされる此の大筏は實にチャイニーズの水上生活を觀察する上に看過すべからざる一大資料であると信ずるのである。從來南船北馬の語がある南船と云ふことが南方水利のモットーの如くなつてゐたが自分は特に此の大筏のことを力說したいのである。

五　長江の氾濫を呑んでかゝる支那の民族性

支那の民族性には大きいところがある。これは誰れでも云ふところである。しかし長江のあの大きな流れの氾濫と云つたら言葉で云へない位に大きい、それを呑んでかゝるあの地方の土着民の態度と云ふものは實に何と評してよいか判らぬ位に徹底してゐると云ふことを熟々思ふのである。

長江の氾濫は大規模に行はれる。長江の氾濫を云々するには更にそれよりも大きい支那南方の地理的に如何に大きいかを了解しておく必要がある。長江の幅の濶さは十五哩もあるところがあるが又二三哩のところもある。その廣大な水が太古から今日まで又未來永劫滾々として盡きないのである、そしてその廣い長江は左右兩岸から更にひろく打續ける太平野と相和して南方の沃野千里の光景をなしてゐるのである。たまに逶迤たる連山の地平線上にかすかに又極めて緩かに起伏してゐる遠景が眺められる。兎に角一望千里と云ふ際限もなく開けた太平野のうちを、長江が濁流滾々と流れてゐるのである。ところで揚子江は夏と冬とでその水量に非常な增減がある。夏季に於ける增水は非常なものである。二千里三千里と云ふ奥の西藏の方面や又支那本部にしても四川省蜀の方面や雲南、貴州、湖南、湖北、江西、安徽と各省からの大流の注入するものがあるので、細大の南北の水流と水流は地勢の關係で何れも皆この長江に流れ込む。實に非常なものである。それに西藏方面の春から初夏にかけて雪解けの季節に際會するとその雪解けだけの增水がどれ位たくさん出るか判らぬ程である。されば若しかりに長江上流下流を通じて水量が一尺か二尺增加してもその量と云ふ者は驚くべきものである。それが中流地方で例へばキウキャン『九

江』あたりであると冬の減水期は誠に驚くべき差を示して來る。卽ち冬の間は長江を上るときに河の床をスレスレに上る位であるが夏になると四間も五間も高いところを上ることになる。これは『九江』の岸壁の高さを標準にして考へると一番明白に判る。冬は全く城壁の下でも通る感じがして底の方を行くのに反し、夏になると殆どその岸壁の高さと同じところを上水、下水する、又その同じ高さのところに火輪船が寄港するのである。されば夏の增水期の間に船の通ふところの高さは餘程上層のところである冬は夏の時の船底以下のところを上下してゐる譯になる。增水と減水とはこれ位にちがふ。

尙『蕪湖』を中心に兩方左右に廣く茫々と際限なく眺めらるゝ葦の原の如きも夏は增水の爲めに僅かにその蘆荻の頭の方のみが數尺乃至一丈ぐらゐしか見えてゐないが冬になればその根の邊又はそれ以下のところまで見えて來ると云ふ狀態である。これ丈冬と夏とは違ふのである。何を例に引いても同じことで要するに長江の夏の水量と云ふものは兎に角素晴らしいものである。そしてこれらは沿江の土着民の常によく知つて居るところで夏になれば增水する位のことは豫定のことゝ思つてゐる。日本人で始めて見るものは珍らしく感ずるかも知れぬが、土地のものは何と

欠

に蝟集する雅客の數は少なくない。然しそれは年中いつでも見られると云ふものではなく舊曆の八月十五、十六、十七日の頃に限られてゐる。こは潮の滿干に關係があることは固よりであるが舟山列島それと錢塘の水流や水量の關係、それらの複雜な關係からして中秋月餅を食べる好季節になると、毎年一回宛この觀潮期がやつて來るのである。自分は一昨年秋八月十六日に偶然杭州西湖や錢塘六和塔の方面に小室翠雲、井土靈山等と共に遊び三潭印月に秋月を賞し杭州領事清野長太郎氏と杭州艮山門の渡しで別れてそこから船出をし、畫伯詩人と終夜月を眺め蟲を聽き蚊を拂ひつゝ語り明かしたのである。夜半艫舳双方に聞こゆる櫓の音高く流れを下り下りて長安の里を過ぎ、早朝ハイニン(海寧)の港に上陸した。こゝが例の觀潮を賞する絶好の地點である。

外洋の波上より錢塘の波上へ移る時の船人の航行の壯觀は古來天下の呼物となつてゐる。此の名物を實地に海寧に出掛けて觀たので、自分は之によつてチヤイニーズの如何にもその輕妙な航行振りを目睹することが出來た。

浙江省は錢塘の江口海寧の港ぐらゐ觀潮に好適地はない。岸壁に高く聳えたる佛塔の下、大觀亭に坐してひたすら名にしおふ潮來の時刻を待つてゐると、上海方面から又杭州あたりから其の

欠

他各地方から集まる觀潮の客は忽ちに五十人、百人、千何百人となり午前十一時頃になると集り來る雅客は或はコバルト色の衣裳又薄水色の品よき衣裳に扇など手にし風薫る海寧の岸壁は觀客で一杯になつた。軈て十二時近くなると遙か海の彼方から、而かも水天髣髴の水平線上に白色の一線が劃された。初めは薄ボンヤリと見えて居たのが次第に明瞭になり、之を樂しみに群集の視線は此の一線に集まる。そのうち幽かに何となく大きな響きがゴーゴーと云つた調子で聞こえ始める。よく靜かにして耳を澄ましてゐると頗る大きな浪の寄せ來る音であつて次第に近づいて來るやうな感じがする。氣のさとい連中は一里二里も岸壁に沿うて遙か沖の方まで出かけてゐた。その連中は潮の大浪の寄せ來るのに從つてドンドン壁上を奥へ上つて來る。見るうちに半里か十四五町ぐらゐのところまで潮は魚押し寄せて來た。古來文人詩人がこの來潮を『萬馬奔騰』と云つてゐるが全く白馬の群が大舉して驅けり躍つて來るやうな狀態で、實に壯觀である。錢塘の氷はかなりの速力で江口に向つて流れてゐるのであるが寄せ來る外洋の潮の勢、その潮の高さ幾十丈、その色の白さ雪を欺くばかり、その潮の音は百雷の一時に鳴り渡るが如く、實に凄まじいものである。殊にその潮の飛沫を盛に揚げて寄せ來る波浪の峰の急轉直下して落つる水柱が錢塘の流水と衝突

して、こゝに海水と江水の巴狀の狂態を演ずるその狂瀾怒濤の鬪ひ合ふ光景は壯絶と云ふ位の語では云ひ現はせない。愈その潮の峰が自分共の停止せる岸壁のところに來るときには最早やその狂潮その極に達し岸壁の上にも襲うて來るのでないかと疑はれる位であつた。その潮はそばで見てゐる瞬間に非常な速力で溯つて行つて了ふのであるがその光景の横斷面を想像して見ると絶大の氷山の一角が崩壞しつゝ驀進して行つてゐるやうなものである。

かやうな光景は轟然たる潮の音と共に肝を冷やすやうな感じがするのである。かゝる場合に江上に棹さす船は一隻も見ない。居れば必ず寄せて來る潮の爲めに卷き込まれて了ふのである。僅かに海寧の岸壁には圖案の麗はしい浙江獨特の戎克船が十隻ばかり來潮を宛て込んで艫綱を解かんと仕度して居る位であつた。初め潮の來る迄は岸邊に近き洲の上に乘り揚げたやうな形になつてゐるのである。しかし好機逸すべからずでその錢塘を溯江せんとするものは船出の用意に餘念がないのである。スワヤ潮のトバチリが來たと思ふより速く解纜する。すると待つてゐた戎克船は忽ち潮上に乘せられて自然と潮の速力と潮に伴ふ風の力とで追手に棹さして快速力を以つて溯航することが出來るのである。見てゐると一段と段が高くなつた水流の勢で獨り手に見るまに押

しのぼつて行くのであるから誠に面白いやうである。

潮の急先鋒は錢塘の上へ上へと驀進する。後方、外洋の方面から暫らくすると波間に戎克船その他の帆船が隱顯する。その速力が亦非常なものである。特別のこの潮流に乘じて溯江する船が續いて來る。舟山列島方面の船は皆この天與の高浪大波を待ち受けてゐる形である。その潮の來るところ、波上に船を躍らし溯江せる光景は活動のフイルムに納めて置きたい位である。一邦人の嘗つて錢塘江でこのフイルム製作の爲め岸壁を下り危險區域に入つて機械を運轉しつゝあつた際怒濤にさらはれてフイルムは水泡に歸し僅に九死に一生を得て掻き上がり難を免れたと聞いてゐる。實に危險なことをしたものである。吾人は此の天下の絶景を打眺めることが出來その壯さに勝さる壯絶なこの奇蹟に見とれてゐたのである。すると、そのうちに潮はヅット上に溯つて了ふ。溯江した船の群も次第に影が遠くなる。何もで杭州あたりへ行くと潮の高さはよほど低くなることはなるが、兎に角上流嚴州あたり迄その餘波が傳播して行くのだと聞き及んでゐる。

毎年の年中行事であるとは云へこの狂瀾怒濤を物ともせず之れを利用して溯江の便とする支那舟人の潮に對する親しみは寧ろ驚嘆に値ひするものである。

八　華僑の海洋的發展振り

臺灣人郭春秧翁が南洋に於ける事業振りの偉大なることは臺灣に興味を有する臺、內人の齊しく周知のとである、辜顯榮翁や故顏雲年翁、林熊徵氏等を數へる人々は又必ず郭翁を省くわけにいかぬ。郭翁は臺灣に籍があるから純粹の華僑とは云へないが支那の人々で南洋馬來半島から一帶太平洋方面に出掛けて、その到る處に自己の天地を開拓しその地に住居し着々功を收めて居るものが中々ある。之を一般に華僑と概稱してゐるのである。ひとり南洋太平洋方面ばかりでなく米國、南米その他たいていの處は支那民族の蔓がつてゐない處はない。然し主に普通華僑とは南洋方面にひろがつてゐる連中を指して云つてゐるやうである。これは主として廣東人福建人の渡航者の南洋方面で活躍せるものが多いので地理上の關係からも南洋方面がその主要な舞臺となつてゐる爲めである。

宋の時代から支那とアラビヤ方面その他の交通貿易が開け自然南洋方面は廣東人の貿易地となつた從つてこの頃から南部支那人の活動舞臺となつたのである。南洋殊に表南洋の天地は蘭人の設備經營によるもの多きは云ふを俟たざるも、その地方から支那華僑の活動を控除するとすれば

著しき差支を感ずるまでになつてゐる。廣東人あたりの氣質はよほど世界的開放的で謂はゞ海外向きに出來てゐる。外國に出かけることを子供のときから何とも思つてゐない。日本に來る留學生のうちにも廣東人は特に多い。漫然廣州の埠頭まで散歩に行つて見たら友人が日本に來ると云つてゐたので自分も出來心で一緒に船に乘り込んだそして神戸に上陸した。それから事情を父に知らせたら一時は怒つて手紙を寄越してゐたがこの頃は仕方がないと思つて學資金も月々仕送つてくれてゐる云々とは屢々自分共の廣東の青年から聞くところである。

海上の航行を何とも思つてゐないと云ふ處に華僑の強いところがある。行先き地に永住して熱心に業に勵むと云ふ偉い特性を有することは周知のことであるが、それよりも南方支那人は特に波上に親しみを持つてゐるところが美點である。昔からさうであつたと云ふことは今日華僑に多くの成功者を出してゐるのでよく肯かれるのである。日本人は海國に生れ海國男子など云ふ癖に船を嫌ふ、航海を心配する。船を見た丈でも既に船酔ひする人がある。是は波上生活に親しみのない證據である。波上を嫌ひ船を案じてゐるやうでは海外發展は出來ない。口先きばかりは海國男子でもその實船の動搖を思ふと氣分が惡くなる、腦貧血を起こすと云ふ。出來れば乘らないや

うな工夫をのみすると云つた調子である。自分で自ら進んで海外に乘り出して見ようとする實行者は誠に少ない。そして生活に困つたとか食ひつめたものとか云ふ連中が多く仕方なしに海外に出稼ぎに行くと云ふ有樣である。それ故に海外渡航と云ふことは聯想が惡くて困る。一日も早くこの弊風から脫却するやうにしたいものである波上を恐れる程度から波上生活は親しみをもつ程度に進めなくてはならぬのである。支那人は既に今日その域をば卒業してゐる。華僑はそのうちの優等生格のものである。そして各地にそれぞれその發展振りを示してゐることは今更こゝに云ふを要しない。彼の廣東政府、殊に寡欲なる「孫文」と云へる人格に向つて海外から多額の援助の來てゐたのは多く南洋の華僑の仕送りに據つてゐたのだとは消息通の談である。華僑が毎年その手に收むる財産と云ふものは蓋し驚くべき巨額に達してゐるであらう。吾人は海洋に於ける支那民族の發展振りに就いては大いに之に敬服するものがあると同時に、日本人は大いに之に學ぶべきものがあることを信じて疑はぬ。支那民族チャイニーズ全體として之を考へて見るに自分はその波上生活と云はうか水上生活と云はうかその廣州の町の水上生活の人々は別にしても總體の上より見て日本人よりも支那民族の方が水上そのものに親しみを有することが徹底的に行つてゐる樣

に思はれる。

案ふに今後の列國關係は此の波上生活に親しみの多くあるや否やと云ふことが次第に重大な關係を有することになるのであるから吾人はこゞに趣味と實際との兩方面から支那民族の長所を知ると同時に日本人自身の此の方面の宣傳と修養とに一層努むる必要のあることを力說したいのである。

十二　支那旅行の印象

自分は既に支那滿洲朝鮮臺灣へ前後十數回視察旅行をなし殊に支那は自分の本國少なくとも勝手な言ひ分だが自分の書齋の延長地帶であると云ふ氣持ちで居るので一人でも多く支那の事情を視察し支那の民心の眞相を研究してくれる人々の出ることを希望してゐるのである。今回我が東洋協會の內命で視察團に加はつて行くことになり一評議員としての任務を果たし得る機會を與へてもらつたのである。形式上の報告は已に口頭で濟ましたのであるが大體の日記と活動の樣子、

成績の如何、計畫の參考、自分の感想につき述べて置く。

一　日　記

（九月三十日より十月二十日に至る）

二　支那視察旅行を了へて。

一　支那滿洲朝鮮の印象。

二　觀光と土產物の心理。

三　再遊の氣分。

四　宣傳の効果。

一　日　記

大正十一年九月三十日　同十月一日　東京——下關

東洋協會の事業の一として、東洋各地方の事情を宣傳し、又內地各方面の人々に之が視察を慫慂するといふ意味に於て、今回始めての試みを朝鮮、滿洲、支那の一都分に行つたのである。大正十一年九月三十日視察團一行廿二名、其內十名が東京驛より出發し、名古屋、米原、京都、大

阪、下關等に於てそれぞれ團員加はり、關釜聯絡船の中に於て全員廿二名の數が纏つたので、團長は後藤松吉郎氏、會計監督は石川善太郎氏を衆議により選擧した。一行の氏名は左の通りである。

東京市京橋區南傳馬町第一生命保險相互株式會社	石川善太郎	(五七)
大阪市西區土佐堀通四ノ八	同	上	實業家	武田元助	(五九)
福井市照手上町三十九	同	上	同	武田賢二郎	(二九)
東京市外巢鴨町宮下一、六五八	東洋協會評議員	商業	鍋島三喜藏	(五三)
下ノ關丸山町	實業家	久門商利	(四三)
同	上	(但神戸驛乘車)	同	上	桝谷晉三	(五一)
東京市芝區高輪南町五二	東洋協會評議員	桝谷育三	(二三)
東京市小石川區小日向臺町一、二七	同	上	後藤松吉郎	(七四)
名古屋市中區鐵砲町一丁目	後藤合名會社	代表社員	後藤朝太郎	(四二)
後藤合名會社	商業	後藤增平	(二七)
福井市照手上町一六ノ一	甲矢榮吉	(四四)

東京市麴町區內山下町一ノ一	東洋協會主事	三井邦太郎	(四〇)
東京市岡崎法勝寺町	織物問屋	下村忠兵衛	(二九)
下關市園田町梅ノ坊	實業家	森祐三郎	(四九)
宇都宮市川向町六九	測量設計業	關肇	(四一)
東京市京橋區南傳馬町	第一生命保險相互會社調査役	鈴木六郎	(五二)
第一生命保險相互會社		

以上第一班（即ち奉天より天津、北京、往復大連行）

大阪市北區堂島	大阪毎日新聞社社會部副部長	木下不二太郎	(四一)
大阪毎日新聞社		
上田市新田	上田精練眞綿加工會社常務取締役	伊藤源平	(三九)
四日市市濱町中上商店	四日市豆粕製造所東洋協會實業家	中上八郎	(二七)
東京市麴町區內山下町一ノ一		松浦淑郎	(三〇)
名古屋市西區船入町一ノ八		安藤次郎	(三二)
東京市芝區三田一ノ四三	東洋協會評議員	篠崎都香佐	(五七)

以上第二班（即ち奉天より哈爾賓、吉林往復大連行）
合計二十二名

關釜連絡船は高麗丸にして乘心地好く月清く波靜、一行或はキャビンに或はデッキに海峽を談じ半島を語り旅行の前途を樂しむ。一行の胸中洋々たるものがあつた。

十月二日　晴　釜山

朝九時釜山に上陸した、釜山の助役及滿鐵福永氏その他協會出身者側の出迎を受け、一行二十二名と案内者は五臺の自働車に分乘し日韓市場、龍頭神社其他を視察し、十時の京城行急行にて釜山を出發した。一行は滿鐵側の好意に依り列車中の一車を借切り、車内にて團員中より團長及會計監督の互選を行ふ、團長は年長者の故を以て評議員後藤松吉郎氏、會計監督には算盤の專門家の故を以て石川善太郎氏當選さる、汽車は洛東江に沿うて北行し、大邱、秋風嶺等の驛を過ぎ、永登浦驛にて早川滿鐵社長の病氣を聞き、直に見舞の電報を打つた。同夜八時京城南大門に著き、一同浦尾旅館に投宿、直樣一行有志は朝鮮在來の生活狀態を見るべく市内水漂橋界隈の視察に出掛ける者があり。又内地人町の本町界隈に出掛ける者があり、孰れも京城文化の特色を觀察する

ことに熱心であつた。

十月三日　晴　京城

一行の幹部及東洋協會評議員等は先づ齋藤總督を訪ねたる後、打揃うて總督府側の案内にて南山公園、漢陽公園巡遊の後、有吉政務總監安武秘書官等と一堂のもとに會し、產業組合、治水工業其他に就ての談話の交換があり、亦齋藤總督にも同席に臨まれ一場の挨拶があつた。一行はそれより李王職美術製作所、並に商業會議所の展覽會を參觀した。又總督府側の午餐會に招かれ朝鮮ホテルの大ホールに這入つた。柴田前學務局長よりの挨拶もあつた。それより昌德宮、秘苑に、又博物館に巡遊、末松事務官、並に今村事務官等の好意を受け、それより動物園、或はパコダ公園等に遊び、其歸途朝鮮文化生活の方面を觀察すべく『明月』にて有志十九名、僧舞、劍舞四鼓の舞等を眺めつゝ朝鮮料理を味つた。同夜旅館にて大阪毎日新聞社長本山彦一氏の來訪を受け、自分は木下不二太郎氏と共に本山翁に應接した。

十月四日　晴　京城

早朝朝鮮ホテルに本山氏を訪ね、又朝鮮銀行より一行は光化門内景福宮に入り、博物館、慶會

樓、其他李朝時代の壯麗なる建築物を見、淑明女學校、並に校洞小學校等を參觀し、物產品評會に臨みたる後、一行の所望により仁川に往復した。其後京城日報社、其他市內の官民有志より種々の好意を受け、中には諸名家の所藏品、書畫等の鑑賞に出掛けた者もあり、或は舊友知己を訪ねる等思ひ〳〵に時間を費した。そして同夜十一時南大門驛を出發、滿鐵側よりの案內者福永氏加はり、翌五日朝五時平壤に著く。

十月五日　晴　平壤

齊藤警察署長其他多數の出迎をうけ署長より肝煎りの案內役を勤めて貰つたので一同豫期以上に平壤各方面の視察を遂げることが出來た。先づ朝鮮在來の最も舊式な草根木皮を取扱つてゐる大藥房の內部を見、又公共浴場、公共宿舍等の社會的施設を視察し、又西洋人の經營に係る崇實大學、中學、小學等主として基督敎の色彩を帶びたる學校方面を參觀し、更に又師範學校等も比較參觀した。次いで萬壽臺、七星門、乙密臺より玄武門に出で、お牧の茶屋、浮碧樓より大同平野の美景を眺め、大同江に沿ひつゝ練金臺、大同門に出で、兵器廠に至り、幹部は道廳、府縣に挨拶に廻つた。一同折柄此の地方虎疫蔓延の事とて、長時間の滯在を避けて午後五時出發安東縣に向

ふ。同夜十時義州より鴨綠江の鐵橋を渡り安東驛に著す。此所にて定めの如く時計を一時間遲らせた、五十分の停車時間中一行の荷物の稅關の檢査等がある筈であつたが、是は了解を得て事無く濟み、釜山より附添つてゐて呉れた滿鐵の福永氏は又た釜山に所用あればとて去り、江川氏と入代りになつた。尙列車に就いては一行は以前と同樣に一車を提供して貰つて、車中水入らずで歡談沸く、睡眠時間を犧牲にして種々な話題起り大に賑ふ。朦月の裡に鳳凰城、鷄冠山、太子河等の諸驛を過ぎて朝六時奉天に著いた。

十月六日　晴　奉天、撫順

奉天驛前大丸旅館に一同投宿、朝食を了へ、九時滿鐵の手配に依り撫順炭坑の視察に出掛け、先づステーションの側の露天掘十二萬坪の礦區、並に地下千二百尺以下の各礦區並に坑內の事務所、或は採炭狀態等を視察し、或はモンド瓦斯發電所等を參觀した。午後三時奉天へ歸り、同夜一行は自由散步と爲し、協會幹部は東洋協會出身者大野、植木、田邊、其他同地實業各方面に關係せらるゝ各位よりの歡迎を受けた。團長は病中の早川社長を奉天の小學校內に見舞ひ容態稍好良との報告を得た。

十月七日　晴

此の日一行は二班に分れた。一班松浦淑郎氏外五名は哈爾賓に向け朝十時出發。一班後藤松吉郎氏外十五名は翌日北京行と定め、七日朝、幹部は商業會議所を訪ね、一行、宮城拜觀、張作霖の役所並に張作霖の邸宅、其他城内繁華の地域を展望した。次いで一同郊外北陵に至り境内を隈なく巡り土饅頭の陵墓を廻り清朝北京に引移る以前の隆盛なる狀態を偲んだ。歸途幹部は赤塚總領事を訪ね、一行は喇嘛塔に迂回し、それより思ひ〳〵に或は滿蒙毛織會社、其他泥棒市、或は銘々城内目拔の場所に買物等に出掛け、其他個人個人の招待に行く者等があつた。

十月八日　晴　奉天

朝十時前、幹部は滿鐵、東洋拓殖、正隆銀行、正金銀行、商業會議所、奉天毎日新聞等の各所を廻り挨拶を爲し、十時支那汽車にて北京に向つた。北京班十六名は、是迄の如く最早滿鐵側の手配を受けることは出來ない、蓋しこれからは全然支那側の列車に依つてゐるのであるからその積りでゐなくてはならぬ。車中の混雜一時は一行を驚かせて居つた、稍暫く經つうちに安定を得た、車中食堂に行く者もあつたが、既に支那の領域に入つた以上は、須らく食事も亦支那式にや

るに越したことはないといふので、汽車の窓より鷄肉其他支那式の油濃いものを取つて晝食に或は夕食に舌鼓を打つて居つた者もあつた。或は葡萄、梨、柿、栗、支那饅頭、月餅等を求めてゐた者もあつた、新民屯、溝帮子、錦州、山海關、秦皇島の諸驛を過ぎて太沽に至り、軈て六時に天津に着いた。商業會議所、並に東洋協會出身者、柳田、中山、其他有志諸氏の出迎を受け常盤ホテルで朝飯を喫した。

十月九日　强風、砂塵滿土、天津、北京、

一行は朝食後、公園、李公祠、商品陳列所、估衣街、其他支那町の目拔の場所を視察し、或は思ひ〳〵の買物を爲し、協會同窓會側の招待にて中食を支那料理店、聚和に取つた。午後三時天津驛を出發して七時五十分北京前門の驛に着いた。大阪毎日特派波多野氏、三井洋行、西湖堂、並に協會出身者、或は支那人側の出迎を受け、一同荷物を旅館扶桑館に託し、一行は前門外の中和茶園の劇場に臨んだ、同夜遲く旅館に歸り旅裝を解く。豫め同地の新聞記事に出てゐた爲めに支那人側、又は日本人の實業家、或は學者側等の訪ね來る者が多かつた。

十月十日　晴　北京

此日は秋晴れの空模様清く、昨日の天津に於ける砂塵の激しいのに比べて打つて變つた違ひ、實に氣持良い日であつた。殊に此の十月十日と云へる日は中華民國に共和政體の布かれたに就いての何よりの記念日で、支那では之を國慶日と稱し目出度い日であつた。萬壽山にて盛大なる觀兵式が執行されたと云ふ日であつた。其の軍隊の通り筋萬壽山街道は總べて撒水は無論のこと誠に清く掃除が行屆いて、何時もにない滿艦飾の美をこらしてゐる所を見ることが出來た。それは宛然協會視察團を歡迎して居るが如くにも見られて、非常に好都合であつた。同日早朝一同公使館に小幡酉吉氏を訪ね、それより山本寫眞屋を同伴し、天壇より一旦城内の東城を北へ、西直門より植物園の前を通り、西北へと萬壽山街道楊の並木の下を五臺の自働車で走つた。道中幾萬の兵隊の行列と摺違ひになつて、支那軍隊の支那式に美裝せる所を眺むることが出來た。萬壽山に於ては仁壽殿、知春亭、玉爛堂、西太后の像を收めたる樂壽堂、入門長廊子、排雲殿、銅閣、佛香閣、其他めぼしき金殿玉樓は大抵或は上り或は下り、而して更に雲錦殿に出て之より出門長廊子を昆明湖に沿うて進み、而して大理石舫の清宴舫、迎旭樓牌樓より水庫に入つて船塢を訪うたこゝに西太后が曾て萬壽山下より北京へ往復する時に乘つてゐたといふ素晴らしい結構な畫舫の

三隻を見た、そのうち一隻は半ば沈んでゐた。北洋艦隊の經費を犧牲にして、此の萬壽山の修覆に西太后は專ら力を盡したといふだけあつて、事々物々一として贅澤の極を盡してゐないものはない。屋根の瓦一枚を取つて見ても其釉藥の掛け方と云ひ眞に見事に眺められた。一行は好記念に佛香閣排雲殿の階下と知春亭山石の上に於て撮影し、更に玉泉山や其の他西山の遠望を逞しうして名殘り惜しくも三時頤和園(萬壽山)を去り西直門へと急ぐ。德勝門内鐘樓、鼓樓の下を過ぎて孔子廟に參拜、聖賢の位牌を拜し、四寸大の蝎の動けるのを見て少なからず一驚を吃し大に笑ひ、石鼓の古色に三千年の昔を偲び清朝時代、進士及第者のそれ〳〵奉納してゐる石牌の林立せるもの等を打ち眺め、境内の神々しさを賞しなどして一同孔子廟を去る。そしてすぐ裏手にある、喇嘛寺、卽ち雍和宮の參觀にうつつた。喇嘛僧の禮拜に用ふる帽子、佛像、歡喜天、佛具、軸物、或は壁畫等を拜した。此の寺は清朝時代に宮室から保護を與へられて居つただけに、今尙盛大を極めて居る、一にはその敎義が支那民衆の趣味に甘く嵌つて居る爲に、一般の信仰を强く牽附けて居るのである。次いで紫禁城内に一同は向つた。紫禁城内にては東華門より這入つて文華殿外を西へ左に、大和門を右に大理石造の階段を上り大和殿、保和殿等の絕大壯麗なる宮殿を拜し、

一同之を歎賞して、更に西に進み目的の武英殿に這入つた、武英殿は奉天並に熱河の宮殿に寶藏されてゐた清朝の幾萬の珍品を陳列した所であつて上述文華殿の繪畫と一對になつてゐる所である。更に其奥には別に寶庫を有つて居るのである。武英殿の寶物は一年のうち時々陳列替を行ふのであるが何れも結構なものである。金銀をちりばめた家具類、乾隆帝の卽位のきらびやかな衣冠、或は七寶に金箔を施した頭蓋骨の髑髏盃、或は歷代有名なる陶器類、或は文房具類、其外堆朱、玉器類、また珊瑚樹、翡翠、黃玉等の寶石類で造上げられたる植木各種、其のうち石榴の實の如きは打割れたる內部の一粒々々が悉く結晶形の寶石で光つて居る、或は又その植木の幹は珊瑚樹の大きな自然のまゝのもので出來てゐる。或は菊の葉にしても總て翡翠を薄く削り成して自然の葉を彷彿せしめるやうに造つてある。或は菊の花片の一枚づゝを見るとこれ亦或は紅玉、黃玉を使つて、而かも如何にも其細工が柔か味を帶びて居るなど一として數萬金の價のしないものはないやうに感ぜられる。若し夫れ武英殿の西方別室である古銅器專用の陳列殿に入つて見れば、鼎であるとか、壺であるとか、尊であるとか、鐘とか彝とか、爵とか其他匜、盉、罍等各種の古銅器が所狹き迄に並べられてある。多くは周代の物であるが、亦漢時代の物もあるし、其後の新

しい物もあつたが、今回はよほど物が選擇されて陳列せられてゐたのは意外であつた。其他武英殿に向つて左の後方に乾隆帝が當時そのお氣に入りの香妃の爲に特に造營された所の土耳古風呂の遺蹟が其儘今も尙丸天井の姿を成して遺されて居る。一行はこれをも興味をもつて眺めて來た此等の珍らしき、又支那藝術の極度迄達したる結構なる文化的產物を見て驚嘆措く能はざるものがあつた。中には明日今一度精密にユックリと見に來たいといふ者もあつた位である。それより黃昏の北城を展望すべく一行は紫禁城外北京飯店(ホテル)へ向つた。同ホテルの屋上庭園は北京紫禁城內の總ての建築を鳥瞰的に瞰下すことが出來、更に四方の城壁並に城壁の上の望樓よりして南方天壇の建物、又四方萬壽山より西山を眺めることが出來る洵に結構な所で、一行は大に其展望を肆にして、宛然其日の巡遊した跡につき一々おさらへをして行くことが出來た。ホテルで夕食を取つて、其後は自由に思ひ〳〵に散歩した。

十月十一日　快晴　北京

翌朝は北海(ペイハイ)より天子の大學、卽ち國子監又は中央公園等を視察して後、それ〴〵目的の買物、或は銘々の用達しをなすべく時間を自由に取つた。自分だけは從來度々北京に行つて居る關係か

ら種々な知己、新聞社、或は公使館側、其他、銀行、會社の連中と會すべく大和倶樂部に行つた昨日國慶日で公使館に不在であつた小幡公使も此の日に午餐會に出てゐられたので、約三時間許り種々の談話の交換が出來、旁々東洋協會の宣傳にも努めた。又公使自ら一行の爲に晩餐會を催したいといふことを申出されてゐられた。折柄山東會議の後であつただけに、山東日支合辨事業等に就て種々の興味ある談に花が咲いた。

十月十二日　晴　山海關　錦縣

一行は十一日夜八時多數の見送を受けて北京前門の驛を立つた。翌朝秦皇島、山海關・溝帮子、錦縣等の諸驛に於て一行は片言交りの支那語でプラットフォームに買物が出來得る程度迄進み、互に相當な通を振廻はして通譯拔きの對話が出來る者もあつた。支那汽車で不自由勝ちであるに拘らず、此歸りの汽車には大分事情にも慣れて來たものと見えて自ら進んで、或は態々三等の部屋に行つて支那旅行者の狀態等を研究的に眺めて來た者もあつた。中には哀れな露西亞人が零落した姿で子供を抱へて居るなど見るものも見て來色々の物語りに賑つた。又食堂の時間の際を利用して支那人共が賭博に餘念なく打耽つて居るといふやうな光景をも眺め、一行は少からず興味を

惹いて居つた。斯くて夜七時奉天に一行は着いた。同夜奉天新市街、或は城內に出掛ける者もあり、哈爾賓組は既に昨夜同地に着して居つたので、玆に目出度兩班が合し廿二名の勢揃ひが來た。

十月十三日　晴　奉天より大連へ

早朝兩班は合して一團となり一行廿二名は八時奉天驛を出發して景氣よく大連へ向つた。例に依つて滿鐵側からの江川氏が案內に加つた。南滿洲の風光は他の地方の景色と稍變つて頗る長閑で柔か味のある山が次第に汽車の窓に映ずる。車中哈爾賓組、北京組兩方面よりそれ〴〵視察に就ての目出度き自慢話に氣焰が揚がり、或は珍談を互に交はしなどして大に賑かであつた。殊に哈爾賓行の連中は東蒙古、公主嶺の大平野を觀察し、其牧場の大規模なることを見た。是は恰も北京行の連中が紫禁城內の大和殿保和殿を見た其大規模の惑と互に好一對の自慢話となるものである。一は大自然の偉大なること、一は人工的の偉大なることを見たのであつた、十三日は夜七時大連に着いた、定めの遼東ホテルに入ると東洋協會の支部の連中或は東洋協會の經營に係る大連商業學校の幹部連中などが見えた。而して伊集院新關東廳長官より招待のあることも打合せがあつた。話が極まつて連中がホテルから歸ると後直ぐ號外が出た、早川社長の喪が發表されたの

である。それで萬事無期延期となつたのである。吾々一行の大連に於ける視察範圍も種々手違ひを生ずることになつた。と云ふのは各官衙會社は上へ下へとの取込みで、昨今の市中の不景氣なるに似ず市内各方面とも極めて忙しく眺められた。尚一行は十六日の内地行大阪商船哈爾賓丸で歸航する筈であつたが一日延期になつて十七日出帆のことになつた。隨つて幾分日程をゆつくりするやうに變更した。

十月十四日　晴　大連

朝九時一行の幹部は社長の靈柩を大連に迎へた、一行は滿鐵本社、大連商業、其他市内各所を巡遊して晝食を大和ホテルに取り、屋上にてカメラを嬉しげに弄び休むひまもなく撮影に餘念なき者もあつた。午後は日清製油豆粕會社埠頭ビルディング等を視察した後、老虎灘に向つて出掛けた。其後は自由散歩とした。其日一行は東京出發以來始めてのんびりした氣分になつたと期せずして異口同音に云つて居た。既に大連に着いて見ると實は最早内地に歸つたやうな氣持に一行はなつて居つたやうである。同夜ホテルに東洋協會卒業生等の訪ね來る者多く、名殘りの支那研究をとて小崗子方面の支那町に散歩に出掛ける者もあつた。幹部は大連日々新聞遼東新聞その他

文化協會等の記者の來訪を受けて其應接に暇がなかつた。

十月十五日　快晴　旅順

此の日朝八時より一行は江川氏同導旅順に行つた。白玉山の塔上に登り戰跡を打眺め、精密なる説明により當時の狀態を想起した、或は又博物館に行つて滿洲及各方面から出る物産の現狀を見又その考古分館に中央亞細亞より大谷光瑞氏の持來られた千有餘年以前のミーラ十體、壁畫、其他人類學的、考古學的の材料を一々興味深く眺めた。晝食は關東州土岐事務總長の官邸にて一行招待を受け、土岐總長よりは肅親王より賜つた遺愛の古硯を又廣瀬事務官は見事な端歙兩硯を一行中の篤士志家に見せられ、興味ある談話が交換された。其後一行は旅順工科學堂、語學堂、又鷄冠山等を視察して六時の汽車で一同大連に歸つた。同夜東洋協會の幹部は滿蒙文化協會の連中と種々打合せをなし又今後の滿洲方面に向つての發展等の相談會があつた。

十月十六日　晴　大連

早朝自分は大連商業學校講堂に於て生徒七百名に向つて支那視察談を試みた。一行は中央試驗場、其他主要なる箇所を歴訪したが、何れも社長の靈柩を見送る日の事とて混雜一方ならず、殆

ど祭日同様の日にぶつ突かつたので視察は簡單に切りあげることにした。そして一行は星ヶ浦へ出掛けて大に日本式の風光を眺めることが出來て非常に愉快を覺えた、玆に一行大和ホテルに晝食を終へた後、星ヶ浦の背景で一同撮影をした。午後二時一同大連に歸り、四時の汽車で社長の靈柩を納めたる貴賓車を見送つた。人波は非常なもので驛の前後左右を黑く埋めてゐた同日の新聞記事も社長の事以外は殆ど何等の記事もなかつた。一行の内篤志家は或は方外軒(骨董店)を訪ね或は數奇者原田光次郎氏を訪ね、或は友人の處に、或は買物にそれ〴〵最後の夜を有益に又忙しく利用してゐた。

十月十七日　晴　同十八日　晴　同十九日　曇　同二十日　晴　大連――下關

早朝幹部は滿鐵本社、大連商業、其他重要なる箇處に挨拶に廻り、一行は悉く九時波止場に出で商船哈爾賓丸に乘込み、十時多數の見送を後にして岸壁を離れたのである。一行廿二名の内篠崎、木下兩氏は旅行の前途尚遼遠であるから。そのまゝ大連に殘り、船を待つて山東の青島、濟南府に出で北京、天津より更に河南、漢口、揚子江方面を廻つて上海から本年の末に歸朝する豫定である。船中一行廿名は無事愉快に數日を送つた。黃海七發島沖合も波靜かであつた。出帆に

先立つて獨り安藤氏が大腸加答兒で醫者の診察を受けて居つたが、船内に於ては自分と同室になつてゐてお粥、鷄卵などにて食事を取つて居られたが、經過もよく無事に十九日下關上陸の時にはスツカリ快方に向つた。船内では一行廿名食堂に會して報告會を兼ねた懇談會を行つた。銘々所感を述べた。何れも其の日子の少きに失して居つたことを遺憾として居つた併し過去の記憶を辿つて、皆非常に忙しかつたけれども兎も角變つた生活に這入つたので面白く、殊に土産物に大分力を入れて居つた連中は、翡翠、絹物、煙草、器物、繪畫、栗其他の土産物で鞄やら籃の數を殖やして居つた。實業家方面の中には東洋拓殖會社の大株主があり、或は大阪、京都方面の織物或は貿易商等の連中もあつたので多く實業方面に關する觀察があつた。短日月の割合に行屆いた視察を遂げて居られたやうである。朝鮮に於ける農業治水の事、滿洲に於ける農産物の事、或は北京方面に於ける商業上の事、哈爾賓に於ける露人の現狀の事、取引所の事に就ての意見も交換された。

要するに一行の觀察を總括して見るに何れも皆案外に感じたことは左の一項であるといふことを異口同音に唱へ居つた。それは朝鮮に行つて見ると日本内地から多數の人々が行つて居るに係

らず、朝鮮人を相手にして居る商賣少く、日本人相互の共食をやつて居るやうにしか見えぬ。又滿洲に行つて見ても同樣に共食ひの觀がある。北支那に進んで行つて見ても益ゝ其感を深くするのみである。支那に行つて居る商人は日本內地にゐて考へてゐると全く支那人を相手にして商賣をして居るものだと考へられて居るのであるが、事實は其豫想に裏切られて、日本人相互食合ひをやつて居るものとしか見られなかつた。斯ういふことは將來の發展に就て大に反省しなければならぬ事だといふことを皆深く感じたもののやうであつた。誰れしも是は云ふ事であるけれども一行が面のあたり其實事を見て自發的に其感想を抱かれたといふことは非常な味方を得た感がするので吾々も興味を以て共鳴する所である。

尙序でながら吾人の感想を之に附加へると、昨今の東亞の經濟狀態と云ふものは奉天にしても、大連にしても、其他支那方面のどの地方に這入つて見ても、總て此日本とか其他外國側の新市街、租界地といふものはむしろその商況が不景氣に陷つて居る。戰爭當時は馬鹿に取引が活潑で煙も澤山で居つて景氣が好かつた。それが今日、一朝恐慌の時代に這入るといふと洵にひつそりしたものである。之に反して支那町はどうであるかと云ふに奉天の城內は素より、北京にしても、天

津にしても此城內方面に於ける取引と來てはなか〳〵活潑なもので、肩摩轂擊、車馬織るが如き狀態で、奉天の如きも城內に自分共朝早く行つて見てもなか〳〵の景氣である。奉天の馬車鐵道の如きは、城內から繰出される所の人々、各馬車の前後左右には民人恰も東京の電車の割引時間の如く鈴成りにぶら下がつて居るといふ狀態である。斯樣に支那街のみが隆盛を極めて居るといふことは世界の經濟事情と聯絡はない譯であらうか今日の樣に世間の景氣が惡くなつたからと云つてそれを一向悲觀しない。寧ろ新市街の方で不景氣になればなる程支那街の方では景氣が好くなる、御互の取引が面白く出來て居るのではないか、實に不思議に思はれる位である。奉天新市街の如きは一昨年頃迄非常な景氣に乘じて壯麗な煉瓦石造の大厦高樓がたくさん建つた。既に城內の町と連續するやうになつた。然るに今日其資本主は事業不振に踪跡を晦まして何所に行つたか行方不明である。空しく建物は殘つて、窓硝子は支那人に取られ、戸も逐されて居る、等殆ど泥棒の手に任かせてある狀態である。斯の如き大厦高樓が空家の儘で取遺されて居る、周圍ば草蓬々といふ狀態であるのは洵に悲慘であつて實に殘念に思はれる。景氣の好い時にはとかく無闇に有頂天になつて前後左右を考へずに手を伸ばしたその結果今日になつたのであらうが、支那町

に於ては景氣の好い時と云つてもそれ程有頂天にならない、其代り不況の時代に陷つても一向悲觀をしない。その所が押しも押されず泰然自若として大陸的の繁榮を持續して行ける所以ではあるまいかと思ふ。

尙此旅行は秋であつた丈に滿洲支那一帶一度も雨に遭はず、天候の都合はいつも乍ら至極好かつた。又下關に着いてから一行中の森、桝谷兩氏の好意に依り長府の乃木邸に案內され又、森氏の自邸に、或は馬關條約の時の春帆樓、或は下關商業會議所、其他港灣本島の最西端等各所の視察等に就て多大の便宜を與へられたことは幹部、並に其他團員一同の深く謝する所である。此一行は下關に上陸した時の廿名が、其後大阪で減り、京都で減り、米原でへり、名古屋で減り、東京に着いた時は九名であつた。廿日午後七時廿分一行はプラットホームに永田專務其他東洋協會側の出迎の顏觸を見て無事歸朝の挨拶を爲しニコ〳〵顏で双方歡談を交へて東京驛で解散したのである。

此の度の旅行中に於ける情況の大要は要所々々より十幾回に渡り會長子爵後藤新平氏、並に專務理事永田秀次郎氏等宛てに電報にて報告し置きたる所なるが、更に日記體にて其模樣を報告す

ることとなした。（大正十一年十一月廿二日）

二　支那視察旅行を了へて

今回東洋協會が最初の試みとして支那滿鮮視察團の計畫をなし東京其他全國各府縣に慫慂し團員二十二名を獲た。そして計畫の如く約三週間朝鮮滿洲を經て支那の視察を行つた。團員の種類は會社並に商業會議所、其他各種の實業に關係せる人々或は醫師新聞記者又は學者等の各方面に亘つて居たが、其年齡は二十臺より七十臺に至る老若打混じての團體であつた。是等の團員はその一二名を除くの外は朝鮮滿洲の近くは固より支那大陸には初めての旅行である丈に少なからぬ好奇心を持ち又それ〴〵其視察すべき方面に付ては相當豫備知識を用意して居られ、中には支那語を稽古してゐた者もあつた。さうして其の出發前多くは既にその兄弟或は親戚等よりして直接間接に是等視察地方の事情を出來る限り取調べてゐたものもあつたやうである。從つて是等の行先地に付ては相當多寡を括つてゐた連中もあつた。が概して銘々其の豫定以上の視察を遂げ得又た觀光並に買物等に付ても短日月の割合に多くの獲物を得て歸られたのである。今茲に視察を終へて歸朝したのを機會に自分として一應感想を述べて見たい。

一　朝鮮の印象

從來日本の國の內ばかりに居るものは日本の缺點も美點も本當には分らない。今の時勢に在つて種々な注目すべき事項がドッサリあるに係らず、それを意識的に感じない。ところが一と度足を內地以外に踏出して朝鮮なり滿洲なり臺灣なり或は支那なり行つて見ると、僅かばかり本國を離れた丈けであるけれども、今度は自分の目の着け所が違つて來る。大きい立場に立脚して外よりして日本を顧て見たいといふ態度になる、同時に又朝鮮滿洲臺灣支那を批評的に見ることにもなつて、それ等の綜合された智識感想で以て日本を更に又比較し反省して見るといふ態度になるのである。これは恐らく誰でも同樣である。併し其中朝鮮並に滿洲に對しては旅行の過ぎ行く行程、並に範圍がたゞ日本の勢力範圍內を進み行く丈のことであるから假令その田舍の風光並に土俗の間には或は朝鮮獨特の所、或は滿洲獨特の棄てがたい所が見出されるのであるけれども、其の旅行者の氣持に於ては大して日本內地と變りはないのである。詰り釜山に渡つて大邱京城平壤へと進み行く間は是れ卽ち日本內地の延長と變らぬ。其景色の規模の大小と云ひ、又民家の規模の小さいことゝ云ひ其他農村の狀態と云ひ、すべて大體に於て日本式である。唯幾分か之を古風

にして考へるとよいといふ程度に過ぎない、視察團一行の中にも半島を旅行してゐても一向に、日本氣分と變つた氣持にはなれないといふことを漏らして居つた者もあつた。無論この旅行が忙はしい飛脚旅行でないなら津々浦々に迄這入つて精細なる研究視察を遂げるとすれば內地の延長どころでなく反對に少なからぬ相違點を見出すべきである。けれども此度の急ぎの旅には初めての方々には遺憾ながらそこ迄視察に時間をかけることが出來ない。唯々吾々幹部に在つては是迄の度々の經驗よりして承知してゐることには種々な說明を與へ、觀察の方法等に付ても出來る丈け注意することに怠らなかつた。兎に角內地と左程變つた空氣を朝鮮で感じなかつたこれ迄進めて來たことは事實である。是は寧ろ統治上の結果から言へば是程迄に總督政治が朝鮮の沿道地帶その他を內地化せしむることに努力した効果が現はれて來たものと見られる。

全體の潮流が愛に渴し且つ又有形無形に日本式になりつゝあるといふことに想到する時には旅行者は特に朝鮮固有の臭ひを見出さうといふことの望みは段々少なくなつて行く譯である。一行中には今日の朝鮮はまだ社會の調子が非常に低級であつてお話にならぬ位未開の狀態に在るのであらうと想像して來た者もあつた。所が汽車の沿道は固より京城南大門の停車場から市中の主要

な所、又李朝時代の宮殿或は南山公園諸官衙その他の施設建造物を巡遊して其腦裏に來る印象は如何と云ふにそは全く從來の想像を裏切つたと云つてゐる。是程迄に文化的施設並に一般の設備の向上發展して居ることを見る時には日本政府より朝鮮に對する內治上の補助額抔も十分に增加してやらなくてはならないといふことを深く感じたと述懷を洩らしてゐる者もあつた。木下大阪毎日新聞記者の如き、その他これと感を同じくして居つた團員が多くあつた。

尙ほ朝鮮を視察する中には天然の光景としては金剛山或は咸鏡南北道等の僻遠の地に在つて而かも奇拔なる山紫水明の好景色を見せることもこれ亦何より朝鮮に對する好印象を與へる材料になることゝ思ふが、普通その旅行の前途に滿洲支那を控へての視察旅行には畫家詩人の一行ならばとにかく、到底是等の僻遠の地を豫定に入れることは出來ないのである。して見ると普通釜山安東間では扶餘のあたりそれから大同江の平野を見るより外には無い。大同江の光景を見るのは普通平壤に下車して萬壽臺、牡丹臺並に乙密臺の頂より大同江の平野を瞰下すのである。此方面の光景は幾分か日本式といふよりも大陸氣分が加味されて居るが、其丘陵の起伏して居る狀態、又大同江の滙流して居る狀態又朝鮮式の樓閣の丘上に其輪奐の美を呈して居る所抔は朝鮮獨特の

趣を添へわけて夕暮の景色と來ては何とも云へぬ懷かしい、玄武門に此の頃三星門と同じやうな樓屋を冠したのはよい思付きである。此方面一帶の地は寧ろ朝鮮の自然を連想せしむるのに最も好い觀光地として推奬することが出來るのである。

平壤には朝鮮の各地方の中で最も多く西洋人の耶蘇布敎に從事して居る者が多く、從つて敎會だの大學中學、女學校、小學校といふやうな文化的施設を爲して居る者が頗る多い。其の他朝鮮人で妓生學校の如き遊藝の方面の特殊の敎養を起こしてゐる。これは大いに特筆すべき立派な事業であると思ふ。平壤は朝鮮視察の中で京城に亞いで印象の深かつた所として何れも團員の記憶に新たなところである。

二　滿洲の印象

さて汽車で朝鮮の鐵道を北へ北へと進み、最早や義州から鴨綠江を渡つて安東縣へと這入る。僅かに鴨綠江の鐵橋一つであるが之で以て全然土地の氣分が違つて來る。卽ち是迄の半島氣分は去つて忽ちにして滿洲氣分が漲つてゐるやうな感じになる、今回の視察旅行は時間の都合で鴨綠江の開閉式鐵橋を夜中に渡ることになつたので朧月はあつたけれどもボンヤリしてゐた。明瞭に

鴨綠江の光風を味ふことが出來得なかつたのは遺憾であつた。若し晝間に之を渡るとか或は民船に棹し鴨綠江節を聽きながら對岸に向ひ江上の氣分を味ふことが出來れば全く此の國境の感はシミジミと感深くするのである。安東縣に這入れば市中に散見する車夫は固より路傍許多の支那人の姿を認める、さうして、白衣の朝鮮人の姿は不思議な位にその跡を絶つて居るのである。是丈けでも既に著しく氣分の相違を感ずるのであるが安東に這入ると云ふと工場は固より家屋でも何でも又自然の風光そのものも何となく規模が大きくなつてゐることが著しく感ぜられる、それ故に誰れ人も鴨綠江の鐵道一つで全然朝鮮氣分を脫却して滿洲氣分になるといふて居る。滿洲の鐵道を次第に西へ北へと進み進んで或は奉天或は撫順に、又長春吉林、鐵嶺、ハルビン、公主嶺と北滿の大平野を行き或は又奉天より南して遼陽、大石橋、大連、旅順へと南滿洲の荒漠たる平野を行きこの平野萬里の大光景を眺める時には最早や朝鮮半島氣分は全然去つて了ふ。打つて變つて大陸氣分の大きなノンビリした氣持となり、日本の隣國にこれ程迄の無限の大平野の天地が殘されて有るかといふことをつく〴〵感ずるに至るのである。併しながらこの大平野大自然を味ふ中にも吾人の過ぎ行く地帶にはいつも滿鐵の力が漲り滿鐵の御蔭ゆで何れの所にも日本人が住居を

して居り、日本人の空氣がどこ迄も擴がつて居る。又日本人の宿舍とか店舗とかが幾多も軒を連ねて居るといふ狀態である。滿洲の自然の大光景こそは目に變つて映ずるけれども心中に充ちてゐる氣分に於てはまた〴〵日本の延長地帶を進みつゝあると云ふ氣が少しも去らない。それと云ふが若し吾人が日常の用を便ずるにも日本語を操つて居れば澤山で何等の不自由を感じない。むしろ威張つて用が足せると云つても過言でない。全く日本に居るやうな氣持で居らるゝのである。唯々奉天に這入ると奉天市中に通用する貨幣が日本貨幣と値打が違つて居つて、日本の一圓は丁度奉天では此の十月頃の相場で奉天票の一圓三十五錢に當つて居つた。それ故に勘定の度毎に其錢票の換算をするに稍々骨が折れる位なことはあるが大したことはない、それも朝鮮銀行の紙幣なれば何所へ持つて行つても自由に滿鐵の沿線地方では通用する。殆ど何等の面倒がなく流通して居るのである。

滿洲でも奉天から西南に向ふとちがふ。一とたび去つて錦州山海關、秦皇島方面より天津北京になると全然支那地帶になるのであるから、最早や奉天票は通用しなくなる。貨幣は銀の大洋弗が行はれ又小洋や銅貨が用ひられる。日本の一圓はあちらの八十四錢にしか通用しなくなる。始

めて支那へ這入るときには不案内の爲めに少なからぬ不安の念の去らなかつた連中が多うかつたやうである。出來得る限り支那の事情を事毎に說明をし、又支那の大洋小洋銅貨の實物につきて又馬蹄銀のことまで講義のやうに說明することに努めては置いたけれども尙ほ且つ多少の不安を感じて居つたやうである。此の度の旅行で最も面倒であつたのは日本金又は奉天票と北京天津の貨幣の換算の事である。奉天票は大屛廉かつたのに反し北京の銀は高い。丁度北京の百弗に對して日本の百七十圓を出さなければ兩替をして呉れないといふ譯である。初めての旅行者に取つては實際の買物又は仕拂のときに之が少なからぬ苦痛であつたやうに見えた其の他小銀貨(小洋)並に銅錢(銅子兒)の取替方、之れ又日本の貨幣の如く十進法でない爲めに可成り面倒を生じてゐたやうである。小銀貨の一角の小洋は銅錢の十八枚に當り、從つて二角は三十六枚に換算されるといふ譯である。此一角は日本の十錢二角は二十錢に當るのである、然るに十錢二十錢と云つても之を銅貨との關係を見ると十進法でない。斯の如き開きを生ずる事情があつては小さな買物に面倒である。初めての旅行者に理解の出來惡い勘定のあることは無理もないことである。その上其中の一角二角、或一弗の大洋の銀貨などに多少その周圍のギザギザの磨滅して居るとか、或は

互に二枚の弗を叩き合はして見てその響きのよくない物は假令今近處で買物をした店で吊錢に貰らつて來た弗であつても、乙の店へ持つて行つて拂ふ時には贋である響きが惡いと云つて受取つて呉れない。或は兩替屋に行つて見ても拒んで換へて呉れないといふやうなこともある。詰りこのやうなことは支那に在つては普通の事であるけれども日本人からすると興味のあることである面喰ふ。その周圍の磨滅した銀貨とか或は鉛の入つた銀貨とかが無數に支那の市場には行れて居るといふことを豫め十分理解して置けば驚くことはないのである。

三　支那の印象

貨幣の問題は一行の頭を一番痛めて居つたやうであるが、それに次いでは言葉の問題である、是も豫め會話の書物を用意したり、或は錢勘定の數字等を暗記し或は買物に必要なる言葉の單語などを暗誦してゐたものもあつたので片言交りで用を辨じて行く位な程度に話の出來てゐたものはあつた。北京から歸る時などは山海關滯帮子(カオパンツ)或は錦州等の諸驛のプラットホームに降りて銘々に通辯ぬきで買物を爲し得たものが多かつた。人間は誰しも窮して來れば何とかなるもので、其語學の進歩の如き實に急速なものであつた。總べて言葉は言葉其物の巧拙よりも之を相手に向つ

て語り出すといふ元氣が大事である。勇氣さへあれば少々發音の下手だとか間違ひがあるとか云ふ位のことは小さい問題である。其の元氣勇氣を持つてぶつかればこちらは金を拂らふ方の立場に在るのであるから支那の連中に對して用を辨ずることは何でも無いことである。

思ふに吾人は態々支那迄出掛けて支那の內地を視察しその地方地方の種々の感想に耽つて居ると云ふと第一に是迄日本の國內のみに居た人の口からは內地內地といふやうな言葉は出なかつた又出る機會が無かつた。所が僅かの日數にせよ支那を視て來て日本に歸つて見ると下關へ船が着くやすぐさまどうも、內地の空氣のしつとりして居ること、又內地の景色の青々して居ること。又內地の水の淸らかなこと內地の人間の生活振りのコセツイて居ること內地の人々のよくも小マメに齷齪と働いて居ること。又內地の汽車の列車內の狹苦しいこと寢臺の狹くて短いこと、肱を張れば窓に直ぐ打つつかるといふやうなこと何かに付けて內地の箱庭式で酷い窮窟さ加減を染み〻〻感ずることについて孰れも同感である。支那や滿洲へ行つて來る迄は此の窮窟な日本の箱庭式の天地を自分の天地と考へて何も不足の不の字も言つて居なかつた。それが少しでも支那風に滿洲風にその大陸的の色揚げを經て來るといふと酷くこんどは日本の色彩が變に狹苦しく感ぜら

れるに至るといふことは一行團員の齊しく共鳴する所であつた。この心理的變化は吾人の最も意を强うするに足る點であつてこゝへ行かなくてはならぬものである。東京市中の道路が酷く惡い泥中の豫定道路だなどと評するものもあり、かやうなことを市民一般に言つて居るし、實際御互ひに之には閉口するのであるが、若しひと度大連の道路或は天津の道路、或は靑島の道路にしても臺北の大路にしても、其の他上海に行つてその租界の道路でも踏んで見れば尙更のこと、其の今日文明的に出來て居る道路であればその檐の上抔は雜巾で每日幾回となく拭いて居るといふ位なもので泥とか土といふやうな物は藥にしたくも無いといふ位に奇麗に出來上つて居るのである之を經驗して來た目から見ればたとひ一部の東京の木道は如何に進步的に出來てゐ、又日本の實際の土質からは今日の交通狀態に堪へ得ない仕方のないものであると云つて見たところで橫道や又は他の道路から下駄に付けて持つて來る泥の分量の爲め又車の爲めに損ぜられることの爲め、其他地下埋設物の堀返しで始終泥の盛返されて居る爲め洵に東京市中の道路は情けなくなる。實にこの道路の爲めに二百萬の市民の苦痛は如何ばかりかと察する、斯樣なことも隣國又は近接せる文明都市の道路に範を採り幾分か日本の道路の改善に資するやうになつてもらひたいものであ

る、此點に付ては定めし視察團の連中は大連旅順を見られたのであるから固より共鳴さるる所であらうと思ふ。

一體支那の旅行は呑氣で宜しい、すべての規模が大きいから本當の視察をするには時間が掛り意外に暇どる。急ぎの旅では唯いつも追ひ立てられるやうなもので多忙を極めるばかりである。唯しかし孰れも銘々自ら興味を以て視察をなし忙しくとも銘々我が事と思つて出掛けてゐるのであるから左程に多忙をも苦しみとは感じない。これ丈はたしかに云はれるのであるが、兎に角支那の視察旅行は海外の視察旅行中でも最も呑氣にやつて行かれる旅行であらうと思ふ。其の呑氣な旅行氣分で大陸よりして日本内地を顧みて見れば、又是位ゐ急轉直下に感想のちがつたところはない。差障りの多い。五月蠅い事の多い、さうして延び〳〵とした所の無い、義理立ての多い國である。而かも日本内地にゐる人々は之を如何に感じて居るか。恐らく何とも思つてゐないやうである。日本内地の小さい細かな義理立て人情立て、又人の風評、或は自分の心配りといふことのみで生活してゐる。之が少しでも輕減せられるやうに導いて行く者が出なくてはならぬと思ふ。誰れ人も云ふことであるが盆暮れの贈答品は罷めたい、形式的の事は總べて止めたいといふ

ことが隨分原則として又主義として、主張せられる樣になつたけれども然らば我れ自から先づ之を始めやうといふことになると親戚に對して近所に對して友人に對してどうも今年から急に止めるのも如何かなどと云ひ出だす。それ故に矢張り此の五月蠅い内地流を其儘慊らず續けて行かなければならぬといふ狀態になつて居る、此の内地の島國的の空氣も少しでも流通を付けて改善し向上せしむるといふ事の刺戟を得る爲めには吾々は歐米の美點を持つて來ることも必要であるがと思ふが、取敢へず此の隣邦よりして其點の長所を持つて來る連中の一人でも多くあることを希望するのである、此の意味からして今回の視察團は支那の空氣を吸收して來てその智識その感想で日本内地を見日本内地に刺戟を與へる、といふことは非常に吾々の快とする所である。

四　觀光と土産物の心理

支那の視察に出掛ける者は實業家であれ工業家であれ自分の仕事に關係ある方面、或は平素自分の著眼する事業の計畫等に付ての特殊なる調査材料を得るといふことは人に依つては出來ないこともない。豫め人に賴んでおいても幾分は出來る。併し多數の團體で出掛けるといふ場合には共通の興味で進む必要がある爲め特殊な調査研究は出來ないのが普通である。團體としての行動

を進行せしむる爲めには自由行動の日でない限り個人的の特殊なる希望は犧牲にしなければならぬ、是は今更ら申す迄もないことであるが、併しながら大體に通じて又共通的の興味のあることは又利益のある視察方法は固より取らなくてはならないのである。又一方から云ふとさういふ團體に視察して貰ひたい又土產話として聞いてもらひたい、讀んで貰ひたいといふので、それ〴〵平素から印刷物を造り案內記を配布したりなどして吳れて居る向きも多いのである。

視察觀光客に對して印刷物を配ることは全くよい考である、又之を土產にもらふことを熱心に希望してゐるものもある。然し印刷物の事を離れて、一般に視察團の人々が支那に行つて何を一番多く要求して居るか。肩の凝らないことで、さうして愉快に面白く獲て來ようとするものは何であるかと云へば二つある。名勝舊跡の觀光をすることと、今一つは土產の買物をしたいといふと是である、固より中には友人に會ひたいとか、公使や領事に會ひたいとか毛織會社に行つて見たいとか東拓から招待されてゐるとか、或は特殊の支那人に面會して來たいとかといふやうなことは今玆に省きその眞に觀光のことに付ては北京であれば天壇、萬壽山、紫禁城の各宮殿樓閣或は孔子廟、喇嘛寺、或は國子監、城壁等北京城內の重なる建造物、これ等は齊しく北京の土產話と

して必ず見て置くべき所であるし、又こは多く寫眞繪葉書、案內記等にも出て居る所であつて北京を後日追想する場合に有形的の思出での種になるものである。是非共是等は見て置かなければならない。或は尙時間があれば歐米人の種々なる文化的設備、病院であるとか、學校であるとか、圖書館であるとかいふやうなものもあるし或は渾天儀や天文臺の如きもの、其の他各所の芝居であるとか、手品であるとか、茶館其他の娛樂場であるとか、兎も角も土產話になる程度の所は誰れ人も之を見ておかなければならぬ又之を見物しておくことは人情である、唯だ之を見る方法の問題であるが、苟しくも支那に旅行をし、支那の城內、城外を見るといふやうな場合には出來得る限り大陸的にやることである。許すならば時間をのんびりするやうに緩くり日程を取つて支那式の堆車、洋車或は支那式の馬車に乘つて歩くに限る、出來得べくんば驢馬の脊に倚つて田舍の楊柳の並木路を鈴音賑かに歩を運ぶといふのが最も趣きを添へて居るのである、所が今回の旅行は非常に時間が切詰めてあつた爲め日數を出來る丈け短縮して、北京方面の視察は固より其他の地方に於ても絕えず心ならずも自働車を用ひた。西洋人は支那觀光の目的には殆ど自働車を用ひない、觀光の時に自働車を用ひるといふことは是は日本人の一つの癖のやうな流行である。その

進捗することは速くてよいけれどもシンミリと味ふことは出來ない、是は時間との問題であるから致方がないのであるが、若し本當に支那を見物して味ひたいといふことであるならば出來る丈け支那式の乘物を用ひるのが宜しいのである。

次は買物の話であるが、支那内地に於て近來支那の美術工藝品が著しく流行して來たことである、或は建築に或は家具などに漸次之が這入らうとして來た形跡が認められる。支那へ渡航せんとする人々に向つて近所の人或は友人親戚より何を求むるかと云へば、よい景色を見て來て呉れよといふよりは先づ私に何を買つて來て呉れといふことを必ず云ふ。學者は書物を頼み、普通の人は絹布煙草を買つて來て呉れ掛物を買つて來て呉れ、玩具を買つて來て呉れ、或は文房具を買つて來て呉れとか其他何でもよい、支那の物でさへあればよいから高くない物を色々と買つて來て呉れといふやうなことの註文が先づ一と通りの要求として出る。頼む方の人は稅關の掛り抔は何にも御構ひがないのである、頼まれる方の人は支那にどの位多く贋物が出來てゐるかを知らず又之を深く考へない。考へてゐても慣れない人であると始終、買物はツカマされるものがある。自分で知らずにゐてやられる位のことは無論覺悟をして居なければならぬ。翡翠に硝子出來の物

もあれば珊瑚樹に煉物があるし、其他寶石の珠數の如き物にも煉物が多い、支那の店は多くは暗く眞贋の別を鑑賞するに頗る困難である、殊に寺の奥や宮殿の奥抔で番人が種々な貼物を取出して内々觀光客に賣り付ける物がある。こは多くはいかさまものが主で貝た何所からか持つて來た物であるから値切れば廉く賣るに極まつて居るのである。所が初めの一つ位は本當の物を賣り付けるけれども二度目三度目に持つて來る物は玉の如く見せかけて實は煉物のツカマセ物。値段を四分の一に負けさせて買つても莫迦を見ることがある。此の手に罹らないやうに注意することが必要である。

五　泥棒市

支那で平民的の買物をするうちで最も興味のあるものは支那街の大きな所には何所にもある彼の泥棒市である。是は未明に市が立つ、時としては夜半から市が立ち早朝になると店をしまつてしまふこともある。此の市では泥棒された品物をその取られた主人がわざ〳〵其店に買出しに出かけることがある、詰り裁判沙汰などにしても迚も取戻せる譯のものでない。警察に屆けても支那といふ所は殆んど駄目な所であるから、をとなしく泥棒市に行つて、自分の盗まれた品物を見